歩くための道がある

ロム虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歩くための道がある

【Ｎコード】
Ｎ４８４９Ｍ

【作者名】
ロム虫

【あらすじ】
少年、佐倉友也はある夏の日の夜、川原で花火を眺めていた。
※１７回電撃小説大賞の一次落ち作品です。晒すので評価頂けるとありがたいです。今後に生かそうと思います。

プロローグ

プロローグ

「――これから私は、どうでもいいことから話し始めます。きっとそんなことは訊いていないのでしょうが、どうか聞いてください。あの頃のことはすべて、例えば迷路を形作る壁のように複雑に絡み合い、それとはまた異なることを大きく示しているのです。小さく下らない日々の淀みがあったからこそ、私は今私として、貴方たちにお話しているのです。

楽しいこともありました。嬉しいこともありました。けれど悲しいことや辛いことはもっとたくさんあったと思います。そんなことばかりを話していると、もしかすると私が悲劇の主人公であるかのようになってしまうかもしれません。

けれど、これだけは心に留めて置いてください。本当の悲劇とは、その悲劇を悲しんでくれる人さえいないことです。私は今、貴方にとっての悲劇を話します。けれど私は不幸ではありません。そして、悲しくもありません。耳を傾けてくれることが、いったい世界に比べてどれほど小さな幸福なのか。それを考えても、私は少しも自分を不幸だとは思えないのです。

あるいは、確かに不幸であったかもしれません。私は誰かよりも辛いことを幾つか経験しているのでしょうから、それは紛れもなく不幸なのでしょう。

ですが、私はまた誰かよりも幾らか多い幸福を経験してきました。その誰かもまた、別の誰かより幸福と不幸の両方を経験しているのでしょう。多分、私たちがやるべきなのは、全ての人にとってそれがそうであるようにすることなんです。

――話が逸れましたね。

これから私は、どうでもいいことから話します。このことは、心の中に必ず留めておいてほしいのです。私がどうでもいいことから話し始めたことを。

――それでは、話を始めましょう。

第一章　無能な卑怯者が少しだけ変わる夜

第一章　無能な卑怯者が少しだけ変わる夜

花火が打ち上げられるのを待って川原に座っていると、何かが水に落ちるような音がした。ふと気になって辺りを見回す。暗闇の中から、なにやら蠢く人影を見つけた。

月の明かりがあるので、目を凝らせばその人影が何をしているのかが分かった。川に入って、何かを探しているようだ。相当大切なものでも落としたのだろうか、この夜の闇の中でも諦めず、しぶとく水面に手を突っ込み探っている。

その人物は不意に顔を上げた。長い髪から女であることは分かっていたけど、どんな顔かはずっと下を向いているせいでよく見えなかった。月明かりに照らし出されたその顔から、大体自分と同年代ぐらいの子だと見当が付いた。そして、遠目に見た限りでは少しかわいく見えた。

僕は自分の中の下らない妄想やら発想やらを押し込んで立ち上がり、その子の方に近づく。

「どうしたの？」

頭の中は、下心で一杯だった。近づいてみても、やっぱりその子はわりとかわいい部類に入る子だ。だいたい、上の下ぐらい。それで性格も悪くなかったりすればさらにいい。まるで中学生の思いつくようなことを頭に浮かべながら、それでも黙って返事を待った。

「……探し物」

予想は的中したようだ。

「大事なもの？」

「うん。ローズクオーツの指輪」

「指輪？」
指輪と聞いて、僕は焦った。名前からして、本物の宝石のようだ。けれど、僕には自分と同年代の子、つまり高校生が宝石の指輪を持っているとは思えなかった。もしかすると、この子は自分よりも年上なのかもしれない。しかもタメ口で話し掛けてしまった。
「君、幾つ？」
「もうすぐ一七」
「ふうん……」
僕ももうすぐ一七才になるので、この子は僕と同じくらいの年齢になる。安心した途端、僕は饒舌になった。
「探すの手伝おうか？」
「いいの？」
「大丈夫。どうせ暇だし」
「じゃあ、お願い」
それだけ言って、その子はさっさと指輪探しに戻ってしまう。物足りない気もしたけど、いかにも親切で探してあげているのを装うには、これ以上話し掛けるわけにはいかない。僕はズボンの裾を捲り上げ、靴を脱ぎ、微妙な月明かりをゆらゆら漂わせる川に足を突っ込んだ。
「てっ！」
何かを踏みつけた。もしかして指輪か、と思ってその辺りを探ってみたら、何の変哲もない石だった。いきなりやる気をなくしてしまい、まずは足元を適当に探った。苔塗れの石を退け、次に苔の生えていない石を退け、最後に泥っぽい砂を掻いて探ってみた。
なんと川の水が泥水に変わり、探し難くなってしまった。
「お願い、真面目にして」
水音から察したのか、少女は怒り気味の口調で忠告してきた。
「うん、ごめん」
性格は中の下だな、と心の中で身勝手な評価を下す。

しばらく探しても見つからない。ただ花火の音と光がどこか関係ないところから届くばかりで、そのどちらも指輪探しには役に立たなかった。
「――ねぇ」
僕は後ろで背を向けて指輪を探す少女に声を掛けた。
「何？」
「ローズクオーツって、どんな色してるの？」
「分からないで手伝ってたの？」
信じられない、といったような口調だった。
「ごめん、指輪だからさ、なんかキラキラしたもの探せばいいか、みたいな」
僕の弁解は屁理屈にもなっていなくて、少女にため息さえ吐かれる始末だった。
「ピンク。ピンクの宝石」
「へえ、ローズだから赤いのかと思ってた」
当たり前のことなのに、何故か言うと自分が馬鹿らしく思えてくる。
「てっ！」
考え事をしていると、また何かを踏みつけた。
「また小石でも踏んだの？」
「うん、踏んだ」
そう言いながら、僕は踏んだものの正体を確かめようと水中に手を突っ込んだ。足元を探っていると、何か硬くごつごつしたものに手が当たった。拾い上げてみると、なんとピンクの宝石の付いた指輪だった。
「やっぱ踏んでない」
僕は途端に言いなおす。
「何それ」
「だって、指輪だから」

そう言いながら、振り向いて指輪を突き出す。少女はその指輪に気付くと、さっきまで不機嫌そうだった表情が一気に和らいだ。そのおかげか、急に少女が可愛らしくなったように見えた。
「はい」
僕は手を伸ばし、赤い指輪を差し出した。
「ありがとう」
少女は僕の手から指輪を受け取り、今までとはうって変わったような笑顔で微笑みかけてくれた。馬鹿らしいことに付き合ったかいがあったな、と少しだけ得をしたような気分になる。
「ねえ」
少しの沈黙を挟んで、僕は声を掛けた。このままだと、少女の方から先に帰ると言い出しそうだったからだ。
「何？」
「花火、見ていく？」
随分長い間探していた気がするけど、花火は今も打ちあがっているように、まだまだ続くはずだ。特に根拠はない。もしかするとそう思いたいからなのかもしれない。僕にとっての少女の好感度は、さっきの笑顔のおかげで随分と高くなっている。それで、ただ少しでも理由をつけて一緒に居たいだけなのだろう。
僕の質問に、少女は考えるような仕草をした後、
「うん」
とだけ答えた。
「一緒に見ていかない？」
駄目で元々だ。僕はいきなり大胆にもそんなことを口走った。けれど少女はその事に関しては少しも言う事はないという風で、また、さっきと同じように考える仕草をして、
「うん」
と、これも同じ言葉で返事を返してきた。
「じゃあ、とりあえず川から出ないと」
冷たいし、と僕は付け加えるように呟いた。それに対し少女は、

いいじゃん暑いし、と言い返してくる。座れないし、と言ったら、それも確かに、と納得される。
ひとまず川から出ると、僕と少女は並んで座り込む。もちろん、地面は砂ではなく砂利が敷き詰められている。
座って空を見上げると、思いのほか花火が綺麗に見えた。線香花火によく似た炎が、ちらちらと輝きながら流れ落ちていく。滝のようだな、と普通の感想を覚えた。
「君さ、隣の町の人？」
「え？」
僕の不意をつくような質問に、少女の顔はきょとんとなった。
「いや、学校で見たことないからさ、もしかして隣の町の子かな、と思って……」
喋る言葉はどんどん尻すぼみになっていく。心配になったのだ。もしもこの少女はこの町の子で、たまたま僕の記憶に残っていないだけだったらどうしよう、と。もちろんそんなはずはないのだけれど、少女のまるで訳の判らないことを聞いているような表情を見るとつい心配になってしまう。
「――うん、隣町じゃないけど、この町に住んでるわけじゃなかったの」
ふうん、そうなんだ。
僕は下らない自尊心が傷つけられなかったことに安心する。
その後は話すことがなくなってしまい、二人して黙り込んだ。何となく悪い感じの沈黙だった。自然な感じを装う為、僕は楽な体勢に姿勢を崩す。すると僕の肩が少女の肩に当たった。
「ごめん」
「うん、大丈夫」
殆どそのやりとりと同時に、花火が一旦止んだ。そのせいかさっきより沈黙は深くなる。
花火が止むと、川原は随分な暗闇だった。たぶん月が雲に隠れたせいだ。少女の横顔があるはずの方を向いてみる。何もない。いや、

見えない。僕は渋々前を向きなおした。
　しばらくすると、また花火は始まった。見た目も色も様々な花火が打ちあがる。その瞬間に目を凝らせば、爆発した時の煙が光に照らされて見える。雲かな。そう思った。そんな低い所に雲はないだろ、と否定した。
　もう二回、花火が止む時間があった。三回目かな、と思って待っていると、もう花火は打ち上がらないのだと少しずつ分かってきた。
「――終わったね」
　僕よりも先に少女が呟いた。
「うん」
　僕はつい、名残惜しそうに呟き返した。
　その効果か、少しの間少女は立ち上がりもせず、ただ暗闇の中にじっとしていた。雲に隠れてしまった月の光は弱くて、目が慣れるまで少し時間がかかった。僕は少女の方を向いた。少女も僕の方を向いてきて、視線が重なった。思わず顔を逸らしてしまうと、少女も同じように顔を逸らしてしまう。
「――あのね、私、この後用事があるから」
「あ、うん」
　ゆっくりと過ぎ去っていく花火の余韻が、突然加速して何処かに消え去った。
「もしかして、引き止めちゃった？」
　花火を見ても大丈夫なぐらいの時間があったのか、心配になって聞いた。と言うよりは、僕が引きとめたせいで少女に迷惑を掛けたのかもしれないという不安だ。同時に、そうあってほしくないという願望でもある。
「ううん、大丈夫」
　少女は笑ってそう言った。本当に大丈夫だったのか、それとも少女が僕を気遣ってくれているのか。それを知る術は僕にない。
「ごめんね、勝手で」
「謝らなくていいって。それよりも、用事に遅れちゃいけないんじ

ゃないの？」
「あ、うん。そうだね」
少女が言って立ち上がる。僕もそれに合わせて立ち上がった。
「指輪、探すの手伝ってくれてありがとうね」
「うん」
「じゃあ、またね」
「うん、じゃあね」
小さく手を振ってから、僕は少女と別れた。少女は土手を登っていき、僕はその姿を見送った。少女の姿が遠くなり、見えなくなると、僕はまたそこに座りなおし、花火の打ちあがっていたほうの星空を眺めた。
これでも僕は天文部の副部長で、少し星座に関する知識がある。北斗七星やカシオペアはもちろん、十二星座と他の幾つかの星座の場所は覚えている。だから、星空なんかを見ていても十分な暇潰しにはなる。
暇を潰す必要なんてないけど、僕はそこに寝転がった。そして空を見上げた。自分が覚えている星座の位置から、別の星座の位置を思い返してみた。けれど、全然思い出せない。思い出せないからまた思い出そうとして考え込み、やっぱりそれでも思い出せない。
考えているうちに、考え事は別の方向へと進んだ。どうして少女が『またね』と言ったのか、とか。なぜ『ここに住んでるわけじゃなかった』と過去形になっていたのか。なんて。
考えても答えは出そうにないので、僕はまた星座について考え込んだ。もう数分してから、最後に分かる限りの星座の位置を頭の中で復習して、身体を起こす。
そろそろ帰らないと、親に怒られてしまう。
「――帰るか」
誰に言うでもなく呟いて、僕は立ち上がった。

その日の出来事は、僕の中ではただの思い出になった。翌日の朝起きた頃には、すでにそうだった。そして残り少なかった夏休みも終わり、すぐに新学期が始まる。その前日には、うっかり忘れていた宿題の存在や、少しやり残したプリントのことなんかは思い出しもしたけれど、あの少女のことは少しも思い出さなかった。

そう、あの日の少女の笑顔は、まるで偶然拾った十円玉のような存在になっていたのだ。

二学期の始業式が始まる前に、朝のホームルームの時間がある。別に普段と大した変化もなく、ただ二学期最初のホームルームだということで先生の話が少し長いぐらいになるはずだった。このとき初めて僕は夏休みを思い返し、その中にある思い出を振り返るはずだった。少女と出会ったことや、その少女が別れ際に『またね』と言って立ち去ったことを。

そう――もう少し早めに考えておけば、気付いていたはずなのだ。

あの少女がどうして、もう一度僕と必ず会うかのような言い方で別れを告げたのか。住んでいる場所を訊いた時も、この町に住んでるわけじゃなかった、と過去形で言っていた。

その二つを合わせて考えれば、答えは簡単に分かるはずだったのに。

そう、あの少女は転校生だったのだ。

「――オウサカナツミです。よろしくお願いします」

黒板には『逢坂夏海』と書かれていた。

僕は目を見開いた。間違いなく、今クラスの注目を集めているのはあの日花火を一緒に見た少女だ。名前は知らない。けど、暗がりで見たときよりも綺麗な顔立ちに見えた。逢坂さん、いや、夏海ちゃんと呼んでも大丈夫だろうか。

色々な考えが頭の中を巡った。けど、一番驚いたのは少女の髪の色だ。

あの日の夜――僕の隣に居た少女の髪は、間違いなく黒かった。いくら暗かったとは言え、相当近い距離にあった。それなのに髪の色を間違えることがあるのだろうか。

しかも、『白』と『黒』を、なんて。

逢坂さんの髪は、まるで脱色したように真っ白だった。もしかして、双子だとか。それなら僕があの日一緒に花火を見た少女は、この逢坂さんじゃないということになる。

「それじゃあ逢坂、席に着いてくれ」

逢坂さんの席は、僕の後ろに用意されていた。先生は指で指し示す風もない。きっと事前に手順を話し合っているのだろう。逢坂さんは迷わずこっち、僕の席の後ろへ向かって歩き出した。

逢坂さんが近づくほどに、僕はまるで興味がないといった真似をした。逢坂さんがすぐそこまでくると、とうとうそっぽを向く。

「久しぶり、トモくん」

次の瞬間、僕は叩かれるように顔を声の方に向けた。声を発したのは間違いなく逢坂さん。他の人には聞こえないぐらいの小さな声だった。

久しぶり、ということは以前に会っているということだ。じゃあ、この逢坂さんはあの日の少女と同一人物ということになる。それなら髪の毛はどうしたのだろう。まさか、自ら脱色した訳ではないはず。いや、それよりも。

何で、僕の名前を知っているんだろう。

僕の名前は佐倉友也。逢坂さんに名乗った覚えはない。それなのにどうして僕の名前が分かったのだろう。

訳の分からないうちに、逢坂さんは席に着いてしまった。後ろを向いて話し掛けるわけにもいかず、僕は渋々前を向いた。

ちょうど先生が朝のホームルームを仕切り直した所だった。新学期も気を抜かずに勉強を頑張ってほしい、とか語り始める。

その言葉だって、一切僕の耳には届かない。

休み時間が訪れると、逢坂さんの周りにはたくさんの人が集まった。男子女子も関係ない、完全なやじ馬だ。人数にして十数人。ただの転校生に集まる人数じゃない。きっと白髪が珍しいことにも理由があるのだろう。

「逢坂さん、前はどこに住んでたの？」

「えっと、東京に……」

「どうしてこんな田舎に？」

「家族の仕事の都合で――」

「ねぇ、髪の毛は色落としてるの？」

「これは生まれ付きですけど……」

そんな風に質問が飛び交う。中にはずいぶん失礼な質問もある。いちいち聞いているのも疲れるぐらいだったので、僕はその場を離れることにした。

自分の席を立ち上がる瞬間、視線を感じた。背中のあたり。だいたいそのぐらいを向いてみると、逢坂さんが僕のことを見ていた。まるで助けを求めるような、困った目で。

けれど僕は何もしなかった。まるで何もなかったかのように視線を外し、その場を離れる。止んでいた質問の嵐も再び巻き起こる。逢坂さんは、やはり困った調子の声で受け答えていた。

こんなに気にかけているのに、どうして助けてやらなかったのか。いまさらそれが心に引っかかる。けれど結局、僕が逢坂さんを助けに行くことはない。かといって自分の席に戻るわけにもいかず、適当にぶらぶらと歩き回る。

「おい、友也」

突然声が掛かる。その方を向いてみると、そこには親友のハヤトが立っていた。ハヤトはいつから友達だったかも覚えていないぐらい昔からの友達で、小、中学校のないこの町では珍しいパターンだ。うちの高校の友達は半数ぐらいが高校からの付き合い。残りのさらに三分の二は中学校からで、あとは小学校以前。僕とハヤトの場合

は、だいたい幼稚園ぐらいからの付き合いだ。
「どうしたんだよ」
ハヤトはそう言って僕の方へと歩み寄る。
「何が？」
僕はそう訊き返す。何がおかしいのか、ハヤトは妙な笑みを表情に浮かべて話し始める。
「お前さ、さっきからブラブラしてるだろ」
その問いには首だけで頷く。
「その上落ち着きないし、かといって何かするわけでもないし。めちゃくちゃ不自然」
「うるせー」
「それも逢坂さんに見つめられた途端の事だから余計に不自然だな」
まるで全てを見透かされたような気分だった。冷静に考えれば馬鹿でもない限り解ることだろうけど、それをこうして突きつけられるのはなんだか癪に障る。
「別に逢坂さんに見つめられたとか、関係ないし。しかも見つめられてないし」
僕はすぐさま反論を返す。
「言ってろバーカ。逢坂さんがお前に『久しぶり、トモくん』って呟いたのはみんな知ってるんだからな」
ハヤトは裏声で逢坂さんの台詞を真似してみせる。普段の僕ならそのことを突っ込むところだけど、そんな余裕はない。
「マジで？　そんなに？」
できるだけ動揺を出さないように気をつけて訊く。
「ああ。だからお前が今ここでこうしてるのは、クラスの皆の目には見捨てたみたいにみえるってわけ」
見捨てた。その通りだ。僕は自分が楽なままでいたいために逢坂さんを見捨てた。逢坂さんの席を向いてみると、まだ人だかりが遠のく気配はない。あの時僕が見捨てたりしなければ、逢坂さんはゆっくり次の授業の準備ができたのだろう。小さな事のはず。それで

も、とても酷いことをしたような気持ちになる。
僕は暫くそのままでいた。何となく視線を外し難かった。ハヤトが僕を見ていることに気付くと、すぐに元の方向に向き直る。
「トイレ行って来る」
呟いたのはさらなる逃げの言葉だった。
「なあ」
「何」
「そういうの、なんて言うか分かるか？」
「知らね」
「根性なし」
「うるせー」
何を言われても、僕が逢坂さんを見捨てるのに変わりはなかった。

トイレに来たものの、何もすることがない。もともと逃げてきただけだ。トイレに来たかったわけじゃない。
ひとまず鏡を見ながら前髪を直す。最近毛先が傷んでいて、上手くまとまらないのだ。まめに直しておかないとひどい事になる。
――それにしても。
逢坂さんを見捨ててきて、本当によかったのだろうか。
あの花火の日に出会った少女が逢坂さんなら、僕を知っていても不自然ではない。先生が周りの席に座っている生徒の名前だけでも最初に紹介したのかもしれない。初対面でないのなら、いきなり愛称で『トモくん』と呼ぶこともないわけではない。
でも、もしそうだとすれば。逢坂さんは僕のことを信頼していたのかもしれない。いきなり勝手な愛称で呼ぶくらいだし、あの日は探し物を手伝いもした。どころか、初対面の人だらけの空間に放り出されているのだ。僕に対して信頼を持つのはむしろ自然なことだ。
それなのに僕は逃げてきた。しかもトイレに。もっとマシな場所だってあっただろう。それでも僕が逃げてきたのはトイレ。少なく

とも、逢坂さんに逃げている姿を見られる可能性が一番低い場所。
さらに言うと、汚い。
「はぁ……」
だんだんと自分が嫌になってくる。どうしてこんな所で髪をいじっているのか。前髪は直してしまったからもう何の用もない。それでもまだここに居座っている。鏡の前で、今度は後ろ髪を直す。何も見えないはずの後ろ髪を。
今頃逢坂さんはどうしているのだろうか。きちんと次の授業の準備はできただろうか。いや、そもそも僕のことが噂になったりしていなければいいけれど。逢坂さんを見捨てたとか、そういう噂が流れ出すのは嫌だ。
第一、そういう考えが卑怯な気がする。逃げたなら逃げたなりに堂々としていればいいのに。それさえできない自分は、なおさら卑怯だ。でも、だからといって何かを変えられるわけじゃない。卑怯だと分かっていても、逃げるのはやめられない。眼の前の小さな問題に立ち向かう力にさえならない。
――そろそろ授業が始まってしまう。
僕は髪をいじるのをやめ、トイレから出て行った。ただ一つ、だれもこのトイレに入ってこなかったことだけが救いだった。

教室に戻ると、野次馬たちはみんな自分の机に戻っていた。授業開始のチャイムが鳴る直前とはいえ、一人も残っていないのは不思議だった。授業開始ギリギリまで絡むやつだって、野次馬の中に一人か二人はいるだろう。
何にせよ、誰もいない方が席に戻りやすい。僕はさりげなく、極力当然を装って自分の席に戻った。その後ろには逢坂さん。まるで何もなかったように教科書を読んでいる。
僕は急いで次の授業の準備を始めた。間もないうちにチャイムが鳴り始める。

「――ごめんね、トモくん」
後ろから声が掛かる。どきり、と心臓が跳ね上がる。小さく振り向くと、逢坂さんが少しだけすまなさそうな顔をしていた。どうして逢坂さんが謝るのか。どうしてこんな表情をするのか。どちらも分からなかった。
「いや、その――」
何か言葉を返そうとした時。ガラガラ、と教室の扉が開いた。先生が入ってきたのだ。
「ごめん」
それだけ言って、僕は前を向く。逢坂さんが最後にどんな表情をしたかは確かめられなかった。けど、少しでも笑ってもらえたらな、と思う。
ふと、あの花火の日に見た逢坂さんの笑顔を思い出す。
『ありがとう』
そう言って微笑んだ逢坂さんは、今思い返してもとても可愛らしい。いまさらながら、あの日探し物を手伝って良かった。
またあんな笑顔が見てみたい。そんな下らないことを考えながら教科書を開いた。

昼休み。
僕はハヤトを食堂に無理やり誘う。ハヤトは弁当なので、わざわざ食堂に行く必要なんてない。それでも、僕はハヤトを引っ張っていった。誰か話し相手――と言うよりも相談相手がいなければ憂鬱さに潰れてしまいそうだった。
「お前、逢坂さんを助けなかったの後悔してるだろ」
食堂に着くなりハヤトはそう言った。いきなり胸中を言い当てられてしまう。
「うん、かなり」
いまさら取り繕っても仕方ないので、正直に語る。

「実は前に逢坂さんと会ったことがあってさ。その時にちょっとしたことで助けたから、なんか、信頼されてるかもしれないんだよな」
必要なことはしっかりと伝えつつ、あの日のことについては曖昧に言う。何となく、そんなことまで知られたくなかった。それに、わざわざハヤトが知る必要もない。
「なるほど、だから『久しぶり』なのか」
ハヤトは別のことに納得しているようで、答えになっていない言葉を一人で呟く。
「じゃあ、先に席とっとくぞ」
そして、勝手に話を変える。いくら僕の方が連れてきたとはいえ、問い掛けてきたのはハヤトの方だ。どうも納得いかない。
「うん。任せた」
けれどそんな感情は億尾にも出さずに返事をする。
ハヤトは食堂の席へと、僕は食券を交換してもらいにそれぞれ別れる。結局、答えは席についてからになった。
席につくと、早速ハヤトが話しかけてくる。
「てかさ、やっぱ会ったことあるのに無視はまずいだろ」
そのとおりだと思う。だからこそこんなにも後悔しているのだ。確かに僕が逃げて教室から出ていったのは間違いない。けど、実際にやったのはたった一度の小さな無視。それぐらいのこと、本来なら特別な理由がない限り後悔してやまなくなるはずがない。
「どうしよう、これからでも話しかけてみようか」
せめて少しでも逢坂さんに楽になってもらえたら。そう考えると、やっぱり自然に話をするのが一番いいだろう。
「むりむり。お前そんなことできるタイプじゃないだろ」
「まあ、そりゃそうだけど……」
僕がそんなに器用なタイプではないことぐらい、自分でもわかっている。ただ、それでも何かしないといけない気がしてならない。
「やっぱさ、なんかしないとまずいだろ？」
そうハヤトに言い返すと、難なくハヤトにこう言い返される。

「別に。そんなことないだろ」
あんまりにも淡白だったので拍子抜けしてしまう。
「何だよそれ、僕に悪者になれってか？」
「いや、もうお前充分悪者だし」
「まあ、そりゃ、確かに」
「無視したなら無視したで、覚悟すりゃいいだけだろ。悪者らしく。俺は悪者です、ってな。どっかでその分取り返せばいいんだよ」
ハヤトの言うことにも一理ある。それに、僕自身も同じようなことを少し考えた。
「そもそも、悪者になりたくないって発想が暗い」
「うるさい。暗くて悪かったな」
そのやり取りの後は、もう逢坂さんの話題は出なかった。

放課後になって、逢坂さんはすぐに職員室に呼び出された。なんでも、保護者の方が来ているとか。帰りのホームルームで先生がそう言ったのだ。心なしか逢坂さんの表情が曇っていたような気もしたけど、本当のところは分からない。
僕はなんとなく、教室で逢坂さんが戻ってくるのを待っていた。荷物は教室に置きっぱなしだったので、このまま帰ってしまうことはないだろう。もしかするとかなり遅くなるかもしれないけれど、それでも僕は待つつもりだった。
正直なところ、逢坂さんに謝りたいのもある。無視してごめん、と一言言って、許してもらいたいのもある。けど、さすがにそんなだらしないことはできない。ただ知り合いってだけの、可愛い女の子に対してなら特に。
僕の目的は、せめて逢坂さんにとっての知り合いから友達になることだった。そうすれば、逢坂さんもこれからの学校生活に馴染みやすくなるだろうし、僕も今日の無視のお詫びができる。まあ、これは半分の目的だ。もう半分の目的は、もちろん可愛い女の子と友

達になりたいという単純なものに他ならない。
けれどしばらく待ってみても、逢坂さんは戻ってこなかった。
僕も今日は部活が――天文部の部会があるのでこれ以上は待てない。今日が新学期最初の日ということもあり、教室にいるのは僕だけ。ほとんどの生徒が部会で、運動部は練習。帰宅部は休み明けのだらけた感覚を理由にすばやく帰路についた。僕一人がここにいるのは、ある意味当然ではあった。
仕方ないので僕は自分の席を立つ。部会に向かわないといけない。荷物を置いていても仕方ないので、カバンを持って教室を離れる。
本音を言えば、逢坂さんと話さずにすんでよかったようにも思う。もともとあまり気乗りはしなかった。それを、ちょっとした欲求をきっかけに実行しようとしていただけだ。逢坂さんと友達になれなかったのは残念だけど、何を話していいかも分からなかったので、もし話ができても友達にはなれなかっただろう。そう、結果的にはこれが一番良かったのだ。
ところが、廊下に出たところで逢坂さんと鉢合わせた。
「あ、トモくん」
逢坂さんは不意を突かれたような声を漏らした。僕は実際に不意を突かれたので、何の言葉も出ない。ただ無視して立ち去るわけにも行かず、愛想笑いをこぼしながら立ち止まった。
「どうしたの、今から帰る？」
意外にも、逢坂さんは気さくに話しかけてきてくれる。うれしくもあるけれど、僕の中では戸惑いの方が大きい。
「いや、これから部会があって――」
「ああ、そうなんだ。何部？」
「天文部。一応、副部長」
「それってすごいね。部員って何人ぐらいいるの？」
「二人」
一瞬、二人の間に微妙な空気が流れる。逢坂さんもすごいと言っておきながら、後からそれを言い直すわけにも行かないだろう。僕

もすごいと言われておきながら、部員がたった二人だけというのも恥ずかしい。
「逢坂さん、前の学校では何部だった？」
この場をごまかすように、僕は質問を口にした。
「私ね、帰宅部だったの。家の都合で、忙しい部活とかは入れないから」
「ふうん……」
その言葉を聞き、くだらないことを思いつく。
「じゃあさ、天文部に入らない？」
「え？」
唐突な僕の提案に、逢坂さんは驚いているみたいだった。無理もない。いきなり部活の勧誘だ。僕だって同じ状況なら驚く。
「うちの部活さ、部会が月に一、二回あるだけなんだ。それも部長の気まぐれで。たいした事やるわけじゃないから、参加しなくても大丈夫」
僕がまくし立てるように説明すると、逢坂さんは考え込むような仕草を見せる。けれどそれもほんの僅かな時間で、
「うん、それなら……とりあえず、見学ぐらいなら」
とすぐに返事が返ってくる。
「よし、それじゃあ、ついてきて。部室に案内するから」
そう言って、僕はすぐさま歩き出す。逢坂さんは追いかけるように小走りをして、僕の隣に並ぶ。しばらく歩いてからやっと、僕は逢坂さんと普通に話ができていたことに気付いた。思ったよりも、普通に話せていた。この調子なら、案外簡単に友達になれるかもしれない。あるいは、逢坂さんはもう友達だと思ってくれているかもしれない。
淡い期待のような感情を抱きながら、僕はゆっくりと部室を目指した。

部室に入るなり、一人の少女の手厚い、あまりにも手厚い歓迎が待っていた。
「遅い、友也！」
声とともに顔へ目掛けて飛んできたのは、スーパーボール。よけてしまうと後ろにいる逢坂さんに当たってしまうので、腕で受け止める。冗談で投げたようには思えない衝撃が腕に走る。これをもしまともに顔面に食らえば、いったいどうなるのだろう。
「ごめん、鈴佳」
そう言いながら、僕は片手で謝るような仕草を見せる。これを見た少女――秋元鈴佳は、一応は機嫌を取り戻す。
「……で、後ろの子は？　転校生でしょ」
鈴佳は面白そうな表情でそう尋ねてくる。転校生だとわかったのは、おそらく髪の色のせいだろう。白髪は珍しい。転校生も珍しい。その二つが合わさっているのだ。噂が別クラスの鈴佳にまで流れていても不思議ではない。
「うん、見学に来たんだ。ね、逢坂さん」
「うん」
初対面の鈴佳の前だからなのか、少しだけ言葉が堅い。問題になるほどではないし、すぐに慣れるだろうから、あまり気にしないでおく。
「逢坂って言うんだ。私、部長の秋元。秋元鈴佳」
鈴佳は言いながら手を差し出す。
「あ、うん。よろしくね」
逢坂さんはその手をすぐに握り返す。動きは少し躊躇っていたけど、言葉に躊躇いはない。なんだか、不思議な感じだ。
「それじゃあ、部会始めようよ」
僕が促すと、鈴佳はあっさりと頷く。そして部室の奥へと歩いていく。
「ねえ友也。今日さ、お菓子ファミリーサイズじゃなくて小さいやつ二袋なんだよね」

「え、今日に限って？　どうして」
「あんたコンソメ味食べないでしょ？　けど、私がなんとなくコンソメ味食べたかったの」
「うわ、なんだよそれ」
「いいじゃん、別に。で、どうする？」
「二袋を三人でつまむのがいいんじゃない？」
「まあ、それもそうだね」
そして、戻ってきた鈴佳の腕に抱えられているのは、二袋のポテトチップスと、大きなボトルの炭酸飲料。どちらもお菓子コーナーや飲料水コーナーに行けば必ずあるような定番品だ。
「えっと、どういうこと？」
事情を知らない逢坂さんは困惑したように尋ねてくる。
「うちの部会は、半分お菓子パーティなの」
「ほとんどだろ、ほとんど」
冗談っぽく言った鈴佳の言葉を、一部分だけ言い直す僕。そして逢坂さんに向き直り、補足の説明を語る。
「うちはさ、部会って言ってもたいしたことはやらないんだ。次の天体観測の予定を決めたら、あとは話をしながらお菓子を食べるだけ。日によってはお菓子を食べるだけのときもあるし」
「あ、何よ、それじゃあうちがだらしない部活みたいじゃない」
「やってることがだらしないってのは自覚あるんだ」
「う、いや、それは」
慌てて誤魔化そうとする鈴佳。ただ、どれだけ誤魔化しても事実には何にも変わりない。かなりだらしない、本当に部会かどうかも怪しい部会。
ふと逢坂さんの方を向いてみれば、僕と鈴佳のやり取りを聞いて笑っていた。どうやら少しでも楽しんでもらえているらしい。鈴佳も逢坂さんの様子を見ると、安心したような笑みをこぼす。
「それじゃ、次の天体観測の日を決めよっか」
そう言いながら、鈴佳は普段自分が座っている椅子に座る。僕は

逢坂さんの分の椅子を用意してから席につく。逢坂さんもそれに倣って座る。三人が部室の机を囲むように座った。僕と鈴佳が向き合う方向で、逢坂さんは僕の右手側。ちょうど部屋の奥側だから、いかにもお客様らしい。

「で、予定は？」

僕はまず鈴佳にそれを尋ねる。予定とは、部活動の顧問の休日――あるいは平日放課後の予定のこと。夜間の活動なので、基本的に天体観測は顧問がいないと行えない。だから、顧問の予定に合わせないと天体観測の日は決めようがないのだ。

「わかんない」

「はぁ？」

予想していなかった鈴佳の答えに、僕は思わず不満げな声を漏らす。

「しょうがなかったの。放課後に職員室へ行ったら、もうもぬけの殻だったから」

「またか……これで何度目？」

「三回目」

「嘘、四回目だろ」

「残念、あんたが入部するより前にも一回あった」

「駄目じゃん」

結局のところ、先生には五回も逃げられているわけだ。

天文部の顧問であり、地学の教師でもある甘木有希子さん。通称ゆっこさん。教師なのに先生と呼ばれるのが嫌だったり、授業を頻繁に自習にしたり、隙を見ては街で遊んでいたりする。簡単に言えば不謹慎な教師だ。今日のように部会に出席したくなくて逃げるのはいつものこと。天文観測に時間を食われるのも嫌だそうで、下手すれば昼休みにもいなくなることがある。が、さすがに学校からは抜け出せないので、基本的には放課後までに先生を見つけ、時間のある日を聞きだせばいい。

だが、今日はそれができなかったらしい。先生を探そうとも思っ

ていない僕に言えることじゃないけれど、鈴佳は何をしていたんだろうか。昼休みに探していればすぐに見つかっていたはずなのに。
「とにかく、予定を先に決めるから」
「いや、それじゃあゆっこさんの時間と合わないだろ」
「いや、私に考えがあるから。まあ、任せなさいよ」
鈴佳は自信ありげに胸を張る。本当に鈴佳にどうにかできるのかはわからない。けど、このまま話を続けないでいるのも時間がもったいないだけだ。仕方なく鈴佳の言うとおりにする僕。
「それで、いつ頃にする？」
僕は鈴佳に訊く。ため息交じりの言葉にも、鈴佳は嫌な顔ひとつせずに答える。
「逢坂さんもいるし、来週の土曜日とかいいんじゃない？」
「え、でも私部員じゃないから――」
「いいのいいの。どうせこれから部員になるんだから」
一方的に話を進める鈴佳。逢坂さんは困惑気味で、鈴佳の強引さに翻弄されているようだ。まあ、当然といえば当然だろう。鈴佳ほど強引な人間を、僕も一度だって見たことはない。
ただ、確かに鈴佳の提案は妥当な案だった。土曜日は午前中に補習があり、学校には全員が通わなければならない。昼食を食べ、機材の準備をして、先生の車で近くの山の展望台まで行く。週間天気予報では土曜日は曇り気味だったはずだけど、それが当たるとは限らない。それに、来週には新月になる日が入っているので、空は暗いはず。
「じゃあ、そんな感じで」
僕はさりげなく鈴佳の言葉を肯定する。それは来週の土曜日に天体観測をすることに対するもの。だけど、同時に逢坂さんに入部して欲しいという意思表示でもある。すると逢坂さんは、仕方なさそうに呟く。
「……もう、分かった。入ります。天文部」
その言葉に、鈴佳は満面の笑みとそれに劣らない声でこう応える。

「よっし、さすが逢坂さん！」
鈴佳のハイテンションにやや戸惑い気味の逢坂さん。だけど、どこかその表情は楽しそうでもある。それを見ていると、自分のやったことも間違いじゃないんだな、なんて思うことができた。

お菓子パーティも終わり、鈴佳は一人で先に帰ってしまう。近くの展望台の夜間使用許可を、市役所に取りに行ったのだ。その仕事は任せておき、僕は逢坂さんと一緒に帰ることになった。鈴佳以外の女の子と一緒に帰るなんて久しぶりのことだから、けっこうどきどきする。
「ごめんね、逢坂さん。なんか無理やり入部させたみたいで」
「みたい、じゃなくて本当に無理やりでしょ？」
案外手厳しい逢坂さんの反応に、僕は苦笑する。「まあ、別にいいんだけど」と逢坂さんが言葉を付け足した途端に不安が拭われる。
「ところでさ、土曜日は大丈夫なの？　ほら、家の都合で忙しい部活には入れないとか、そんな感じのこと言ってただろ？」
後ろの言葉は、逢坂さんが事情を飲み込んでいないような表情をしていたから付け加えた。最後まで言ってから、やっと逢坂さんは頷く。
「うん……たぶん、大丈夫。今のところ予定はないから」
「そっか、それじゃあよかった」
せっかく逢坂さんのために組んだ日程だ。肝心の逢坂さんが来れないとなったら話にならない。そもそも、せっかく入部してくれたのだ。せめて、できるだけ早く天体観測の楽しさを知ってもらいたい。
とは言うものの、僕もあまり天体観測が好きなわけではない。どこか楽な部活動がないか探していたときに、部員人数ゼロという部活を見つけた。ただそれだけの理由で天文部に入ったのだ。この時は、天体観測をしたくて入部する新入生――つまり鈴佳のことは少

しも考えていなかった。
鈴佳の天体観測に付き合って、星座の位置も少しは覚えた。今ではすっかり天体観測に慣れて、星空を見るだけで三十分ぐらいは暇にならずに済む。
「私、こっちだから」
ふと、逢坂さんが進行方向と別の道を指し示す。家がその道の先にあるのだろう。引き止める理由もないので、僕は素直に手を振った。
「それじゃあ、また明日」
「うん。バイバイ」
立ち去っていく逢坂さんを少しの間見送って、再び歩き始める。普段と変わりない帰り道。なのに、どこか物足りないような気分になる。むしろ逢坂さんこそ余計なものなのに、どうしてだろうか。
きっと久しぶりに女の子と一緒に帰って浮かれているせいだ。そう解釈して、考えるのをやめる。そしてなんとなく空を見上げる。まだ空はうっすら明るく、星が見えるほどの暗さではない。街明かりもあるので、ここからでは星は見えそうにない。もう少し歩けば街を抜けて、田舎道になるのでだいぶ変わる。空を見るとすればそこの方が向いている。
ただ、この街で一番星空を眺めるのに向いているのは、川沿いだ。それも、少し上流に上ったところ。山の展望台よりもずっと近いし、街頭も川辺に寝転がれば堤防で隠れるので暗さは充分。冬は少し寒いけど、山の頂上ほどじゃない。夏は涼しくて快適。まさに、天体観測にはもってこいだ。
どうせなら、逢坂さんをそこに連れて行ってあげればよかったかもしれない。そんなこと考えたところで何の意味もないけれど、僕は後悔した。せめてもう少し早く思いついていれば、帰る逢坂さんを呼び止められたのに。
いや、そもそも呼び止めても逢坂さんには迷惑だったかもしれない。そう考えると、呼び止めなくて正解だった。時間がなかったか

もしれないし、時刻も遅い。そしてあんまり遅くなると危ない。考えるほど、逢坂さんにとって都合が良かったと感じる。そして、その方が自分の気持ちが楽になる。
割り切っている、というよりも、言い訳している、といった感じ。僕の癖で、少し考え事をするとすぐにこういう結論に落ち着いてしまう。
――まだ、逢坂さんはそれほど遠くに行っていないだろう。走って追いかければ呼び止められる。それに、川の方向には逢坂さんの入った道からでも行ける。今からでも、呼び止めに行くことはできる。
けれど、僕はしなかった。今更呼び止めるのも、何か変な気がする。確かに夜空を見せてあげたほうが、天体観測の予習にもなるだろう。けど、面倒だった。そこまでして、もしも断られたりしたら。そう考えると、どうしても行く気にはなれなかった。
「――おい、お前」
後ろから、乱暴な声。驚いて、素早く後ろを振り返る。不良に絡まれたのか。そう思い、すぐに逃げる方法を考え始める。けれど、目に入ったのは普通の男の人だった。服装はスーツ。どこかの会社員だろうか。それにしては、服の着こなしが雑だ。着崩しすぎている。
「白い髪の子が、今どこにいるか知らないか？」
「逢坂さんのことですか？」
思わず答えてしまって、しまった、と思う。こんな素性の分からない男に、逢坂さんのことを知っていると明かしてしまうなんて。この人が何者なのか聞いてからのほうがよっぽど良かった。
「なんだ、夏海の友達か」
すると、男は急に態度が親しげになる。
「あいつなあ、今日は早く帰って来いって言ったのに、まだ帰ってないんだよ。今日あいつには用事があるってのに」
男の言葉に心臓が跳ねる。逢坂さんを部会に誘ったのは間違いだ

った。廊下ですれ違わなければ――そもそも逢坂さんを待たなければよかった。急に後ろめたくなり、男に対して発する言葉がなくなる。

「なあ、夏海が今どこにいるか分かるか？」

「えっと……ついさっき向こうの角を曲がって帰りましたけど」

「本当か？　サンキュ」

男は礼も途中で走り出す。向かう先は、逢坂さんが曲がった道。距離はあるけれど、走れば追いつくだろう。運が良かったのか悪かったのか、男は逢坂さんと僕が一緒に帰っていた光景を見ていないらしい。見ていれば、逢坂さんが道を曲がって帰ったことも分かっていただろう。

それにしても、あの男は何者なのだろうか。逢坂さんの親にしては若いし、彼氏にしては老けている。そもそも、顔がまったく似ていないので家族の可能性は低い。

親戚か、あるいは両親の仕事仲間、とか。そのあたりが妥当なラインだろう。

考えるのをやめ、再び歩き始める僕。今日はいろいろなことがあった。早く家に帰って休みたい。そういう意味でも、川に逢坂さんを誘ったりしなくて良かった。

なんとなく空を見上げる。そろそろ星が見えてもいい暗さになってきたけど、街明かりが邪魔で何も見えない。早く家に帰ろう。歩く早さがほんの少し早くなる。

ただ、一瞬その足が止まった。

理由は分からない。けれど、無意識のうちに足が動くことを止めていた。すぐに僕は歩き出す。ただ、その歩幅も歩調もさっきのようには行かない。まるでもたつくようにゆっくりと動く足。

僕はそのまま、ゆっくりと家に帰った。

第二章　動く心

第二章　動く心

やがて、天体観測の日がやってきた。
逢坂さんはクラスに幾らか馴染んできたし、僕も逢坂さんと自然と話せるようになった。まだ時々ぎこちなくなることはあるけれど、この間と比べればよっぽどましだ。
心配だったのは、ゆっこさんの都合が合うかどうかだった。鈴佳の言っていた『考え』が何か分からなかった分なおさらだ。
けど、当日にその心配は解消された。
土曜日の朝、ゆっこさんのところに僕と鈴佳は向かった。ゆっこさんのデスクは職員室の隅にある。
鈴佳曰く、まだゆっこさんに天体観測の日程のことは報告していないらしい。今日、土壇場で報告することに意味がある、とか。
とにかく、僕は話を合わせろといわれて引っ張ってこられた。
「いい、何も考えずにただ話を合わせてくれたらいいからね？　私が変なこと言っても表情変えずに合わせてよ」
「分かった、分かった」
職員室に行くまでの間に、そんなことを裏で合わせた。
職員室に入ると、ゆっこさんは僕と鈴佳を見つけて手を挙げる。
「よう」
鈴佳はゆっこさんのデスクに早足で近づいていく。僕もそれを追うように歩く。職員室には授業の質問などで他の生徒も訪れている。当然のことだけど、用もなく訪れている生徒はいないようだった。
「ゆっこさん、天体観測の日、決めたんで報告しに来ました」
「へえ、いつ？」

「明日です」
嘘だ。一瞬にして僕は緊張する。こんな嘘を吐くなら、最初から言ってくれればいいのに。
「……ああ、悪い、明日は用事があるんだよ」
「え、そんな！」
鈴佳の完璧な演技。どこでそんな技術を手に入れたのか、本当に悔しがっているように見える。もっとも、ちょっと大げさな気もするけど。
「いや、悪いな。どうしてもはずせない用事なんだ」
「でも、もう夜間活動の申請書も出しちゃったんですよ？」
ちなみに、こういった書類は顧問の判子と署名が必要だけど、うちは顧問がこれなので判子と署名は偽造している。それも、顧問公認で。
「あー、本当に悪いな」
「どうにもならないんですか？」
「ああ、こればっかりはどうしようもないな」
「あーあ、新入部員の子がいるから、早く天体観測に行きたかったのに」
次第に鈴佳は話の方向を変え始める。
「ねえ、友也」
「あ、うん」
突然のふりに驚きながらも、できるだけ自然に返事をする。ゆっこさんも特に違和感は覚えなかったようだ。
「じゃあ、なんで今日にしなかったんだ？」
むしろ、ゆっこさんはそっちの方を気にしたようだ。これには鈴佳が残念がるような仕草で答える。
「日曜日のほうが先生の都合がいいかと思って」
ここまできて、やっと鈴佳の企みが理解できた。ゆっこさんは、とても意地を張るタイプの人間だ。ここまで言われたゆっこさんが口にする言葉なんて、ほとんど分かりきっている。

「馬鹿だなあ、今日にしとけば予定なかったのに」
やった。僕は心の中で呟く。うまくいった、と。ただ、鈴佳はここで迂闊に話を進めるより、確実にゆっこさんを包囲するつもりだった。
「本当ですか？」
まるで驚いたようなふりをしながら言う鈴佳。ああ、と言いながら頷くゆっこさん。
「今日は特に仕事も残ってないし、誰かと遊んだりする約束もしてないからな。本当に暇なんだよ。家帰ってゲームでもするかな、って思ってたぐらいだからな。もし今日が天体観測だったら間違いなく付き添ってやれたのに――って、どうした？」
鈴佳はニヤニヤと笑いながらゆっこさんの話を聞いていた。その様子にゆっこさんは訝しげな声で問いかける。自分が勝ったと思った瞬間、この様子だ。呆れる。鈴佳にも、ゆっこさんにも。
「実は嘘なんです」
「はぁ？」
「天体観測、本当は今日なんですよ？」
途端に、ゆっこさんの表情から笑いが引いた。頭の中が真っ白になったかのように、ゆっこさんは身じろぎ一つしなくなった。
「夜間活動の申請書も明日じゃなくて今日で申請してます」
「お、お前……」
言葉の出ないゆっこさん。当然だ。こんな単純な策に引っかかって、自分の首を絞めてしまったのだから。
「――天体観測、楽しみですねえ」
鈴佳のわざとらしい科白に、ゆっこさんもわざとらしく頷いて返した。その口からは、ただ乾いた笑いが漏れるばかりだった。
一つだけ疑問なのは、なんで僕がここに連れてこられたのか、だ。
夜になり、天体観測に出かける。ゆっこさんの車に三人とも乗せ

てもらい、近くの山の展望台へと向かう。後部座席に座った僕と鈴佳で望遠鏡の入った箱を膝に載せ、抱えている。これは、望遠鏡の鏡筒を守るためだ。衝撃に弱いので、こうしていないと車の振動やカーブした勢いで壁にぶつかり、中が駄目になる。……と、鈴佳から聞いた。

山道を登ること十分。街からも離れていて、充分暗い。頂上付近に作られている展望台までやっと辿り付いた。

「――望遠鏡、出すよ」

鈴佳の言葉にふと我に帰る。そして自分が外を妙に見入っていたことに気付く。

「ごめん、今開けるよ」

僕はそう言って、自分の右側のドアを開けて、慎重に外へ出る。ゆっこさんの手も借りながら、丁寧に望遠鏡を外へ出した。箱の中にはけっこうな額の望遠鏡が入っている。去年の部費の殆どを使ってもまだ足りないぐらいの代物。少し前の天文部が部費の積み立てと徴収で買ったものらしく、古くなっている部分も所々見当たる。

望遠鏡が外に出ると、やっと鈴佳が車から降りてくる。

「……それじゃあ、組み立てようか。夏海ちゃんは見てていいよ。でも、しっかり覚えて次からは手伝えるように」

「うん、鈴佳ちゃん」

車でここまで来る間に、逢坂さんと鈴佳はお互いに名前で呼び合う約束をしていた。さっそく呼び合っているところを見ると、なぜか妙にむず痒い気分になる。そのうち慣れてしまうだろうけど、今のところは違和感を覚える。

僕と鈴佳で望遠鏡の殆どを組み立てる。ゆっこさんは車に戻って休憩しているので、組み立ては手伝ってくれなかった。

望遠鏡の組み立ても終わり、やっと天体観測を始められるようになった。

「それじゃあ、何から見る？　……って、望遠鏡使っても月ぐらいしか見るものないけどね」

鈴佳は逢坂さんの方を向いて言う。僕も視線を逢坂さんの方に向ける。
「それじゃあ、月を見てもいいですか？」
「もちろん。望遠鏡の使い方教えてあげるからこっち来て」
そうして、鈴佳は逢坂さんに望遠鏡の使い方を教え始める。焦点の合わせ方や、大まかな方向の合わせ方。その間僕は特にやることがないので、星空を見上げて時間を潰す。記憶にある星座を探してみる。半分ぐらいは見つかったけれど、他は無理だった。また今度覚え直そう、と考えながら、漠然と星空を眺めた。
「すごい、月が動いてるのが見える！」
不意に、逢坂さんの興奮した声が耳に入る。視線を空から外し、声のする方に顔を向ける。
「でしょ？　これぐらいの倍率の望遠鏡なら、月が動いてるのも見えるからね。クレーターも見えるでしょ？」
「はい、ちょっとぼやけてますけど」
「あ、それは焦点があってないんだと思う。焦点合わせるツマミ――ほら、そこの黒いやつ使って合わせて」
「はい――あ、月が逃げる！」
「ほら、追いかけて。焦点合わせながら追いかけないと話にならないからね？」
「はい！」
二人は楽しんでいるようだった。邪魔をするのも悪いので、僕はまた星空に視線を戻す。立ったままだと首が疲れるので寝転がってみる。なかなか居居心地が良かったので、そのままぼうっとしている。鈴佳と逢坂さんの話し声は、意識しなくても耳に入ってくる。
「本当、クレーターまで見える！」
「どう、楽しい？」
「はい、こんなこと初めて！」
逢坂さんが楽しんでいるようなので、僕はゆっくりと目を閉じる。しばらく望遠鏡は使えそうにない。休みながら待つことに決める。

週末の夜ということもあり、疲れはかなり溜まっている。このまますぐにでも眠ってしまうそうだ。
「あ、友也、何寝てんの！」
危うく意識が落ちかけているところに、鈴佳の声。はっとして、目を見開く。
「さんきゅ」
「何が？」
「起こしてくれて」
「いや、寝るな」
このままだとまた眠ってしまいそうなので、仕方なく体を起こす。
「トモくん、疲れてるの？」
「いや、まあ、週末だからね」
もちろん、鈴佳にいろいろと雑用を任されて疲れたということもあるけれど。望遠鏡を倉庫から出して、車に載せるまでは全部僕一人の作業だった。だから体力的にも疲れている。
「そんなに疲れてるなら、車で休んでたら？」
珍しく、鈴佳から僕を気遣う言葉。きっと逢坂さんとの話が楽しかったから機嫌がいいのだろう。
「じゃあ、そうさせてもらうよ」
言葉に従い、僕は車へ戻っていく。

――ふと気付けば、外に鈴佳の姿がなかった。逢坂さんが一人、望遠鏡も使わず空を見上げている。携帯電話で時間を見れば、もう三十分は時間が過ぎていた。
「起きたか？」
ゆっこさんは僕よりも先に起きていたようで、声がしっかりとしている。煙草を吸っていたようで、車内は少し煙草の匂いがする。外で吸ってきたのだろうけど、戻ってきたばかりだったら匂うのも仕方ない。

「鈴佳は、どこ行ったんですか？」
「トイレじゃない？」
「ああ、なるほど」
この展望台の近くにトイレはない。車では入れない小道をかなり歩いた場所に一つあるぐらいだ。トイレに行こうものなら、十分は帰ってこない。
女の子を一人にしておくのも悪い気がしたので、僕は車から出る。
「口説いてくるのか」
「違いますよ」
まるでおっさんのようなジョークに苦笑いを返し、車の扉を閉める。
逢坂さんの隣までゆっくりと歩いていく。夏が終わったとはいえ、まだ暑さは残っている。冷房の効いた車内から出て、じんわりと痺れるような感覚が身体を包んでいる。僕が近づいていることに気付いた逢坂さんはこっちを振り向く。
「何してた？」
僕はできるだけ自然な質問を口にする。
「特に。普通に空を見てただけ」
「ふうん……面白い？」
「もうちょっと星座が分かれば面白いかも」
「なるほど、それもそうだ」
当たり前のことに納得して、会話が止まる。
逢坂さんの隣に、少し間を空けて座る。空を見上げると、星が輝いている。幾つか名前の分かる星があって、他の殆どは分からなかった。それでも星空は充分綺麗だけど、どこか勿体ない気もする。
「――あ、そういえばさ」
ふと、思い出したことを口にする。以前から機会があれば訊こうとしていたことだ。
「逢坂さん、どうして最初から僕のこと『トモくん』って呼んでたの？」

「あ、それはね」
恥ずかしそうに笑う逢坂さん。照れているのだろうか。可愛いな、と思ったせいで僕までも恥ずかしくなる。
「友達になりたかったから――なんだ」
「友達？」
「うん。先生にね、写真と一緒のクラス名簿見せられて、近くの席の子を教えてもらったの。そうしたら、トモくんの顔があったのね。で、一応顔見知りだし、早く友達が欲しかったから。――前の学校では髪のせいで友達少なかったから、今度は自分から積極的にいこう、って思って」
「ふうん……それって、いじめ？」
髪のせい、友達が少ない、というキーワードで連想された内容をそのまま訊いてみる。
「違うよ。遠慮されてただけ。話しかけたら、普通に話もできたし」
「ああ、それならよかった」
僕が安堵を露わにすると、なぜか逢坂さんに笑われてしまう。妙に楽しそうな笑い方だけど、どうも自分が笑われているというのは気分が悪い。
「どうして笑ってるの？」
「なんだかんだで、トモくんって優しいよね」
「そ、そんなことない！」
優しい、なんて言われると恥ずかしくなる。実際のところは世話を焼いたり誰かのために手を貸している自分が好きなだけでしかない。そこを褒められると、嘘を吐いているような感覚に陥ってしまう。嘘を吐いている自分が恥ずかしくて、すぐに否定してしまうのだ。
「でも、見ず知らずの私を助けてくれたでしょ？」
けれど、逢坂さんは負けずに褒め続けようとする。
「花火の夜のこと？」
「うん」

「でも、あれはある種の下心があったからで……」
「分かってる」
「うわ、それも嫌だな、なんか」
もちろん、ばればれだったとは思うけど。探し物にあまり真剣じゃなかったし、探し物が終わってもすぐには帰らなかったし。
「でもね。その下心が助ける方向に向くってことは、トモくんが優しいからじゃないかな」
「ううん、違うと思うけどなぁ……」
「別にいいでしょ、優しくても」
「いや、優しくないからだめ」
「じゃあ、間をとって普通で」
「なんだよそれ」
話に落ちがついて、二人とも空に視線を戻す。まだ鈴佳は帰ってこないのだろうか、なんて考える。僕が起きる直前にトイレに行ったのだとしても、そろそろ帰ってくる頃だ。
「――あとさ」
ついでにもう一つ、以前から気になっていたことを訊こうとする。どうして、髪の色が変わっているのか。
「なに？」
再び僕のほうを振り向く逢坂さん。その髪の生え際が黒くないことから、やっぱり脱色ではないということが分かる。そもそも髪の毛質からして脱色ではないことも明らかだ。普通、こんなに色を抜けば髪はぼろぼろだし、ゴムみたいに弾力があって伸びるようになる。どうみてもぼろぼろではないし、むしろ綺麗な部類に入ると思う。逢坂さんの抜けた髪を引っ張ってみたこともあるけど、ゴムのように伸びたりはしなかった。
「――この前さ、逢坂さんの知り合いに会ったよ」
けれど、口から出てきた質問は別のものだった。なぜか、髪のことは訊いてはいけないことのような気がした。だから訊かない。単純な話だけど、どうも自分でも逃げたような気がして仕方ない。こ

の場合は逃げて正解だったのかもしれないけど、それでも。
「いつ？」
「ほら、部会のあと一緒に帰ったでしょ。その後」
「どんな人？」
「えっと、スーツをかなり着崩した、男の人」
「もしかして、私を探してた？」
「うん」
「それ、私の兄さん」
「え、マジ？」
逢坂さんは頷く。あんなに似ていない兄弟もいるものなのか、と妙に感心する。それに、偶然の出来事にしてはよくできている。まさかあんなタイミングで逢坂さんの兄貴に会うなんて。
「世間って狭いなぁ」
「そうだね」
逢坂さんは笑って答える。話題もなくなって、逢坂さんは空に視線を戻した。僕もそうしようかと思ったけれど、不意にもう一つだけ疑問が浮かんだ。
「逢坂さんの兄貴って、何してる人？」
別れ際に会ったとき、逢坂さんの兄貴はスーツを着ていた。社会人ならそれも不自然じゃない。けど、逢坂さんは親の仕事の都合でこの町に引っ越してきたのだ。ということは、逢坂さんの兄貴は再就職でもしたのだろうか。都合よく両親と同時に転勤なんてあるはずがない。あるいは、逢坂さんの兄貴も両親と同じ仕事をしているのかもしれない。
なんにせよ、疑問は疑問だ。聞くことが憚られるような質問でもないし、正直に訊いてみることにした。
けれど、逢坂さんは何も答えない。不思議に思って表情を覗くと、無表情だった。まるで意識はここにないかのように感情が伺えない。
「――ねえ、トモくん」
不意に逢坂さんの口が開く。そして出てきた言葉は、妙にはっき

りとした輪郭があった。どこかから音が跳ね返ってくるように響いて聞こえた。

「もしも、私たちの生きている世界が、『作り物』だったらどうする？」

「へ？　作り物って？」

問い掛けの意図がわからず、思わず聞き返してしまう。

「誰かが、作った世界ってこと。簡単に言えば、偽物」

偽物、という言葉を発した逢坂さんの表情に、僕は押し黙ってしまう。悲しそうな表情だった。普段の物静かな、けれど明るいイメージに反している。

わけも分からないうちに、話は妙な方向に流れていた。まったく僕の意図しないところで話が進んでいる。そのせいで、いっそう分からなくなる。何を、どう答えればいいのか。

混乱しているうちに、逢坂さんが次の言葉を発した。

「それに――作り物は、作った人の気持ちしだいで簡単に壊されるんだ」

最後の言葉は、明るく振舞って発せられた。どうしようもない悲しさを隠すように、わざとらしい明るさを演じた逢坂さん。

僕には、何も答えられない。

「あ、友也！　何いちゃついてんの！」

不意に背後から降りかかる声。鈴佳だ。からかわれることをこんなにありがたく思うとは。

「いちゃついてない！」

慌てて否定するふりをしながら、立ち上がって鈴佳の方を向く。さりげなく、逢坂さんの隣から離れた。表情を伺うと、少し残念そうにしていた。ただ、すぐに表情を取り繕う。

「そうですよ、トモくんにそんな度胸ないですから」

「あ、それもそうか」

「おい！」
さっきまでの沈んだ空気はどこへ行ったのか、その後も三人でふざけあった。けれど、逢坂さんの言葉は心に引っかかって離れなかった。

天体観測が終わり、逢坂さんと鈴佳はゆっこさんの車で家まで送ってもらった。男の僕は後片付けを手伝うために、学校までゆっこさんと一緒に戻る。
学校の前に車を停め、警備員さんに門を開けてもらう。そこから再び車を動かして校舎の中に入り、正面玄関から望遠鏡を運び込む。
二人で望遠鏡を運ぶ。箱を水平にして、両端を僕とゆっこさんが持ってかに歩きで進む。かなりこっけいな姿だ。
「――お前、夏海ちゃんと何話してたんだ？」
「はい？」
不意にゆっこさんが口を開く。
「お前、夏海ちゃんと二人っきりで話してただろ。何の話してたかって訊いてるんだよ」
「何のって……」
本当に他愛もない話をしていたので、答えることを一瞬躊躇う。それに、最後の逢坂さんの不思議な発言についても答えるつもりになれない。あのことは簡単に口にしてはいけないような気がしたからだ。
「ただの無駄話してたのか？」
「まあ、そんなところです」
「本当に？」
真剣な面持ちで訊いてくるゆっこさん。まるで隠していること全てお見通しだとでも言うような視線に気圧される。そもそも、こんな問いかけを返してくる時点で僕が何か隠しているというのはばれているわけだ。

「世界がもし作り物だったら、って聞かれました」
つい、話してしまう。そもそも話して問題のあることでもないのに、躊躇っていた自分が馬鹿らしくも思える。
「それで」
「答える前に鈴佳が戻ってきてうやむやになりました」
「嘘吐け、お前のことだから、答えられずに黙ってる間に鈴佳が戻ってきたんだろ」
図星だ。僕は仕方なく頷く。するとゆっこさんは呆れたようにため息を吐き、こう呟く。
「だらしない」
自分でもそう思うので、何も言い返せない。
「せめて次にでも答えてやれ。少しでも、あの子の気が晴れるかもしれないからな」
「って言われても……答えようがないですよ」
「駄目人間」
「生徒に教師が使う言葉ですか、それは」
相変わらずの酷い扱いにため息を吐く。このまま話は終わると思って、僕は注意を足元に向ける。
「――もしも、だよ。この世界が、神様か何かの気まぐれで作られた偽物の世界だったら、お前はどうする」
間を置いて、再びゆっこさんが口を開く。そして、その内容はかなり逢坂さんの発言に似通っていた。
「それは……」
「もちろん、そんなでっかいもんの前でお前に何かできることがあるわけじゃない。偽者の世界を救うとか、そんなこと普通はできるはずがないんだよ。けど、そんな状況でお前はどうするんだ？　ゲームの世界のような勇者や救世主は存在しない。いても、お前じゃない。お前がなることもできない。ただの村人だ。それで、お前は何をするんだ」
まるで、逢坂さんの言いたいことを分かっているような語り口。

それも気になるけれど、今はそれどころじゃない。何か、ゆっこさんに答えなければ。
「言っとくけどな、ごまかすような科白はなしだぞ。普段どおり生きるしかない、とか。そんな当たり前のことは訊いてないんだよ」
ちょうど答えようとした言葉を先に否定され、返答に困る。そもそもどんな言葉を返したらいいのか、何を訊かれているのかですら分からなくなる。
「……まあいいや。あたしはこれ以上口出しするつもりはない。あとはお前が考えろ」
それを最後にゆっこさんは口を噤む。つられたように僕まで何一つ言葉を発さない。考え事をしているせいでもあるけど、無駄口を叩けそうにない雰囲気に流されたというのもある。
そのまま望遠鏡を運び終え、正面玄関まで戻る。考えるのにも疲れたので、気分転換に別の話題を口にしてみる。
「ゆっこさんと逢坂さんって知り合いなんですか？」
「夏海ちゃんはあたしのことなんて知らないよ」
この話を明言するつもりがない様子なので、これ以上の詮索は避けることにする。
話題に困ったので、当たり障りのない質問を繰り返してみることにする。
「……ゆっこさんって趣味はなんですか」
「ゲーム」
「料理とかしないんですか」
「産業廃棄物を作るのは得意だ」
「好きな男性のタイプ」
「ない」
当たり障りがなさ過ぎて、まるでお見合いのようになってしまった。
「――くだらないこと話してないで帰れ」
「ええっ、こんな夜遅く歩いて帰るんですか」

送ってもらえると思っていたのに。考えてもいなかったゆっこさんの言葉につい驚いてしまう。
「ああそうだ、帰れ」
何故か不機嫌そうな様子のゆっこさん。僕の言葉を聞いても送ってくれそうな様子はない。無駄話をする必要もないので、仕方なく歩いて帰ることにする。車の中から荷物を取り、家路につく。
帰りながらも考え続ける。逢坂さんの問いかけに、どんな風に答えるか。けど、簡単には答えなんて出そうにない。明日一日、日曜日を費やして考えても思いつくかどうか怪しい。そんな面倒なこと考えるぐらいなら、このままうやむやにしてしまおうか。少しだけ、そんなことを考える。
ただ、今はまだ考え続けようと思う。何か理由のようなものがあるような気もするけど、それを考える時間はない。
結局考え続けても答えは出ず、色々あった一日が終わる。

日曜日、僕はあんまりにも考えに煮詰まってハヤトに電話を掛けた。充電スタンドから携帯電話を取り出すと、電話帳からハヤトの番号を呼び出す。
「――もしもし？」
ハヤトの声だ。
「よう、ハヤト」
「何だよ、電話なんて。珍しい」
「まあ、特に用事はないけど」
「はあ？　キモい」
「うるせー」
軽く冗談を言い合うと、他に口にすることがなくなって妙な間が生まれてしまう。自分から掛けておきながら、どうやって話を切り出すか少しも考えてなかった。
「なんかあったか？」

「いや」
「じゃあなんだよ」
心配してくれたような声の後、安堵と呆れの入り混じった声。それを聞いていると学校で普段から話しているときのような感覚になり、自然と言葉が出てくる。
「もしもさ、この世界が作り物だったらどうする？」
「はあ？」
「だから、もしもの話だって。この世界が、神様的な誰かが作った世界だったら、どうするかって話」
「何だ、それ。また秋元に何かやらされてるのか？」
「まあ、そんな感じ」
僕が普段から鈴佳にいいように使われていることをハヤトは知っている。そのせいで時々変な事態に巻き込まれることもある。だからこんな風に勘違いしたのだろう。わざわざ事の詳細を教えても大して意味がないから、そのまま勘違いしておいてもらう。
「でさ、ハヤトだったらどうする？」
僕の問いかけに、電話越しに唸る音が返ってくる。真剣に考えてくれているのか、それなりに間が空く。
「何かしたいな」
「うん」
「でも、特にやることも思いつかない。そりゃあ、作り物の世界を本物にするとか、抽象的なことなら言えるけど、具体的には、何もなあ」
「だから困ってるんだよ」
昨日からずっと考え続けているのに解決しない問題。ハヤトに助けを求めてさえ。あんまりな状況に思わずため息が漏れる。
すると、不意に笑い声が上がる。
「なんだよ」
「いや、なんでも」
言うまでもなく、笑い声の主はハヤトだ。別に面白いことを言っ

たわけでもないのに笑われるなんて気分が悪い。
「たださあ、お前そんなガラじゃないだろ」
「はあ？」
「いつもは『まあ、適当でいいか』とか言って考えるの止めるだろ」
「ああ、うん、まあ」
つい歯切れの悪い返事をしてしまう。自分でもそうやって逃げ腰で物事に取り組む姿勢は悪い癖だと思っている。だから、今更人に指摘されてもこれといって思うところはない。
「おまえがこんなに真面目に考えてるのって、かなり珍しいぞ」
「マジで？」
「おう。嘘吐いてどうすんだよ」
確かに。ハヤトの言うとおりだ。
「……まあ、それだけだよ。特に用事があったわけじゃない」
「そうか、じゃあまた明日な」
「おう」
最後に挨拶をして通話終了のボタンを押す。ここからは、また一人で考えないといけない。本当に、自分にしては珍しいことをしているものだと思う。
まずは、文字通り何をするか。一番単純で、かつ難しい問題だ。ゆっこさんには当たり障りのない答えを封じられてしまったし、どうしたものか。
普通に考えて、僕にできることなんて何一つない。けど、何かをしたい。この矛盾した状況を、どう打開すればいいのだろう。
単純に解決するなら、まずは矛盾する二つの事柄のうちどちらかを見直せばいいわけだ。できることがないのはただの事実なので、見直す必要がそもそもない。だから、僕が見直すべきは何かをしたいっていう気持ちそのもの。
どうして、僕は何かをしたいと思うのか。
考えてみると不思議な話だ。世界が作り物だと分かっても、それは自分の手の届かないところの話。事実が一つ判明しただけで、他

は何も変わっていない。僕に関わる全てのこともちろん。なのに、何かをしたいと思う。それは僕が何か特殊な行動をするということ。周囲には何の変化もないのに特殊な行動をとろうとする。ただ、自分の手の届かないところにある事実、自分と無関係とも言える事実が判明しただけで。

いや、手が届かないだけで、無関係じゃない。

事実を知る前と後で大きく違うのは、世界そのものの信頼度。何も知らないうちは、無条件でこの世界を信用することができた。それは、この世界が安定したものだという先入観があるからだ。けれど作り物と分かった途端、壊れるかもしれないという恐怖感、不安定さを知ることになる。先入観が取り払われるんだ。そして不安定な状況が嫌だから安定を求める。その為には何か行動しなければならない。それが『何かをしたい』という気持ちに繋がる。

これはむしろ、何かをしなければならない、という先入観に近いんじゃないだろうか。世界なんて最初から不安定だ。それを考えれば普段から何かをしたいと思うべきだ。あるいは事実を知っても何かをしたいなんて思わなくていい。

だんだんと思考がまとまらなくなってきて、僕は一旦考えるのを止める。家の中を適当にうろついて気分転換をし、自分の部屋に戻る。そして再び考え始める。

何かをしたいというのも先入観だとして、僕は何をすればいいのだろう。行動をする、ということそのものが否定されているのに、それでも何かをするというのだろうか。

いや、本当は否定されていない。否定されたのは、何かをするための動機だ。別の動機があれば、何かをすることまで否定されたりはしない。

そもそもの、何かをしたいと思う理由。それは不安定な状況が嫌だから。それをどうにか安定した状況にするために、何かをしようと考える。

なんだ、普段と変わりないじゃないか。

最初から、僕たちは不安定な状況を目の当たりにすれば安定を求める。だから、僕は『普段どおり』どうにかしようとするべきなんだ。

もちろん、僕にできることなんて何一つない。それでも、不安定なのはいやだからどうにかしようとするはず。

世界がもしも作り物だったら。それに対しての僕の答えは『普段どおりどうにかしようとする』だ。

答えも出たし、後はこれをどうやって逢坂さんに伝えるか、だ。時間が気になって携帯電話を取って開く。もう夕方になろうとしていた。朝からずっと考えっぱなしということになる。自分でも信じられないぐらいの集中力だ。

さすがに疲れたので、少し休憩を取ろう。目を閉じて、脱力する。開放されたような感覚に浸っているうちに眠りに落ちてしまう。

しかも、起きられなかった。

気付けば次の日の朝でびっくりした。母さん曰く、起こしてもまたすぐに眠ったらしい。そうとう疲れていたんだろう。慣れないことをしたせいに違いない。

何にせよ、考えを整理しないうちに月曜日が来てしまう。学校に向かって歩きながら、何度も思った。やっぱり答えは明日に回そうか、とか、そもそも質問そのものをうやむやにしてしまおうか、とか。

そういった迷いを振り払えないまま、教室の前まで辿り付いてしまう。そしてさらに迷う。このまま足を踏み出して、教室に入るべきか。それとも、遅刻ぎりぎりに駆け込むべきか。今教室に入って、もし逢坂さんが居たら。僕は何を話していいのか正直分からない。そして一度沈黙してしまうと、もう二度とこのことを話せないままだと思う。

教室の前で、僕は立ち往生していた。

「――トモくん？」
だから、誰かに呼びかけられてもすぐには気付かなかった。
「ちょっと、トモくん」
「え――うわ、逢坂さん！」
「そこ立ってると、他の人が入れないよ」
知らないうちに後ろに立っていた逢坂さんに言われて気付く。確かに、こんなところに立ち尽くしているのは変だし、邪魔だ。実際に逢坂さんも教室に入れていない。
「ご、ごめん」
僕は思わず身を避けて道を空ける。
「ありがと」
逢坂さんはそう言って教室へ入っていこうとする。
「――待って！」
「な、何？」
ほとんど勢いのまま逢坂さんを呼び止める。もしこのまま逢坂さんを見送ってしまうと、話したいこともうやむやになってしまう。そんな気がして、つい呼び止めてしまった。けれどどう話すかを考えていないので、つい黙り込んでしまう。
「……土曜日の、あの話？」
感づいてくれたのか、逢坂さんから話のきっかけを作ってくれる。
「うん」
僕は頷き、とりあえず話してみることに決める。
「言われてから、ずっと考えてたんだよ。僕はどうするのか、って。それで、最初はそれでも普通に暮らしていくしかない、とか思ったんだ。きっと僕みたいな普通の人には、何にもできることがない。だから、無理をせずに普通のままでいるのが一番。そう思ったんだ」
「……そう」
少し、残念そうな声で応える逢坂さん。
「でも、最初は、ってことは、今は違うんだよね？」
僕は迷わずに頷く。

「例えば、ゲームとかだったら、世界が作り物です、なんて言われたら主人公たちがどうにかしていこうと頑張って、それでどうにかなるんだ。けど、僕みたいな村人は何もできない。何かしても、作り物の世界をどうにかすることなんてできない。――でも、やっぱり何もしないままではいられないよ。僕だって、世界が作り物なんて言われたら怖いし、どうにかしたい。だから、どうにかしようと思う。何かするよ。どうにもならないかもしれないけど、頑張ると思う」
「そう」
今度の逢坂さんは、少し満足そうだった。
「良かった」
そして、この一言。言葉は優しいはずなのに、声色がどこか冷たい。それが気になって、僕は逢坂さんの顔を覗き込む。
「逢坂さん？」
「私は、トモくんの答えが正解だと思う」
また、言葉だけ優しい科白。冷たいわけじゃない、ということが分かった。これは、あるべき温かさがないだけ。何か一つ、重要な要素がすっぽり抜けているかのような。そんな、穴の開いた言葉。
「今日、放課後は時間ある？」
「え？」
不意を討つような質問に面食らい、不必要な聞き返しをしてしまう。
「だから、放課後。時間があれば、話したいことがあるんだけど」
「一応暇だけど」
「じゃあ、放課後に屋上に来てくれる？」
「分かった」
逢坂さんの勢いに押されて、訳も分からないうちに約束をしてしまう。そのまま逢坂さんは先に教室に入っていく。僕もこのまま立っているわけにもいかないので、教室へと入っていく。教室の前で長い立ち話をしていたのに、誰もそのことを話題にしないのが不思

議だった。どころか、僕に質問をしてくる人もいない。逢坂さんにも。まるで、教室の前での出来事なんか誰も知らないかのように。

そうして、放課後が訪れた。逢坂さんは素早く屋上に向かった。僕もその後を追いかけようかと思ったけど、一緒に行くのも変な気がして教室に待機した。少し時間を空けて、逢坂さんと同じく屋上を目指す。

階段を上り、屋上の扉の前に辿り付く。

そういえば、屋上は立ち入り禁止だから鍵がかかっていたはずだ。試しに扉に手を掛けると、あっさりと開いた。妙だな、と思う。けど、それ以上は何も考えない。

「――来たよ」

僕は屋上に入ってすぐにそう言った。逢坂さんは屋上の端――もう一歩踏み出せば落ちてしまってもおかしくないような位置に立っている。

そして、逢坂さんはゆっくりとこっちを振り返る。表情は、笑顔だった。けれどどこか温かみのない、まるで自虐的な笑顔。

「……話って、何？」

「この世界の話」

僕の問いかけに即答する逢坂さん。その言葉の響きには、天体観測の夜に聞いたようなどうしようもない悲しみがあった。諦め、なのかもしれない。何にせよ、少しもいいイメージで捉えることのできない声だった。

「私、この世界がもしも作り物だったら、って訊いたよね？」

「うん」

「あれは、本当のことなんだ」

一瞬、自分の耳を疑う。本当のこと、と確かに逢坂さんは言った。続いて自分の認識を疑った。本当のこと、というのは僕が思っているような意味ではないのかもしれない。それぐらい、言葉通り想像

したものが異常だった。
「この世界は本当に作り物――偽物の世界なんだよ」
けれど、逢坂さんの言葉は僕の異常な想像を肯定する。
「……本気で、言ってる？」
「もちろん。ふざけてないよ。この世界は、本物の世界の人たちが作った『仮想世界』――簡単に言えば、ゲームみたいな世界なの。本当の世界はこの世界よりもすごく科学技術が進んでいて、一つの宇宙空間そのものを演算可能なコンピューターが存在する。ある目的のため、量子コンピューターにより演算された無数の仮想世界の一つ。それが、私たちの生きる世界」
逢坂さんの言っていることは異常だった。内容が異常だし、あまりにも具体的過ぎることだって異常だ。
「そんなの、信じられないよ」
思わず口走る。
「でも本当なの」
冷たく切り捨てられる。
「……じゃあ、その目的ってのは何なんだよ」
僕は精一杯の反論をする。冗談で言った性質の悪い嘘なら、そこまで具体的には考えられていないだろう。
「トモくん、音楽は聴く？」
けれど、返ってきた言葉はずれていた。困惑して、すぐには答えを返せない。
「聴かないの？」
「いや、聴くよ。普通に聴く」
「どうやって？」
「それは、ＣＤとかを再生して――」
「だよね」
逢坂さんの一言は、僕の答えを最後まで聞かないうちに発せられた。
「そういうふうに、デジタルのデータはアナログな存在として現実

の世界に『書き出す』ことができる。本当の世界の人も、おんなじことをやろうとしてるだけなんだよ。自分たちの作ったデジタルな存在を、アナログとして現実世界に書き出そうとしている。ちょうど、CDを再生したり、パソコンの中のデータを印刷したりするみたいに」

逢坂さんが言っていることの内容は分かる。けど、納得はできない。そんなこと、ありえないんだ。この世界が偽物なんて。それはただの例え話で、僕たちは実際に生きている、現実の存在だ。この世界がもし偽物なら――まるで僕たちまで偽物みたいじゃないか。そんなことありえない。こうして実際に生きている僕たちが、本当は存在しない偽物だなんて。

「ねえトモくん。本当の世界の人たちが書き出そうとしているのは何だかわかる？」

「そんなの分かるわけない」

「そっか。まあ、考えれば分かると思うんだけど」

そこまで言われて、やっと僕は考えてみる。逢坂さんから言われたとおりの状況で、目的としてあるべきもの。それは何なのか。

「――人間？」

何故だかその一言が思い至った。

「正解」

逢坂さんの一言が冷たく響く。

「本当の世界の人たちは、演算された人間を現実世界に書き出そうとしているの。デジタルな世界で演算された本当の人間のようなデータを、本当の人間の身体に書き込む。そういう研究をしてる人たちがたくさんいて、その中の一つの研究チームが作った世界の中の、そのまた一つがこの世界なんだ」

「……そんな、めちゃくちゃだ」

逢坂さんは、また具体的に語った。まるで本当にそんな目的がどこかに存在するように。もしかすると、僕を騙すためにこんな嘘をずっと前から考えていたのかもしれない。

そうだ。そのほうがよっぽど自然だ。実際に、この世界が偽物であることよりはずっと。
「ここで、もう一つ問題。一体どこの誰が、仮想世界から現実世界へと書き出されるために演算されている人間なのか。これは分かる？」
分かる。いや、予感はする。けれど、答えられない。
「ヒント。私は、どうして、こんなことを、知っているのでしょう」
逢坂さんが言葉を節々で区切りながら語りかけてくる。
僕は、黙り込んだままだった。
「正解は」
一度言葉を区切る逢坂さん。
「私でした」
答えを語る逢坂さんの声。異様に悲しそうで、辛そうでもある。けれど無理に明るい様子を振舞った、不安定な声だ。
なるほど。僕は思う。やっぱり逢坂さんの声には穴が開いているのだ、と。
「……まあ、簡単には信じてもらえないよね」
「当たり前だよ。そんな話、悪ふざけの作り話だって考えた方がよっぽど自然だ」
僕は完全に否定してみせる。けれど、それを聞いた逢坂さんは笑った。まるで僕の方がおかしいことを言っているような態度だった。
「私もそう思う。だから、証拠を見せるために屋上に呼んだの」
「証拠？」
「そう。トモくんの言うような、現実の世界では絶対に起こらないこと。でも、私を演算するための世界では起こって当然のこと。――例えば、ゲームの主人公になら起こっても不思議じゃないこと」
そう言うと、逢坂さんは後ろに下がり始める。そして、屋上の縁に立つ。あと一歩でも下がれば、屋上から落下してしまう位置。
「何を――」
「証拠、見せるね」

逢坂さんは――後ろに倒れこんだ。
支えるべきものがない以上、逢坂さんの身体は自由落下を始める。屋上――四階の高さから、地上へと向かって。
「逢坂さん！」
僕は慌てて走り出す。けど、もう遅かった。逢坂さんは僕の手の届かないところまで落ちていた。
一瞬のことだった。気がつくと、逢坂さんは地面に衝突していた。身体が一度だけ跳ね、そして静止する。
――けれどゆっくりと立ち上がる。そして、こっちを見上げる。
手を、振ってきた。
僕は屋上を後にする。走って一階まで駆け下りると、靴も履かずに外へ出る。そこには一人の教師と逢坂さんがいた。逢坂さんは僕に気付いたのか、こっちに視線を向けて小さく微笑む。
「逢坂、何があったんだ？」
教師はそう質問した。おかしい、と感じる。どう考えても、何があった、程度の出来事じゃない。それにそんなこと本人に訊かなくても分かる。
「ちょっと、屋上から落ちてしまったんです」
「そうか、今度から気をつけろ」
「はい」
異常な会話だった。教師は、屋上から落ちたことに対して何の反応も示さなかった。そして本当に何もなかったように立ち去っていく。
場には、また二人だけになった。放課後のグラウンドに、学生服の生徒が二人。靴も履かずに立っている。こんな珍しい状況なのに、練習する運動部は誰一人として見向きもしない。
そうだ――この状況は前にもあった。朝の教室の前だ。あの時間帯に、あれだけ教室の前で長話をして、他に誰も近づかなかった。考えてみれば不自然だ。教室に入る人も、出る人もいなかった。廊下を通り過ぎる人でさえ。

「――ほらね、ありえないでしょ？」
逢坂さんはまた語り始める。
「この世界では、私が死ぬようなことは起こらない。必要以上に不都合な出来事も起きない。不自然な出来事にも、誰一人気付かない。私に関わることの時だけ。こんなこと、それこそゲームの主人公みたいでしょ？　それは正しい認識。私はこの演算された偽物の世界の主人公」
どこか虚無的な口調。特に、自分を主人公だと表現した辺りでは。
「でも、私はこの世界を救えるわけじゃない。もしも私の書き出しが失敗したら、この世界はリセットされる。私の書き出しが成功しても、この世界は永遠に保存されるわけじゃない。成功例として保管され、ある程度理論が確立され、用なしになればリセット。結局、どんなに上手くいってもこの世界はあと百年ももたない」
「そんな――」
「そこで、トモくんに質問」
僕が何か返そうとしたところを遮り、逢坂さんは言う。
「トモくんは、なにをしてくれる？」
逢坂さんが今まで発してきた言葉の通り、その響きは虚無的だった。
けれど――この言葉だけには、僅かながら温かみがある。
「僕は……」
「ゆっくり考えていいよ」
久しぶりに聞いた気がする、温かい声。普通の声。人間らしい声だ。
「私は、トモくんの答えを待ってる。いつまでも」
それだけを言い残し、逢坂さんはその場を離れていく。一人取り残された僕は、呆然としたまま身動き一つ取らない。逢坂さんがいなくなり、僕がいることに『気付いた』らしい人たちの視線を感じ

て、やっとその場を離れる。歩きながら、考えた。自分は何をするか。考えながら気付く。この二日で自分が大きく変わったことに。

結局その日は何も分からなかった。考え付かなかった。何度か投げ出してしまいたくなったけど、結局考え続けた。不謹慎だとは思いつつも、そんな自分に満足感を覚える。何しろ、本当に自分が変わったようだったから。

第三章　何も変わらない

第三章　何も変わらない

逢坂さんに世界の真実を教えてもらってから最初の土曜日。補習が終わって昼食を食べに行くところだった。そこに現れたのはゆっこさんで、

「ちょっと付き合え」

とだけ言って先に歩き出す。何も分からないまま後を追い、何も分からないまま車に乗り込む。そして何も分からないままラーメン屋に辿り付いていた。現状としてはラーメン屋の前で立ち尽くしてしまい、唖然としている感じだ。車の道中で何処に行くかを聞いても無視されたので、正直言うと面食らっている。

「あの、どういう状況ですか」

「見たら分かるだろ。ラーメン屋の前だ」

「本気でそこを訊かれたとでも思ってるんですか？」

「いや」

反論をあっさりと言い返し、先に店の中へ入っていくゆっこさん。

「奢りだよ」

説明不足には変わりないけれど、その一言に安心して僕も店へ入る。

店は比較的小さい方で、カウンター席のほかにはテーブル席が二つあるだけだった。ゆっこさんは迷わずテーブル席の方へ向かい、荷物を置く。

「ここ、食券だから」

そう言って店の隅の方を指差す。そこには確かに券売機がある。ゆっこさんはすぐ券売機の方へ向かったので、僕も後ろを追いかけ

た。ゆっこさんは迷う様子もなく券を買い、すぐに店の人に渡してテーブルに戻っていく。僕もすぐに決めようと思ったけど、そういえばゆっこさんの奢りだということを思い出す。せっかくだから、ということでチャーシュー三枚乗せで千円台のラーメンを選ぶ。そして店の人に渡してテーブルに戻る。

「いくらだ？」

「千円です」

「死ね」

言葉とは裏腹に、しっかり千円札を渡してくれるゆっこさん。このとおり口は悪いけど、案外悪い人でもない。それがゆっこさんだ。もちろんいい人でもないけど。

そのままラーメンが出てくるのを待つ。先にラーメンが来たのはゆっこさんで、僕の分はけっこう遅れて出てくる。やっとのことで昼食にありつける、と思って割り箸を割る。

ゆっこさんの質問はそれとほぼ同時だった。

「――夏海ちゃんが屋上から落ちたらしいな」

その言葉に僕ははっとする。動かしかけた箸を止めたまま、ついゆっこさんに視線を向ける。

ゆっこさんはラーメンを食べていた。

「食えよ。伸びるぞ」

釈然としない気持ちを抱きながらも、進められたとおりラーメンに箸をつける。

「で、どうなんだ。本当に落ちたんだな？」

「はい。この目で、見ました。落ちるところを」

「けど、何もなかった、と」

「……はい」

僕はあの時の光景を思い返しながら答える。確かに逢坂さんは落ちた。しかも、自分から。そして何事もなかったかのように起き上がり、こっちに手を振ってきた。

「ゆっこさんは、これが異常なことだって分かるんですか？」

「さあ、どうだろうな」
とぼけたような答え方だけど、これはもう肯定に等しい。異常なことだと分からなければ、こんな返事ができるはずがない。
「――夏海ちゃんと何を話した」
問い方が不思議だった。まるで、僕と逢坂さんが屋上で話していたことを知っているかのような言い方。けれど、そこを問い詰めても無意味だ。僕は素直に質問に答える。
「この世界が、作り物だって言われました」
ゆっこさんは何も答えない。少しの間だけ、沈黙が続く。
「……馬鹿みたいな例え話、聞いてみるか？」
「はい」
待っていた言葉に対して、僕の返事は素早かった。それを聞いたゆっこさんはゆっくりと話し始める。
「――じゃあ、まずこの世界が作り物だったら、っていう例え話だ。実はこの世界は偽物で、本当の世界は別にある。この世界は本当の世界で形作られた、さしずめ仮想世界、とでも言ったところかな。私みたいに『例え話』を知ってる奴のほとんどがそう呼んでる。で、その仮想世界ってのは『量子コンピューター』って奴で演算されてるんだよ。知ってるか、量子コンピューターって」
僕は問いかけに対して首を横に振る。それをみたゆっこさんは頷き、話を続ける。
「量子コンピューターってのは、簡単に言えばコンピューターのすごい奴だ。理論は仮想世界にもある。……まあ、本当の世界でのやつは厳密に言うと少し違うものらしいんだけどな。とにかく、量子コンピューターは普通のコンピューターよりも圧倒的に演算応力が高い。だから世界一つ分の演算も可能なわけだ」
世界一つ分の演算。スケールが大きすぎて直感的には分かりにくい。
「それだけ量子コンピューターに演算応力があれば、誰もが色んな想像をするもんだよ。世界そのものを作りたいと言うやつもいれば、

人間の意識を夢――仮想世界の中に閉じ込めて永遠に幸せな世界を生きよう、なんて怪しい宗教もある。そして――人間を作ってみたい、という研究者だっている」
「そんな……なんていうか、倫理的に許されるんですか？」
僕が素朴な疑問を口にすると、ゆっこさんは笑って否定する。
「お前なあ、倫理観なんてそんな馬鹿みたいなもん信じてんのか？
あんなもんはな、『今の』世の中を上手く成り立たせるために用意した言い訳みたいなもんだよ。中身は空っぽだ。気付いてみれば何の力もない概念だよ。倫理に許されていようがなかろうが、人間を作りたい奴は作る。作りたくない奴は作らない。それぞれに別な理由はあるだろうけどな」
それが教師の言う科白か、と思ったけど、口には出さないでおく。無意味だし、自分でもゆっこさんの言うことに納得したからだ。
「それで、だ。人間を作ろうとした奴の考えた方法はこうだ。まず、人間の身体を作る。これは技術的に問題なく行えるから、簡単にクリアできる。次に、人間の精神――まあ、脳の中身を用意するんだ。これが難しくてな、今まで何度も人格は演算されてきた。確かにコンピューターの中になら存在できるんだよ。けどな、脳に書き込んだ途端、破綻する。何の意味もなさない情報になるらしくて、人型の狂った生き物にしかならないんだ」
「人型の狂った……？」
「ああ。狂犬病の犬が人の身体になったような、って言えば分かりやすいか？」
「はい、なんとなく」
「よし。そんで、それを回避するために、人間そのものを演算することにしたんだ。そのデータを脳に書き込むならば、人格のみを演算したときのような破綻は起きないんじゃないか、ってな」
確かに、理屈的にはその通りだ。けど――その結論に行き着くためには、一つや二つの人格が破綻しただけでは済まないはずだ。何十、下手をすれば何百の人格が全て失敗しなければ、この理屈は成

り立たない。そう考えると、消えていった人格たちが哀れにも思えてくる。

「で、いろんな演算が今はされているんだ。人間一つを演算したり、一つの町だけ、あるいは国だけなんてものもある。宇宙規模でも五十億年前からを演算したり、宇宙初期から演算を開始するところもある。もちろん、面倒な時間をかける必要はないからその辺は高速演算で済ませるんだけどな。――で、自分らのいるこの世界は、宇宙初期から夏海ちゃんの誕生までを高速で演算して済ませ、残りを実際の時間と同じスピードで演算している。これは、できる限り現実に近い状況を作るために必要なことらしい。まあ、全体の実験の中でも特に手間の掛かってる方だよ。他には親の代とかから同じスピードに戻す実験もあるけどな。まあ、そっちはかなり時間が掛かるから実用的じゃないし、成功しても採用はされないだろうな」

そこで一旦話を区切り、ラーメンを口に運ぶゆっこさん。これが最後の麺で、話の間に少し伸びてしまったのだろう。ゆっこさんはあまり美味しそうに食べなかった。

「とにかく、人間を作る過程で夏海ちゃんが演算されているんだよ。時が来ると、夏海ちゃんは人間の肉体に書き出される。もし失敗すれば夏海ちゃんは死ぬ。成功すれば本当の世界で生きていくことになる。けど――もしどちらになったとしても、この世界は消されるだろうな。でかい量子コンピューター占拠してやっと世界が一つ演算できるんだ。次の実験のためにこの世界は消される。それか、世界を縮小して成功例として一定期間保存、なんてことも考えられる。まあ、これは他にほとんど成功例がない場合だけどな」

ゆっこさんの言葉が冷たく胸に痞える。

この世界が消える。想像もできないことだけど、それがとても恐ろしいことだとだけははっきりと分かる。なのに、やっぱりどこか他人事のような、妙な浮遊感が足元を揺らす。ゆっこさんの言う『例え話』が本当のことだというのは、昨日の逢坂さんの行動で証明されたはずなのに。普段と変わりない、いかにも不変であるような

世界の中に生きていると、どうしてもそれを忘れてしまう。
「――そういえば、ゆっこさんはどうしてそんなことを知ってるんですか？」
「現実世界の奴らの目的をサポートするために演算されている人間。それだけだよ」
　ゆっこさんの言葉には、何の感情もなかった。まるで当然のこと、呼吸をするかのように自然に出てくる。それだけこのことを身にしみて分かっているということなんだろう。
「そんなことより、重要なのはお前だよ」
「僕、ですか」
「ああ。お前は、どうしてこんなことを知ることができるんだ？　夏海から聞いただろ、この世界では、夏海にとって都合の悪いことは起こらないって」
「はい」
「だったら、何でお前みたいなどっかそこいらの村人が世界の真実を知ることができたんだ？　普通なら、都合が悪いだろ。村人が知っていい内容の話じゃない。知ったところで無駄なだけだからな。だから、『知る』なんて出来事は起きないはずだ。――けど、お前は『知る』ことができた。これがどういうことか分かるか？」
「……僕が知ることは、逢坂さんにとって都合がいい？」
「もっと端的に言え」
　そうは言われても、咄嗟にちょうどいい言葉なんて出てこない。僕は頭を押さえて考え始める。分からないことを無理に考えようとするときの、僕の癖だ。当然、しばらく考え続けても答えは出そうにない。
「――お前は、夏海ちゃんに期待されているってことだよ」
　ゆっこさんは僕が黙っているのを見かねて、とうとう答えを口にした。
「期待に応えること。それが、お前の答えだよ。どんな内容なのかはさっぱり分からないけどな。それは、お前が自分で考えるところ

だ」
　最後にゆっこさんはスープを啜り、席を立つ。話は終わり、という合図のようだったので、僕も合わせて立ち上がる。
「ごっそさんです」
　ゆっこさんは店の人に挨拶をしてから出て行く。僕はそれにつられて軽い会釈をし、先に店を出たゆっこさんを追いかける。

　外に出ると、ゆっこさんは車に向かわず、店の入り口の脇で煙草を吸っていた。マナーが悪すぎる。注意しようかと思って近づくと、それより先に声をかけられる。
「お前に会わせたい人間が居る。――いや、お前が会って話を聞くべき人間、って感じか」
　何の前触れもないせいで、話がよく分からない。ゆっこさんの意図も、言葉の内容も。少なくとも、これから僕が誰かに会うということだけは確かだった。
「そいつは毎日、昼飯はここに食いに来る。本当は、ちょうどの時間に待ち合わせたはずなんだけどな。遅いから先に食った」
　つまり今日の本題まで待ちきれなかったということなんだろう。短気な人だ。そう思いながらも黙って話を聞く。とりあえず、僕はまだ謙虚な態度で話を聞くべきだと思う。
「――で、そいつはこの世界で唯一の、本当の人間だ」
「本当の人間？」
「ああ。仮想世界で演算される存在たちは、ある種自動的なんだ。全て機械の演算によるからな。だから、仮想世界は放っておくと勝手に永遠の時を紡ぎ続ける。だから、外へと書き出すためにはそれとは異なる別の演算をしなければいけないんだ。で、この仮想世界では演算したデータを無理やり書き出すのを良しとしなかった。だから、本物の人間が演算された人間に影響を与え、自然に外の世界へと書き出される流れを作らなきゃいけないんだよ」

「えっと……つまり、逢坂さんを外の世界へ連れて行く役目みたいな感じですか？」
「まあ、そうとも言えるかもな」
ゆっこさんは曖昧に頷く。僕の要約があまり上手くなかったせいだろう。
「連れて行くって言ったらまるで悪者みたいに聞こえるかもしれないけどな、実際のところあいつもある意味で被害者なんだよ。この研究の」
その一言には何処となく暗い響きがあった。それで僕は曖昧な返事をされた理由を理解する。つまり、僕が見ず知らずの人間をまるで悪者のような言い回しで語ったのが気に入らなかったのだろう。
「念のために言っとくけどな、誰かを恨んだりするなよ。仮想世界の人間も、現実世界の人間も」
「どうしてですか？」
つい食いつくように聞き返してしまう。仮想世界の人間を恨むなというのは分かる。この世界の人たちには何の非もない。それに、これから会うらしい人もゆっこさんに言わせると被害者の一人らしい。だから仮想世界の中には憎まれるべき人間なんて一人もいないのだ。けど、現実世界にはこんな酷い運命を僕たちに背負わせようとしている人間がいる。仮想とはいえ、無数の人格を勝手に生み出し、勝手に消す。消される側にとって憎むべき存在は、きっと消す側のどこかにいるはずなんじゃないだろうか。
「お前はなんにも知らないからだよ」
ゆっこさんの回答は、咄嗟には意図が理解できないものだった。
「そりゃあ、ムカつくだろうよ。自分たちを消そうとしてる奴らなんてな。けど、『誰が』消そうとしているか、なんてお前に判るか？　無理だろ。判らないだろ。そんなんで恨み憎しんだってなんの意味もないんだよ。どうせ恨むなら『誰か』判ってるときに恨めよ。現実世界の誰か、なんてあやふやなもんに感情ぶつけてたらな、お前自身が駄目になるだけだ」

「そう、ですか」
「あと、恨む気持ちなんか役に立たないからな。今の場合は。今必要なのは、もっと何かを願う気持ちだ。救いでもいい。生き続けたいなんて当たり前のもんでもいい。そういうもので自分を動かすんだよ。そうでなきゃ、やっていけないぞ。この世界は」
言葉は、まるで噛み締めるかのような重さがあった。ゆっこさんが言い終わると同時に、車が一台、駐車場に入ってくる。僕はそれを目で追い、一瞬だけゆっこさんの方を向き直す。僕と同じように車を目で追いかけていた。もう、この話は終わりのようだ。
車が停車して、中から一人の男性が出てくる。ゆっこさんはその姿を見るなり、素早く挨拶を交わす。
「遅い！　何やってたんだよ」
「悪い、別の用件が長引いたんだ」
現れたのは男性。見覚えのある顔立ちだった。何だろう、と思って記憶を探ると、すぐに答えに至る。
逢坂さんの兄貴だ。
「友也。こいつは春樹。逢坂春樹。――夏海ちゃんの兄貴だよ」
「はい……」
力の抜けた返事しかできなかった。確かに、考えてみれば納得だ。逢坂さんに影響を与え、現実世界へと連れ出す役目。それは逢坂さんと近しい人の方が都合はいい。両親が演算された人間であることは当然のこととすると、兄弟、姉妹が現実世界の人間ということになる。
何にせよ、逢坂さんの兄貴――春樹さんが現実世界の人間。そして、僕はすでにこの人と遇ったことがある。妙なめぐり合わせについ唖然としてしまう。
ゆっこさんは僕の様子に気付いたらしく、訝しげな表情でこっちを一瞥する。が、特に何も訊いてはこなかった。すぐに春樹さんに僕を紹介し始める。
「春樹、こいつが友也。佐倉友也だ」

「ああ」
口調からすると、春樹さんも僕と遇ったことを覚えているようだ。僅かに驚いたようなニュアンスが聞き取れる。
「何だよ、お前ら」
ゆっこさんはとうとう不審げに疑問を漏らす。
「いや、前に一回会ったよな。友也くん、か？」
「はい。帰り道で……」
「何だ、それ」
何故か不満そうに呟くゆっこさん。

その後、ゆっこさんは一人で帰ってしまった。春樹さんはこれから食事をするようだったので、僕は流れで再び店に入った。せめて、と半チャーハンの食券だけを買い、店の人に出したら席に座った。話を人に聞かれたくないのだろう。春樹さんは店の一番奥の席を取っていた。僕は追いかけてそこに座る。
「……にしても、まさかこんなところでお前にまた会うとは思ってなかったよ」
「自分もです。それに、逢坂さんのお兄さんだったんですね」
「まあ、一応は。それと、俺も逢坂さんだ」
確かに、呼び方を変えないとややこしい。
「これから夏海のことは夏海、俺のことは春樹って呼べ。俺も友也って呼ぶ」
「はい、分かりました」
呼び方を人に決められるのも変な気がしたけど、僕自身が決めても変わりないだろう。素直に受け入れることにした。さすがに、呼び捨てにはできないけど。
待っている時間を退屈に感じたのか、春樹さんはさっさと大切な話を切り出す。
「お前は、夏海に気に入られている」

「……はい、さっきゆっこさんにも言われました」
「なら話が早い。結論だ。お前にできることは何もない」
酷い言い方だった。けど、それは間違いようもない事実でもある。
「例えばな、今夏海がどこか遠いところで苦しんでるっていうことだけ分かっているときに、お前は何をしてやれる？　場所も分からない、声も届かない。ましてや、助けるなんて不可能だ。しかもそれが、絶対にお前が踏み入れない領域での話だったらどうだ？　本当に、何一つできることなんてないだろ」
「まあ……はい」
僕は曖昧な返事をする。
「でも、特別な意味を持たなくても、何かできることの一つか二つぐらいはあると思うんです。夏海さんが期待してくれているのも、そういうことなんじゃないかな、と」
僕が言葉を紡ぐほどに、春樹さんの表情は呆れかえっていく。それほど馬鹿らしいことを口走っているのだろう。確かに、こんなこと僕自身でさえ思ってもいない。ただ、どこかの物語やドラマなんかで言われているような科白で言い返しただけだ。言い返したい、という気持ちが先走って、こんな無駄なことを口走った。
「何だ、それは」
春樹さんは問いかけてくる。僕は答えられない。当然だ。無関係な誰かの言葉を借りて呟いただけの科白に、中身が在るはずがない。
僕がどういう状況なのか理解したのだろう。春樹さんは答えを促すように訊き直す。
「僕にしかできないこと、ってやつか」
頷く。受け売りの科白の意味は、まさにそういうことだった。もちろん、そんな薄っぺらな言葉に騙されるはずもない。春樹さんは鼻で笑って否定する。
「お前にしかできないことなんかねえよ。お前のできることはな、どんなことでもこの世の誰かが代わりになれるんだ。それは世界中の殆どの人間にとって一緒さ。本当はな、ほんの一握りの人間がい

るだけでいいんだ。その中に俺や、お前があえている必要なんてない。言い方変えたら、お前がこの世にいる意味なんてないってことだよ」

「そんな……」

意味がない、とまで言われるとさすがに腹が立つ。最初に会ったときから失礼な人だとは思っていたけど、ここまでくると度を越えている。僕も不快な声色を隠せなかった。

「どうした、ムカつくか」

「はい、さすがに、誰でもそうだと思いますけど」

「まあ、当然の反応だな。残念だ」

ゆっこさんのときにも度々あった、意図の読めない言葉。仮想世界に関わる人はこういう言い回しが好きなんだろうか。思わずそんな邪推すらしてしまう。

「考えてもみな、意味があるってのはそんなに偉いことなのか？意味がないってことの何が駄目なんだ？」

まるでなだめるような言い方に、僕は余計に苛立つ。けど、そんな感情を抱いても何の意味もない。ひとまずは言葉に対する答えを考える。

意味がないことなんて、別に駄目でもなんでもない。それが僕の胸中に浮かんだ答えだった。

「意味があること。それに対して『意味』を見出すのはな、自分が肯定されるからなんだよ。その肯定ってのも、元を考えてみれば損得勘定に過ぎない。意味がないってのは肯定されるわけでも、誰かの得になってもないってだけなんだよ。別に駄目じゃないだろ。地球の裏側歩いてる普通の人間が駄目な奴だなんて、誰が言い切れる？　いうなれば、身長が低いとか太ってるとかいう言葉と変わりないってことだよ。身長が低いって蔑まれても、別に低いこと自体には何の問題もないだろ。それと同じようなもんだ」

春樹さんの言うことは完全な極論だけど、言いたいことは分かる。つまり、意味がないというのはただの事実に過ぎないのだろう。僕

が納得したらしいと分かったのか、春樹さんは満足げに話の続きを語りだす。
「大切なことは二種類あるんだ。一握りの、本当にすげえ奴にとって大切なことと、俺たちみたいなどうでもいい奴らのための大切なこと。先言った方は俺には分かったもんじゃないけどな、もう一つの方はまだ言えることがある。それはな、できること、とか自分だけに、とかマジどうでもいいってことだよ。それに意味があるかどうかとかもどうでもいい。だってよ、そうだろ？　できるかどうかなんてどうでもいいんだよな。何かやるときってのは。できることがなくても、何かやるだろ。自分にしかできないことなんてなくても、やっぱ何かやるだろ」
「けど、弱い人は……これがもう限界の人は、何もできないじゃないですか」
思わず出てきた反論。これには僕自身が驚く。考えてもいなかったことなのに、まさしく的を射たような本音だったからだ。自然と、呼吸のときほど楽に口から零れた。
すると、不意に春樹さんは笑みを溢す。今までに見ていない、優しい笑い方だった。
「いいんだよ。それは。お前よりも、俺は少しだけ強いかもしれない。まだ限界じゃないかもしれない。だから俺や、夏海は、助けるんだよ。俺たちよりも弱いかもしれない奴を。もう限界がそこまで来ているかもしれない奴を。そりゃもう手当たり次第だ」
いいたいことがよく分からない。けれど、何か大切なことを伝えようとしてくれているのは感じられる。言葉通りの内容をそのまま解釈しても、充分意味のある内容だ。少なくとも、僕の呟いた問いには答えている。
話が途切れたところで春樹さんのラーメンが来る。僕のチャーハンはやっぱりまだだった。話の続きを期待して春樹さんに向き直る。すると、春樹さんはラーメンに箸をつけ、もう食べ始めていた。まだ何か話すのだろう、と思ってみていても、春樹さんが手を休める

様子がない。どうやら、話は終わりのつもりらしい。何も具体的なことは言われていない気がしたので、不服に感じて口を開く。
「あの……話は、終わったんですか」
問いかけに箸を止める春樹さん。
「訊かねえと分からないのか？」
やっぱり話は続かないようだった。表情もそう物語っていた。
「具体的に何か、こう、言ってくれるのかと」
もう少し何かが訊きたくて、僕はさらに問い詰める。
「具体的って、もう充分だろ。それにゆっこからは仮想世界のことしっかり訊いたろ？」
「まあ、一応」
「じゃあ充分だよ。具体的にどうだこうだって言われないと行動できないのか？　そんなんならやめちまえ。こんな無茶な世界、そもそもどれだけ具体的に説明しても信じられねえだろ」
春樹さんはそう言い捨て、ラーメンを再び食べ始める。
まだ僕のチャーハンは来ない。仕方なく、僕は頬杖をついて考えに耽ることにした。

翌日になっても、僕はずっと同じことを考えていた。一体、僕は何をするべきなのか。何一つできることがないと言われても。まだ、何かできることがあるような気がした。逢坂さんに期待されている以上、きっと何かあるはず。僕が、やるべきこと。
考え続けている所為か、身体がだるい。僕は椅子に座り、目を閉じて休んでいた。何も見えない、真っ暗な無映像の世界が心地よい。
そんな束の間の休息も、すぐにぶち壊しになる。
「――ちょっと友也！　何サボってんの！」
後ろから罵声。と、平手打ち。後頭部を軽く打たれて、痛みにふらつきながら目を開け、立ち上がる。
すぐそこに鈴佳が立っている。せめて文句でも言ってやろうか。

そう思って鈴佳の方へ向き直る。
「ちょっとくらい休んでもいいだろ」
「だめ。もう時間がないんだから」
僕の主張は一蹴され、鈴佳は作業に戻った。
日曜日だというのに、僕は鈴佳に呼び出されて学校にいる。理由も鈴佳の勝手なものだ。高校の天文部の研究発表みたいなイベントがあるらしく、それに鈴佳が出たいと突然言い出したのだ。しかも、今日。昼過ぎごろに無理やり呼び出され、それからずっと学校にいる。
ちなみに、発表は二週間後。どうやら鈴佳自身は以前から準備をしていたらしい。けれど人手が足りなかったのか、作業は思うように進んでいなかったのだ。それで、この土壇場になっての呼び出しだ。
僕は作業に戻る。目の前のパソコンの画面と向かい合う。鈴佳から渡されたデータを、ひたすら入力していくという単調作業。データはノートに十数ページにも及んで記述されている。とんでもない重労働だ。やっと数ページ入力し終わったけど、まだ七割以上は残っている。
かたかた、とキーボードを打つ音が静かな部屋に響く。場所は天文部の部室なので、もちろん他には誰もいない。鈴佳は何かを作っているようで、今は部室ではなく廊下に出て作業をしている。部室では狭くて作業にならないらしい。
淡々と作業をこなしていると、鈴佳が部室に戻ってくる。作業が終わったわけではないらしく、手ぶらだった。
「どうしたの」
「部品。取りに来ただけ」
その宣言どおり、鈴佳は部室の片隅に置いてある段ボール箱の中からいくつか物を選んで持ち出していた。用が終わったのか、すぐさま廊下に戻ろうとする。
「ねえ、鈴佳」

僕は呼び止めた。最近揺らぎ続けている心がそうさせたのか、僕は何かを縋るような気持ちで声を発した。鈴佳はそれに気付いた様子もなく、当然のようにこっちへ振り返って返事をする。
「何？　作業に戻りたいんだけど」
呼び止めたものの、何も訊くことが思いつかず、つい視線をあちらこちらへと泳がせてしまう。どうにか思考の隅を探り、最初から抱いていた当たり障りのない疑問を口にする。
「……どうしてさ、急に研究発表に出るなんて言い出したんだよ」
は、と驚いたような顔をしてみせる鈴佳。何を今更、とでも言いたげだった。
「やりたくなったからでしょ」
「じゃあ、もっと早くに教えてくれたら余裕持って手伝えたのに」
「やる気が出たのが最近だったの。いいじゃん、別に」
いじけたように言い捨てる鈴佳。結局そのまま廊下には出ないまま、部室に残った。適当に近い椅子に腰を下ろす。
「――去年も、出たんだ」
「え、まじ？」
頷いて答える鈴佳。これは初耳だった。確かに、去年の今頃の僕は天文部じゃないから知らなくても当然だけど、話題に出てきたりするぐらいはあるはずだ。全然訊いたことがない、というのも微妙だ。
「結果はね、やっぱ入賞もできなかった」
「悔しかったんだ」
「まあ、少し」
鈴佳は呟くと、机に突っ伏すように顔を伏せてしまう。
「でもさ、それよりも悔しかったのがあるんだ」
呟く声がくぐもって聞こえる。そのせいなのか、鈴佳の雰囲気がいつもと違うように感じた。
「私みたいに、一人で研究発表に出た奴がいたんだ。そいつはそんなに真面目な奴じゃなくて、準備を始めたのも他の学校の部と比べ

てかなり遅い方だった。私は一人だからって早めに準備を始めたから、準備の差は歴然だった」
　じっと、うつぶせた鈴佳の頭を見ていた。何か、弱気な言葉を溢しそうで不安だったのだ。あんなに人を振り回して、自分は世界の中心だとでも言うような人間が。まさかないだろう、とは思っても、声色は否定を許してくれない。
「けど、そいつは入賞したんだよ。一番しょぼい賞だけど、入賞したんだ。短い時間でよく頑張ったとか、そんなこと言われてた。私だって、分かるよ。そいつの研究発表のほうがよくできてた。面白かった。私が入賞せずに、あいつが入賞したのは妥当なんだ」
　相当悔しかったんだろう。鈴佳の声が一気に荒れる。
「でさ、思い知ったんだ。どれだけ努力しても、才能がある奴には叶わない。逆立ちしたって叶わない相手は、世の中にいくらでもいるんだ、って。その所為で私、腐っちゃってさ。しばらく天文部の活動もせずにだらだら過ごしてたんだ」
「そんなこと……」
　軽々しく否定の言葉を呟こうとしてしまう僕。情けないけど、それしかできない。そのことが、自分をもっと惨めにした。
「ないと思う？　天才なんて迷信だ、とか？」
　鈴佳のはっきりとした物言いに、僕は首を横に振って答えるしかできなかった。
「でしょ。世の中、やっぱ普通の人間は何をやっても天才には勝てないんだよ。……てか、天才どころかそこいらの秀才にすら勝てないかも。凡人は凡人。馬鹿にはなれても天才にはなれないんだよ」
　顔を上げる鈴佳。不思議なことに、その表情はどこか清々しい。悔しそうではある。けど、悔しい、と思っているわけではないような。
「それでさ、代わりじゃないけど、分かったことがあるんだ。私がどうして研究発表に出たか。それは、出たかったからなんだよ。勝って、入賞したいとかじゃない。出たかったんだよ。研究発表をや

りたかったんだ。だから出た。それだけ」
何となく、鈴佳の表情の意味が分かった気がする。負けて悔しいのは当たり前の感情だ。けど、その感情は重要なところから生まれたものじゃない。一番大切な、研究発表をするという目的を果たしたのだから、気持ちいいというのもあるだろう。そのどちらの感情も抱えているから、あんな表情をしたんだ。
「全部さ、一緒だと思う」
鈴佳が、僕の目を見て言う。
「勝つだの負けるだの、できるだのできないだの。関係ないんだよ。やりたいか、やりたくないかなんだよ、結局。勝てるから、できることからやるって、おかしくない？　だって、どう考えたって見返り期待してるだけじゃん。情けないでしょ、そんなの」
急に、鈴佳の言葉が僕を風刺するみたいなものに感じられた。
「勝ちたい、できるようになりたい、ってのも、やっぱり見返りが欲しいだけなんだよね。私はそう思う。だから、やめた。勝ちたい、できるようになりたい、って思わない。やりたい、って思う。そうするって、決めたんだ。去年」
言葉一つ一つに力が篭っていた。その力に圧倒され、また、感じるものがあって、僕は鈴佳に尊敬の念のようなものを抱いた。
「すごいね、鈴佳は」
「そりゃそうでしょ。あんたとは経験も努力も才能も違うんだから」
「ちょっ、いままでのいい言葉が台なしだろ」
冗談を返してきた鈴佳の様子は、普段と同じように見えた。自分が一番という感じの、普段の鈴佳。
「……って、質問に答えてないだろ」
「へ？」
間の抜けた声を上げる鈴佳。
「だから、急に研究発表に出るとか言い出した理由。もっと早く呼んでくれたほうが楽だっただろ？」
「それはふと気が向いたからって言ったじゃん」

「いや、理由になってないし」
問い詰めると、黙り込んでしまう鈴佳。そして椅子の向きを変え、僕に背中を向ける。
「……前からそう思ってた」
また、鈴佳が何かを語りだすようだった。どうやら、今日は鈴佳がよく喋る日らしい。
「あんたを呼ぼうとは思ってたけど、なんていうか、その」
急にどもる。妙な雰囲気を、僕は感じ取りつつあった。なんとなく、普通とは違う雰囲気が場に漂っている。何だろう、とは思っても、深く考えはしない。
「――気持ちが決まらなかったんだ」
「え？」
意味の分からない言葉に、つい聞き返してしまう。
「本当は、最初からあんたを天文部に誘うつもりだったよ。入学したときから。あんたのことを知ったときから。でも、気持ちが決まらなかった。だから、一年の終わりごろなんて変な時期に誘ったんだ。研究の手伝いもして欲しかった。けど、どんな自分で居たらいいのか分からなくて、誘えなかった。けど、ずっと思いは決まってたんだよ」
連続して淡々と、恥ずかしそうに呟く鈴佳。この雰囲気の理由が何となく分かってしまい、僕まで恥ずかしくなってくる。少しも予想しなかった事態に混乱し、頭の中がぐちゃぐちゃだった。
「あんたに手伝って欲しかった。最初から、最後まで」
「えーと、それは、どういう意味でしょうか」
「女の子が、特定の男の子にしか使わない意味だよ」
「まあ、何となく分かるけど、具体的に言ってくれないと真意を測りかねるっていうか」
「うう」
心底恥ずかしそうに唸る鈴佳。そのまましばらく沈黙が続いたけど、不意に鈴佳がなにかをぼそぼそと呟く。

好き。確かに、沈黙の中では小さな声も充分はっきりと聞き取れた。
「あの、鈴佳」
「分かってる。友也にその気はない。それに、理由もよく分からないでしょ」
「うん、えっと、ごめん」
「なに謝ってんの。謝る必要ない」
「うん」
そして、再び沈黙。異様なほどの恥ずかしさが限界を超え、妙に感覚が研ぎ澄まされていた。同時に頭を揺らすような浮遊感。そして、妙な緊張感。こんな体験、今までになかったものだから、なおさらだ。
「……夏海ちゃんでしょ」
「へ？」
不意に出てきた、関係のない名前。けれど、鈴佳の意図は何となく分かる。
「あんた面食いだし、夏海ちゃん可愛いし。しかも優しくて、何故かあんたに一番懐いてる。あんたが好きになる理由は充分あると思うけど」
「それは――」
「はい作業に戻りましょう！」
大きな声で僕の言葉を遮り、勢いよく立ち上がる鈴佳。そして部品を手に取り直して廊下へと出て行く。僕も仕方なく、パソコンでの作業に戻った。
気がつくと、鈴佳は勝手に帰っていた。廊下には『片付けといて』というメモ書きと作りかけの何かが残されていた。僕は一人で後片付けをして、一人で帰った。
家に帰って自分の部屋でだらだらしていると、ハヤトから携帯電

話に電話が掛かってきた。
「もしもし？」
『友也、英語の宿題分担しようぜ！』
僕とハヤトの間では定番のやり取りだった。分担とは、お互いが半分ずつ宿題をやって、それをお互いが写すという、何の芸もない普通の方法のことだ。宿題の量を減らすために学生が思いつく定番の技。
ただ、今日はハヤトの相談に乗る気になれなかった。そもそも、今日は宿題をサボろうと思っていたので、分担すると仕事がむしろ増えてしまう。
「嫌だ」
一言で提案を遮る。
『お前、またサボる気だろ』
「なんだよ、お前の内申には関係ないからいいだろ？」
『そりゃそうだけどなあ……』
ハヤトは本当に困っているようだ。どうやら、先生に宿題をやって来いと念を押されたのだろう。英語の先生は生徒によって対応が結構違う人で、ハヤトは特に睨まれている生徒だ。まあ、頑張れば優秀な成績を収めるだろうという期待もあるのだろうけど。
『頼む、何でもするから！』
「いや、別に何もして欲しくないし」
『昼飯奢る』
「それっぽっちじゃ足りない。時給低すぎだって、それじゃ」
『じゃあ何が欲しい』
「別にいらないって。色々あって疲れてるんだから休みたいんだよ」
『色々ってなんだよ、いいわけだろ、また』
日ごろの自分の行いが悪いせいで、肝心なときに信じてもらえない。今日は本当に色々あって疲れてるのに。
「鈴佳に呼び出されて部活やってたんだよ」
『嘘吐け、今日俺秋元見かけたけど、離しかけたら部活に一人で行

ってたって言ったぞ』
「マジかよ……」
鈴佳がどうやら嘘を吐いてしまったらしい。これでは僕が何を言っても信じてもらえない。宿題なんかやりたくないのに。
こうなれば、自棄になってやる。
「それさ、嘘だよ」
『どうして』
「だって、鈴佳は今日僕に告白したんだから」
『はあ？』
「好きだって言われたんだよ。部活してるときに。ずっと昔から好きだったって言われた」
僕の突然の発言に困惑したのか、黙り込むハヤト。こんな話持ちかけられても、迷惑なだけだろう。ざまあみろ。
「そのことも考えなくちゃいけないから、もう今日は宿題なんてやりたくない。分かったか」
『……やっとか』
「はあ？」
今度は、僕がハヤトの発言に困惑する番だった。
『秋元がさあ、入学して少し経ってからかな。俺に、お前のこと色々聞いてきたんだよ。どこで聞いたんだろうな、俺とお前が幼馴染だって、もうその時には知っててさ。――ってまあ、それはどうでもいいんだけど、とにかく、その時にはもう何となく分かってたよ。秋元がお前のこと好きなんだってこと』
考えもしなかった事実に驚いて、何の言葉も出せない。まさか、鈴佳が僕を好きだって、ハヤトが先に知ってたなんて。せいぜいこの二人は知り合いぐらいだろうと思ってたのに。
『で、その後も流れで秋元から相談受けてたってわけだ』
「……マジかよ」
『ああ』
ハヤトの返事の後に、妙な間が空く。僕が何か言おうかと思った

けど、口は動かなかった。
『悪いな、今まで黙っといて』
「話せないだろ。いいよ、別に」
とは言え驚きは隠せない。これ以上の言葉は何も出そうにない。
『――俺、お前と秋元、お似合いだと思うぞ』
「え？」
言葉の根拠がよく分からず、つい聞き返してしまう。
『だってお前ら、普段からまるで夫婦みたいだろ？　それに、お前の情けないところ、秋元が引っ張ってくれるだろうし。秋元はお前みたいに冷静じゃないからな。つっても、お前の場合冷静って言うよりは面倒くさがってるだけだろうけど』
「いや、まあ、それは――」
『それに秋元、けっこう可愛いもんだぞ？　あんなに乱暴な態度、お前にしか見せないんだよ。普段は普通の女子なんだよな。それにお前のこと使ってからかったら、顔真っ赤にして反論してよ。お前には勿体ないぐらいだ』
「一言余計だ」
『あと、秋元はお前のことかなり好きでさ、もう熱烈なファンって感じなんだよ。たまに相談に呼び出されるんだけどさ、悪口も、嬉しかったことも、楽しかったことも、全部お前がらみなんだよな。友也、友也、つって。お前のこと以外頭にないみたいな』
ハヤトに話すことがなくなったのか、携帯電話からは何の音も聞こえなくなった。僕は、なんとか自分の思ってることを口に出そうと思った。
「あのさ、でも」
『答えられないだろ、お前じゃ』
言葉を遮ったハヤト。まるで考えを読まれたような気分だった。驚いて口を噤んでしまうけど、すぐに気付いて話を続ける。
「僕は、やっぱり情けないし、何のとりえもない普通の人間なんだよ。この先のことは分からないけどさ、今は、鈴佳に答えてあげら

れないんだよ。それに――」
『それに？』
意外そうに訊き返してくるハヤト。つい口が滑ってあのことを言いそうになってしまった。逢坂さんに言われたこと。課された問題のこと。
今から口を噤んで、何も言い出さなかったことにはできる。それとも、ハヤトに何かアドバイスのようなものでも貰おうか。そんな考えが頭の中を駆け巡る。
結局選んだのは後者のほうだった。
僕は今日までに起きた色々な出来事を、ゲームの話としてハヤトに話した。本当のことなんて言えないし、信じてももらえないだろう。だから、全ての関わりあう人間をゲームの登場人物に代えた。この世界のことを、ゲームの世界観として話した。
そして、最後にこう尋ねた。
「ハヤトはさ、この状況ならどうする？」
携帯電話の向こうで、ハヤトが何かを考えている雰囲気が伝わってくる。
『……二つ、俺が思うことがある』
「二つ？」
何も考え付かなかった僕と比べて、ハヤトはかなり頭が回るらしい。あるいは、僕が纏めた情報を客観的に見られるからなのか。何にせよ、こんな意見がもらえるならぜひ聞いておきたい。
『まず、主人公がやるべきことだよ』
例え話の中で、主人公は僕に設定した。逢坂さんが自分のことを主人公とは説明したけど、さすがにこの例え話でその設定はややこしくなるだけだ。
『主人公はさ、ヒロインに普段どおりできることをやるって言ったんだろ？』
「うん」
『じゃあそれをやれよ、って話じゃね？』

「……ああ、そうか」
確かに、そこまで一度立ち戻って考えるのもいいかもしれない。今までは、そこから何をやるかを考えていた。それで頭の中が整理できなかったのだから、もしかするとスタートで失敗しているのかもしれない。
『あと、どうしてヒロインがわざわざ飛び降りたんだろうな』
「え？」
二つ目の考えは意外なものだった。僕の中には少しもなかった考え。
『だってさ、世界が偽物って証明する手段、他にもあるだろ？　なんでわざわざ屋上から飛び降りるなんて妙な方法を選んだんだろうな』
言われてみると当然の考え方だった。屋上から飛び降りた理由は分かる。僕に話を信じさせるためだ。けど、そのために屋上から飛び降りるという行為を選択した理由は？　何となく、でそんなことをするだろうか。あんなにも重要な行動だったのだから、根拠がないなんてことはおかしい。
「サンキュー、ハヤト」
『よし、じゃあ宿題やるぞ』
現金なハヤトの態度につい噴出してしまう。宿題をやる気は起きないけど、少しぐらいハヤトにお礼をする気にはなってしまった。
「おっけ。じゃあお前後半で、僕が前半やる感じでいいだろ？」
『おう、忘れんなよ』
「バーカ」
それを最後に電話は切れた。携帯電話を閉じて充電スタンドに戻し、勉強机に向かう。宿題は適当に済ませてしまうつもりだった。

その日、寝る前にひたすら考え込んだ。ゆっこさんに春樹さん、鈴佳にハヤト。この二日で僕が人から言われたことを纏め上げた。

ゆっこさんが教えてくれたのは、これから僕がやるべきことにはあまり関係のないことだった。この世界がどうなっているのか。その説明に過ぎなかったような気がする。けど、僕がこれからやるべきことのヒントはあった。

春樹さんは思いっきりヒントを出してくれた。鈴佳が教えてくれたことは、偶然とはいえそのヒントを考える材料になった。もちろん、ハヤトの助言も。

そのおかげで、ひとまず答えは出た。僕が、何をするか。ただそれだけの答え。他のことは何もかも未解決だけど、今はそれで充分なんだ。

僕は睡魔に襲われる直前になって、逢坂さんを放課後の屋上に呼び出すメールを送った。色々な疲れが重なった所為か、返信がくるかどうかも確認できずに眠ってしまった。

第四章　楽しいことは嫌いですか？

第四章　楽しいことは嫌いですか？

「友也！　手伝って！」
放課後になった途端、僕のところに鈴佳の襲撃が来た。驚いて僕はつい固まってしまう。逢坂さんも驚いているようだった。僕に話しかけるつもりだったのか、僕の左側に立っている。鈴佳は右側。ちょうど二人にはさまれる形となった。
「な、何を」
「研究発表のあれに決まってるでしょ！　ほら、さっさと来る！」
「でも今日は――」
僕は逢坂さんの方を見る。今日の朝、メールの返信を確認した。わかった、と返ってきていたので、このままだと逢坂さんを待たせてしまうことになる。
逢坂さんは僕の視線に気付くと、すぐに鈴佳へ向けて言葉を発した。
「研究発表って、何？」
「天文部の研究発表コンクールがあって、それに出場するのよ。友也には雑用的な作業をさせてるの」
「雑用って、かわいそうだよ」
「……夏海ちゃんが言うなら、かわいそうかな」
鈴佳の僕の扱いが酷い。普段通りに。どうやら昨日のことはもう大丈夫なのだろう。まあ、一晩もあれば気持ちの整理だってある程度ならできるだろう。僕には無理でも、鈴佳になら簡単なことだ。
「ねえ、私も手伝っていいかな」
「雑用？」

「それは……嫌」
「じゃあ、私のやってる作業の方手伝ってくれる？」
「うん、それならやりたい」
話が勝手に進んでいく。しかも、作業を手伝う羽目になっていることには何の変わりもない。
「あのさ」
せめてもの抗議に、と声を上げる。
「なに」
不機嫌そうな表情で返事をする鈴佳。どうも、普段よりも僕の扱いが酷い様な気がしてきた。これは何も言っても無駄だろう、と悟る僕。
「どれぐらい掛かりそう？」
だから、質問を変えた。学校の閉まる時間よりも早ければ、逢坂さんと話ができるかもしれない。単純な考えだった。
「多分、早めに終わる。今日、私、家で用事があるから」
「分かった」
仕方なく、僕は自分の荷物を取って立ち上がる。これも部活の一環。他の部活と比べたらよっぽど楽な作業だ。自分に頭の中で言い聞かせる。鈴佳と逢坂さんは二人で先に行ってしまったので、僕は急ぎ足で二人の後を追いかけた。

気がつくと、僕のパソコンで作業している姿を鈴佳が見ていた。廊下でやっている作業は逢坂さんに任せっぱなしなのか、廊下に戻ろうとする気配もない。暫くはそのまま放っておいたけど、あんまりにもじっと見られているので集中力を欠いてしまう。
「……さっきから、何だよ」
僕は振り返りつつ鈴佳に声を掛ける。表情はまるで面倒なことでもしている時のように気だるそうだった。
「別に」

返された言葉もいい加減な調子だった。
もしかすると、鈴佳は昨日のことを吹っ切れてなんかいないのかもしれない。僕の扱いが普段より酷いのは、普段通りにしようと努めているからなのか。
今更オブラートに包む必要もないので、そのまま鈴佳に尋ねることにした。
「……昨日のこと、気にしてるだろ」
「あたりまえでしょ」
鈴佳は昨日のように恥ずかしがったりはしなかった。どうやら鈴佳も僕と同じように考えているようだ。
「――昨日話したさ、凡人は天才になれない、って話覚えてる？」
「うん」
「私ね、思うんだけど、天才も凡人も、馬鹿にならなれると思うんだよね。子供みたいにふざけて、色んな無茶してさ。そんな感じでみんな馬鹿になれば、きっと楽しくて幸せで、嫌なこととか全部どうでもよくなると思う」
「……それで、普段から馬鹿なことやってるわけ？」
「一応、そのつもり。馬鹿にはなりきれてないけどね」
確かに、鈴佳の行動は馬鹿、というよりも変な、と言ったほうがいい。確かに馬鹿なことをやっていると言えなくもない。部室でお菓子を食べて、好き勝手部活を使い放題。挙句の果てにはいきなり研究発表にほとんど一人で出る。ある意味では馬鹿なんだろう。鈴佳の言ったような意味では、もっと。けど、きっと人は馬鹿だ、と感じるよりも変だ、と感じる。実際に、僕もそうだった。鈴佳のことを馬鹿だなんて思ったことはない。変だと思ったことはいくらでもあるのに。
「だから、今日も馬鹿に戻るつもりだった。普段の私。馬鹿で、友也の扱いだけが酷い私に。戻れたけど、すごく疲れた。それで、なんだかなあ、ってなって」
「今に至る、と」

「そう」
答える鈴佳の声も表情も、疲れているように見えた。多分、無理な話だったんだろう。普段の自分に戻るというのは。
「……まあ、戻れないのが普通だよ」
僕が言うと、鈴佳は驚いたような表情を浮かべる。そして少し悲しそうな笑みを浮かべて口を開く。
「はは、あんたにまで凡人扱いか。泣けてくる」
「違うって」
思ったとおりの意味で言葉が伝わらない。僕はすぐに鈴佳の勘違いを否定した。
「凡人だとか天才だとか、どっちも結局人間だろ。いつも普段どおりの安定した自分なんて恐いだろ。まるで機械じゃん。たまには普段とは違う自分になるのが普通なんだよ。あたりまえ、って言った方がいいかな」
最後の問いかけるような言葉を聞いて、鈴佳は笑い出す。何を笑われているのかは分からないけど、悪い意味ではなさそうだった。
「どっちでもいいから。意味分かったし」
笑いが収まってからの、鈴佳の第一声はそれだった。
「それにしても、友也もちょっと普通じゃないでしょ、今日。あんた、普段こんなこと言わないよね」
「僕だって人間だから」
訊かれたことを誤魔化すように答える僕。鈴佳は理由を聞いたのだろうけど、これは話すわけにもいかない。
「そうじゃなくて……ああ、もういい」
鈴佳は深く追求してこなかった。多分、隠すのにはそれなりの理由があると考えてくれたのだろう。
話も終わったので、僕は自分の作業に戻る。相変わらず、ひたすらパソコンにデータを入力するだけの作業。鈴佳も作業に戻るのか、廊下の方へと歩いていく。

研究発表の作業を終えて、鈴佳が帰った。後片付けは僕だけの仕事だった。一人で廊下に出ているものや部室に散らかった部品などを片付ける。全て終えると、もう外は結構暗くなっていた。

荷物を取って、部室を後にした。部室の鍵を閉めて、職員室に返す。これから僕のやろうとしていることを考えて、次第に緊張感が高まってくる。

屋上に向かいながら、何度も思う。やっぱり、別の答えにしてしまおうか。今からでも、別の答えが考え付くかもしれない。もしかすると、そっちが正しいのかもしれない。まだ考えてもいない答えが。恐怖のような感覚が意識を支配する。けれど、そんな感覚は全部無視した。完全にできはしないけど、少なくとも気が変わるようなことはない。

屋上の扉を開く。鍵は開いている。そういえば、屋上は基本的に鍵が閉められていて入れないようになっているはずだ。これも、もしかしたら逢坂さんにとって都合が悪いからなのかもしれない。僕が約束の場所を屋上に指定したからなのか、それとも偶然か。僕には判断できない。

そもそも、そんな些細なことは何の関係もないんだ。

僕は屋上に出て周りを見渡す。逢坂さんはいつかの日のように、今にも落ちそうな場所に立っている。

「――トモくん、お疲れさま」

言いながら、こっちに歩み寄ってくる。僅かな安心感を覚えつつも、僕は返す言葉を口にする。

「ほんと、鈴佳の奴、自分の発表なんだから自分で片付けろよ、って話だよな」

「それ、鈴佳ちゃんに直接言ったら？」

「まさか、どこの命知らずだよ、そんなの」

僕の冗談に逢坂さんが笑う。僕も笑った。その後には何の言葉も続かなかった。早く本題に入るべきなんだろう。

「……ねえ、逢坂さん。天文部は楽しい？」
僕の質問に、逢坂さんは惚けたような表情を見せる。けど、すぐに表情を引き締めて言う。
「うん、楽しい。朝から晩まで、ずっと天文部をやっていたいぐらい」
「よかった。まあ、僕は朝から晩までなんて嫌だけど」
「そうだよね、鈴佳ちゃんにこき使われて大変でしょ？」
「そりゃもちろん。まあ、楽しくないってわけじゃないけどさ。体力が持たないよ」
体力さえ続けば、僕だっていくらでも鈴佳の突拍子のない行動についていく。思ってみれば、本当に嫌なら天文部を辞めているはずだ。今天文部に入っていること、これから辞めようなんて少しも思わないこと。これらを合わせて考えると、僕もきっと鈴佳のやる『部活』が好きなんだ。
「それでさ、この間の答え、考えてきたんだ」
「答え？」
「もちろん、アンサー的な意味じゃない。返事、みたいなもんだよ。それだけのことしか考えられなかったんだけど、訊いてくれる？」
「いいよ。待ってたから」
逢坂さんは答えながら、僕から離れていく。ある程度の距離を空けたところで、逢坂さんは止まった。
「――幾つかね、言っておきたいことがあるの」
「何？」
「花火の夜に、私とトモくんは初めて会ったよね？」
「うん」
「あの時、髪が黒かったでしょ？」
「あ、そう、だよね」
白い髪の方を見慣れてしまったし、それ以外のことを考えるので精一杯だった。だからなのか、覚えていて当たり前のような異変まで忘れてしまっていた。

「本当の世界の人間はね、髪が白いんだ。でも、私の髪は黒。もしそれが失敗の原因になったりしたら嫌だから――って、私の体は、『髪が白い私』にあの日書き換えられたんだ。他は全部そのままだけど」
「そりゃあ、辻褄は合うけど……だったら最初から髪が白ければ良かったんじゃない？　なにも今更になって変えなくても」
「確かに。でもね、最初は下手に手を加えると失敗の原因になるかもしれないから、って言ってたんだ。だから、私は髪が黒い人間のまま生まれた。そのまま育った。でも、途中で方針が変わって髪を白くすることになった。普通に考えたらさ、十何年もたったんだもん。他の研究結果を受けて方針が変わってもおかしくないよね」
　それで、髪が黒から白に変わった。一つ分からなかったことが理解できたわけだ。
「……私、髪を白くするのがすごく嫌だったんだ」
「どうして」
「昔ね、すごく仲の良かった友達に髪を褒められたことがあるんだ。綺麗な髪だね、って。髪を白くするってことは、その友達に褒められた髪じゃなくなるってことでしょ？　それで嫌になって、家を抜け出したのが、あの日。トモくんと会った日。あの日ね、私、帰ってから髪を白く変えたんだ」
「そう、だったんだ」
　知らないところに、知らない物語がある。僕にとってはただの妙な出来事だったものに、突然意味が生まれる。不思議な感覚だった。
「あの日探してたローズクオーツの指輪。あれはね、鍵なんだ。本当の世界と繋がるための。あれがあれば、本当の世界の人の言葉が聞ける。会話もできる。私というデータも外に書き出すことができる。……なんか私、自棄になって、それを川に投げ捨てちゃったんだ」
「でも、探したよね。逢坂さんは」
「うん。鍵はきっと幾つでも作れる。だから捨てたって無駄なんだ。

でも、捨てたって事実は私の中に残るよね。それじゃあ駄目だって分かったんだ。そんなんじゃ、せっかくのいい思い出も素敵な言葉も、全部色褪せちゃうから、って。それで探し始めたんだけど、肝心の指輪は全然見つからない。もう泣きそうになってたところに、まさかのトモくんの登場。しかも見つけてくれたよね。すっごく嬉しかった。その上見つけてくれて。――トモくん。今更だけど、やっとお礼が言える」

逢坂さんは笑って最後の言葉を呟いた。

「ありがとう」

その表情は、普段の逢坂さんよりも暖かさを感じる笑顔だった。本当の世界の話題になるたび覗く、冷たい表情じゃない。むしろ、僕はこんな綺麗な笑顔は一度だけしか見たことがなかった。あの日、逢坂さんと出会って、その指輪探しを手伝った日。そのお礼を言われたときの笑顔。――むしろ、それよりも素敵かもしれない。

「なんか、照れるな」

つい視線を外してそう呟いてしまう。

「そうだろうと思った。だから、わざと」

「なんだよそれ」

また二人して笑う。このままだと、本題に入るまでまだ遠そうだ。そう思い始めたところで、やっと逢坂さんが切り出してくる。

「それじゃあ、トモくんの答えを話して」

逢坂さんの表情から笑みは消えていた。真剣な表情。本題に入った途端、僕はこれから自分がしようとしていることを考えて身体が強張る。

ああ、駄目だ。こんなのでは。鈴佳を見習え、僕。

「――逢坂さんは、楽しいことは嫌い？」

「……嫌いじゃない、けど」

思ったとおり、逢坂さんは僕が何を言いたいのか分かってないようだった。これでいい。遠まわしな方が、きっと『面白い』はずだ。

「だよね。普通は、みんなそうだと思う。楽しいことが嫌いな人は、

そうそういないよ。大体の人は、楽しいと幸せなんだ。よく立派な大人の人とかが言ってる自己実現とか、夢をかなえるとか。そんなのどうだっていいんだ。楽しければ。全員とは言わないけど、ほとんどみんなが楽しければそれでいいんだよ。逆に、つまらないのは嫌だ。でしょ？　逢坂さんもそうじゃない？」
「うん、それはそうだけど」
「よかった。なら、僕はやりたいことが一つある」
そう言うと、逢坂さんに近づく。そしてその手を握った。驚く逢坂さん。けど、きっと次の言葉を聞けばもっと驚くんだ。
「逢坂さん。僕と付き合おう」
――なんて、言われたら。
案の定わけが分からない様子の逢坂さん。ただ、鈴佳のような恥ずかしがり方はしない。驚きと、少しの照れ。そんなのが垣間見える表情。多分、これが普通の女の子の反応なんだろう。鈴佳は、ちょっと極端だ。
「ど、どうして？」
当然の問い。もちろん、返事は考えてある。
「僕は多分、何の力もない、何一つできることのない凡人なんだ。他の誰にだってできるような当たり前のことを平凡にこなして、それで終わる。そんなつまらない人間だよ。そんな僕に、この仮想世界のためになることができるはずないんだ」
僕の言葉を不思議そうに聞く逢坂さん。緊張して、今にも声が震えて裏返りそうだ。でも、そこは堪える。そんな情けない様にはなりたくない。
「それはきっと、この世界にいる人のほとんど全てに当てはまると思う。誰も、何も変えられない。普段通りに生きて、時々嬉しいがあって、嫌なこともある。ずっとその繰り返しだ。それはもう、どうしようもないことだし、どうかする必要もない。だったらさ」

僕は一旦言葉を切り、言葉を整理する。緊張して、一気に喋りすぎている。次に言うべき言葉は何だろう。それを考え、ゆっくりと口を開く。
「だったら、あとは逢坂さんが幸せになればいいと思うんだ」
「――私？」
「そう。無責任かもしれないけど、僕には逢坂さんの運命をどうにかすることなんてできない。できるわけがないんだ。どんなにあがいても、ただ身を削って不幸になる。僕がどんな努力をしたって、その先にいいことなんか何もない。何も得られない。何も変わらない。だったら、逢坂さんが幸せで、楽しく過ごせた方がいいと思うんだ。このまま時が過ぎていくよりは、何か楽しいことが、一つでも多い方がいいからさ」
逢坂さんは呆気に取られているのか、何の返答もせずにただ話を聞いていた。それに、まだ告白の理由にもなっていない。言い返すわけにもいかないのだろう。
「それで、もう一つ思うんだけど、恋人同士ってすごく楽しそうじゃん。クラスの彼女がいるやつとか、ホント見てて楽しそうなんだよ。喜怒哀楽、全部ひっくるめて。だから、恋人がいるってのは楽しみの増えることなんじゃないかって思う」
「……だから、付き合おう、って？」
「そう。もちろん、僕と付き合ったって楽しくなさそうなら断って欲しい。逢坂さんはどう思う？　楽しそう？　それともつまらなそう？」
突然の問いかけにも、逢坂さんは真剣に考える素振りを見せてくれた。いっそのこと、簡単に断ってくれた方がよっぽど楽だった。けど、逢坂さんは答えを探している。僕の問いかけに応えようとしている。恐い。断られるのは嫌だ。でも、逢坂さんの肯定が欲しくて告白したんじゃないんだ。こんな情けない感情、どうにかして押し殺さなければいけない。
「――楽しいかどうかは分からないけど、きっと幸せはあると思う」

逢坂さんの返事は、ほとんど肯定そのものだった。
「じゃあ――」
「うん。いいよ。付き合おう、トモくん」
途端に安堵感と高揚感で、足元がふらつく僕。告白するってのはこんなに緊張するものなのか、と思い知る。鈴佳も頑張ったんだな、と改めて思う。

その帰り道。僕は逢坂さんと並んで帰る。特別なことが何かあるわけでもないのに、妙に心が浮つく。
「……あのさ、逢坂さん」
「なに？」
「今度の土曜か日曜、デートに行こう」
ずっと考えていたことを、やっと口にした。屋上ですぐに切り出せばよかったのに、やっぱり僕の度胸が足りなかった。もう逢坂さんと帰り道の分かれる場所が近い。
「いいよ。どうするの？」
「町をさ、見て回ろう。逢坂さんはさ、まだこの町のことはあんまり詳しくないでしょ？」
「うん。案内してくれるんだ」
「案内、にもなるね。デートだけど」
肝心なことは何も話していないのに、もう分かれ道が来た。逢坂さんはこの道を曲がって帰る。
「――じゃあ、土曜と日曜どっちがいい？」
「どっちでもいいよ。トモくんの好きなほうで」
「えっと、じゃあ日曜で」
「分かった。じゃあ、日曜日にデートね」
「なんか、照れくさいな」
「うん」
結局、分かれ道で立ち止まったまま話し込む。僕も逢坂さんも足

を進めようとはしない。
「――じゃあトモくん、また明日」
「うん、じゃあね」
長い沈黙の後、逢坂さんが先に動き出した。僕も言葉を返してから自分の足を進める。まだ、決めてないことがある。待ち合わせの場所や時間。それに、何処に連れて行ってあげるか。きちんと決まったら話すか、メールをしなければいけない。
思ったよりも普段と変わりないことに気付く。付き合うといっても、そんなに世界が変わって見えるようなものではないらしい。

次の日の昼休み。ハヤトと一緒に食堂に行き、早速話を切り出した。
「ハヤト、天文部に入ってくれ」
「はあ？　死ねバーカ」
思っていたよりも酷い反応。突拍子もないことだからある程度は無理もないけど、ここまで完全否定だとむしろこっちが驚く。
「どうせお前のことだから、鈴佳と気まずいとかそんな理由だろ。ふざけんな。それぐらいどうにかしろっての」
ハヤトの言葉を聞いて納得する。普段の僕なら、ハヤトの言ったような理由でこの話を持ちかけたのだろう。
「そんなんじゃないって。逢坂さんのことだよ」
「はあ？」
思ったとおりの反応。ここで逢坂さんの名前が出てくるとは思ってもみなかっただろう。
「僕、逢坂さんと付き合うことになった」
「はあっ？」
驚くハヤト。当然の反応だろう。ハヤトにしてみれば、想定した結果を否定されたようなものだ。
「お前、鈴佳はどうしたんだよ」

「きちんと……じゃないけど、僕に付き合う気がないってのは伝わってるはず。けじめは、これからつける」
僕が言うと、ハヤトは途端に大人しくなる。不満足そうな表情を見せながらも、納得はしてくれたようだ。多分、僕があんまりにも普段と違うから説得力があるんだろう。普段の僕がもっとしっかりしていたら、こんな言葉じゃハヤトを説得できていないはずだ。
「それでさ、僕は色々あって、逢坂さんに楽しんでもらいたいっていう結論に落ち着いたんだよ。で、部活は人数多い方が楽しいだろ？」
「まあ、理屈は通ってる。でも、そんな根拠もクソもない話信じろってのか？」
「そうだよ、友達だろ、俺たち」
「こんな時だけそれだよ、お前は」
呆れたような口調のハヤト。でも、顔には笑いが浮かんでいた。
「まあ、いいか。天文部入ってやるよ。お前がこんなに積極的なことも珍しいからな。俺も嬉しいっていえば嬉しいし」
「サンキュー、ハヤト。今度なんか奢るよ」
「じゃあ明日の昼飯な」
「おっけー」
ハヤトの了解が取れたところで会話が終わり、後は普段通りの昼食となった。これで、僕のやることは残すこと一つだけ。鈴佳とのけじめだ。

授業中に、鈴佳の携帯電話にメールを送っておく。
『今日、また部活やるの？』
返信はその授業中に返ってきた。
『うん。あんたはまた雑用』
聞きたくなかったことまで一緒に書かれていて苦笑する。すぐに返信のメールを書き、送信する。

『部活の前に話したいことがあるから、次の休み時間に部室へ来れる？』
今度の返信は早かった。
『うん。分かった』
了解が得られたところで携帯電話を閉じ、授業に戻る。意識を授業に戻し、集中し直す。
時間が経つのは早く、すぐに授業は終わった。早めの終了だったので、僕は余裕を持って部室に向かう。
部室に辿りつくと、すでに鍵は開いていた。どうやら、鈴佳が先にこっちへ来ているらしい。
扉を開くと、やっぱり鈴佳が先に来ていた。
「遅い、友也」
「うん」
僕は中に入り、扉を閉める。無闇にその音が響いて聞こえるのが不思議だった。
「……僕は、鈴佳とは付き合えない」
「そう、今更そんなことだけで呼んだ？」
「いや、もう一つあるんだ」
「何？」
鈴佳の態度は落ち着いていた。ほんの二日前のことなのに、もうこんなにも自分を律することができる。さすが鈴佳だ。これなら、言っても大丈夫だろう。
「……僕、逢坂さんと付き合うことになった」
「死ねーっ！」
不意に、鈴佳は手に隠し持っていたスーパーボールを投げつけてくる。手加減のない投げつけと急な動作。僕は避けられず、まともに食らってしまう。
「いってぇ……」
「でしょ？」
「何すんだよいきなり！」

「乙女の怒りよ」
乙女にしては暴力的過ぎる。文句を言おうと口を開こうとしたところに、さらに鈴佳が言葉を続けた。
「分かってたから。あんたが私より夏海ちゃんだってこと。ムカついて、暴力で制裁。これでチャラね。私の嫌な気持ちの分」
「……ごめん、鈴佳」
「ばーか、何謝ってんの。そんなのいらないから」
鈴佳は笑っていた。無理をしているのは明白だ。どうにかして、鈴佳の気持ちを楽にして上げられないだろうか。そんなことを考えていると、また鈴佳が口を開く。
「いいこと教えてあげる。普通の女の子はね、振られた男じゃなくて、奪った女のほうが嫌いになるもんなのよ。だからあんたみたいな立場の男は、私みたいな振られた女に冷たいほうがいいの。酷い人間のほうがいい。少しでも優しいと、期待しちゃうからね。……まあ、私は夏海ちゃんを恨んだりはしないからいいんだけど」
口調は明るさを装っていた。やっぱり、僕は鈴佳を助けてあげたかった。けど、それはできない。するな、と言われたばかりだ。自分を押さえ込み、鈴佳に普段通り接することにする。それはつまり、この場では冷たい態度に他ならない。
「……そっか、じゃあ、僕はもう戻るから」
「うん」
「鍵、閉めといてくれる？」
「うん」
鈴佳は僕に背中を向けた。表情は伺えなくなった。けど、想像は容易い。
「じゃあ、また放課後」
「うん」
それが最後のやり取りとなった。僕は部室を出て、教室へと戻っていく。足が進むほどに重くなる。それが後悔なのかも分からないまま歩いていく。次第に足が重いのかどうかも分からなくなった。

そういえば、ハヤトが言っていた。
『無視したなら無視したで、覚悟すりゃいいだけだろ。悪者らしく。俺は悪者です、ってな。どっかでその分取り返せばいいんだよ』
その通りだ。僕は覚悟しなければいけないんだ。今日、鈴佳を傷つけたこと。それで僕は悪人になったことを。そして、それが嫌なら別のどこかで取り返さなければいけないんだ。少なくとも、今すぐに鈴佳を助けてあげたいというのはおかしい。それは、自分が悪者になるのが嫌なだけだ。
順番に、自分の心の中だけに積み重なっていくもやもやしたものを解きほぐす。今はそれをしなければいけないんだと思う。これが覚悟するということなのか。

放課後。部室には四人がいた。僕と鈴佳、逢坂さん、そしてハヤト。
「なんでハヤトくんがいるの？」
「今日、天文部に勧誘したんだよ」
「そう」
鈴佳は何も言わずにハヤトの入部を受け入れる。
「じゃあ、組み立ての作業手伝ってくれる？」
「分かった」
ハヤトも廊下で組み立てられている何かを組み立てる作業に割り当てられる。やっぱり僕が一人だけデータ入力の作業らしい。
「友也」
僕がパソコンをつけようとしたところで、鈴佳から呼びかけられる。電源を点けずに振り向く。
「今日はもう作業の方手伝って。そっちは私が家でやるから」
普段の扱いとあまりにも違うので、驚いて言葉が出なかった。ハヤトも驚いているようだった。逢坂さんは何を思っているのか、笑いながらこっちの様子を眺めている。

「――よし、さっさと済ませよ！」
鈴佳は一人で掛け声のように言う。そしてそのまま廊下へ組み立て中の何かを運び出す。僕たちは遅れてそれを手伝い始める。
廊下に出したところで、僕はずっと気になっていたことを鈴佳に尋ねる。
「これってさ、何を組み立ててるの？」
「おもちゃ」
「なんだよ、それ」
「天体観測のデータを色々入力して、そのデータを元に光ったり動いたりして不思議な感じになるおもちゃ。その名も天球人形。どう？　面白そうでしょ？」
「いや、面白そうだけど……天文あんまり関係なくない？」
「だからやるのよ」
鈴佳は何かをたくらむような笑みを浮かべて言った。なるほど、と僕はその意図を理解して追及するのをやめた。
「おい、今のどこに納得する要素があったんだよ」
ハヤトはやっぱり納得できないようだった。それもそうだろう。ハヤトはまだ、僕たちがバカをやっていることを知らないのだ。
「いいだろ、面白そうなんだから」
「いや、面白そうってお前……」
さらに困惑するハヤト。多分、僕まで鈴佳みたいなことを言い出したから調子が狂っているんだろう。
「逢坂さんはどう思ってる？」
ここで、逢坂さんに話を振る。最後の悪あがきだ。
「私は、面白そうだと思うよ。それに、すごく楽しそう」
結局欲しかった答えは得られず、項垂れて溜息を吐く。そして、仕方なさそうにこう呟いた。
「分かった。確かに面白そうだ。それでいいんだろ？」
納得はしていない様子だけど、そのうち理解してもらえるだろう。僕たち三人は顔を見合わせて視線を交わす。何となく、三人が同じ

ようなことを考えている気がした。

作業が終わると、四人で帰った。ハヤトはすぐに帰り道が分かれるので、すぐに三人になる。やがて鈴佳とも分かれて、結局また二人になる。逢坂さんと、僕。

「――デートの話だけどさ」

僕は前触れもなくそのことを切り出す。逢坂さんは驚いた様子もなく、落ち着いて話を聞いてくれていた。

「日曜日の、十時にいつもの曲がり角で待ち合わせでいい？」

「帰り道が分かれるところだよね？　分かった」

逢坂さんの笑顔。これを見ると、僕の選択は間違っていなかったんだと安心できる。けど、そんな考えは本末転倒なので、すぐに頭からかき消す。ただ、見ていて幸せな気持ちになる。それだけのこと。それ以上の意味を求めたり考えたりするのは野暮だ。

「――そういえば」

ふと、僕は一つ未解決の問題を思い出す。

「どうしてさ、屋上から飛び降りたの？」

「え？」

逢坂さんが不思議そうに聞き返してくる。

「それは、トモくんにこの世界が仮想世界だって信じてもらうためで――」

「それは分かってる」

僕の意図が分からないのか、逢坂さんは不思議そうに僕を見つめる。様子から察すると、もしかするとそれ以上の意味はないのかもしれない。ただ、偶然屋上を選んだだけ。だとしても、確認の意味でも訊いておくべきだろう。

「でも、屋上から飛び降りる、っていう方法を選んだ理由にはならないでしょ、それは。どうしてさ、その方法を選んだの？」

逢坂さんは納得したように笑みを溢す。その表情は、笑顔のはず

なのにとても冷たく感じた。
「――私のね、友達の話」
噛み締めるように話し始める逢坂さん。
「私の髪を綺麗だね、って褒めてくれた友達が、自殺したんだ」
突然の深刻な言葉に、言葉を失ってしまう僕。それでも逢坂さんは話を続ける。
「その子もね、トモくんみたいに仮想世界のことを知ってくれた。そして、救うべきなのは仮想世界じゃなくて私なんだって言ってくれたの。私を幸せにするために、あの子はどんなことでもやってくれた」
逢坂さんの口調は、辛いことを堪えているような雰囲気ではなかった。もう起きてしまった出来事を、まるで他人事のように眺める言い方。というよりも、そうしようと努めている口調。
「でね、元々あの子はすごく変な子だったの。ファンタジー小説を読んだら、本当に魔法が使えるようになりたいって言い出す。アクション映画を見たら、自分まで強くなったような気分になる。とにかく、すごく変な子だった。だから、私以外に友達が居なくて、私に依存するみたいになってた」
やがて、普段の分かれ道が近づいてくる。いつも点いているはずの街灯が一つ、ちかちかと点滅している。
「突然のことだったの。あの子が、屋上から飛び降りて自殺した。――私は偶然屋上から落ちて、仮想世界のことをその子に知られたんだ。知らなかったことにもできたけど、私はそれを望まなかった。あの子が知らないという状況は、私にとってすごく都合が悪かった。ずっと前から私自身がそう思ってたから。とにかくそんな経緯であの子は仮想世界のことを知ったんだけど、こんなことを考えたらしいの。自分が飛び降りても死なければ、私の語った仮想世界を肯定する根拠が否定できる。だから、その奇跡を手に入れるために飛び降りよう。って。メールがね、飛び降りる前に送られてきたんだ」
そこで、ちょうど分かれ道に辿り付いた。僕は話が続くと思って

立ち止まり、続きの言葉を待つ。逢坂さんも立ち止まっている。
「――私がね、トモくんにしたのは繰り返しだったの。私のことを助けてくれた男の子に、あの子みたいな答えが出せるかどうか。だから飛び降りた。知るきっかけを、あの子と同じようなものにしたかったから。あと、あの子の最後みたいにならないかどうかも知りたいから」
逢坂さんのいうことはつまり、過去にあった出来事を模したからこそ、屋上から飛び降りたということだ。根拠は分かった。けど、問題がまた新たに現れた。
僕は、結局逢坂さんの都合のいいように動いているのかもしれない、という問題だ。
逢坂さんにとって都合の悪いことは起こらない。これは、都合のいいことだけを起こすというものではないはず。けど、もしも、逢坂さんにとってある選択以外全てが都合の悪いものだったら。その選択を選ぶ以外に何も起きないのだから、都合の良いことだけが起こるのと同じ意味になる。結局僕が行動できるのは、その選択の中だけの話なのかもしれない。大筋では、僕の意思なんて存在しない。これだけあがいて、悩んで、それでも。
「――トモくん、明日学校さぼっちゃおうよ」
突然の提案。逢坂さんの表情を見ると、無邪気に笑っていた。さっきまでの雰囲気は何処へ行ったのか。
「学校さぼって、明日デートしよう。きっと他に学生もいないから静かに過ごせるよ」
返事に困り、僕は黙り込んだままだった。すると、逢坂さんはとどめの一言を口にする。
「きっとね、楽しいと思うよ。学校さぼって遊ぶのも」
そう言われると、何の間違いもないように感じる。確かに楽しいはずだ。そんなバカみたいなことが、つまらないなんてあるわけない。それに、僕自身も楽しそうだと思う。
「分かった。じゃあ、明日にしよう。学校をさぼって、十時にデー

ト」
「うん」
それだけを約束して、僕と逢坂さんは分かれた。別れ際にお互いに手を振って。

しばらくそのまま歩いていく。すると、僕の前に春樹さんが立っていた。
「……なんですか？」
「別に。お前があんまりにも人に言われたままのことしかしないのがムカついただけだ」
「言われたとおりのことをしてるつもりはないですけど」
「でもそうなってるんだ。お前がどう思おうが、結果は一緒だよ」
いきなり人の前に現れてこのものの言い様。以前会った時よりも態度が悪くなっている気がする。
「――お前は、それでも今の選択を続けるか？」
「はい」
「じゃあ気にするな。ただ俺がムカついた、それだけの話だよ」
そう言って、春樹さんは僕の横を抜けて立ち去る。何がしたかったのか分からないままだったけど、深く考えずに歩き始める。

次の日の朝。僕は制服を着て、カバンの中に私服を詰めて出かける。公衆トイレで着替え、両親が仕事に出た時間を見計らって家に戻り、荷物を持ち変える。そこから急いで逢坂さんとの待ち合わせ場所に行くと、九時五十分。思ったよりも時間が掛からなかった。
まだ逢坂さんは来ていないようだった。辺りには誰も居ない。寂れた町の通学路なんて、こんなもんだ。特に、この時間帯は。数えられるような数しか車も人も通らない。通る頻度も、数えるのを忘れる程度だ。
しばらくぼうっとしている。時間と共に少しずつ動いていく自分

の影を見ている。
「――ごめん、トモくん！」
逢坂さんの声が聞こえたので顔を上げる。綺麗なワンピースに、ふわふわした帽子。全体的に白を基調にした姿。髪の色も手伝って、とても不思議な印象を受けた。逢坂さんの周りだけ、何か違う世界があるような。
「大丈夫。待ってないよ。それに、待ち合わせ時間にもなってないし」
時間を確認すると、まだ十時まで五分ある。逢坂さんは別に遅刻したわけでもない。
「ありがと。行こう、トモくん」
逢坂さんの言葉に頷き、僕らは並んで歩き出した。
「それにしても、今日暑いね」
「うん。もう九月の後半なのに」
「この辺りはさ、地形とか風とかの関係で気温がすごく高くなることがあるんだよ。今年の夏はそれがほとんどなかったけど、真夏に起きるとホント地獄だよ」
「うわー、なんか嫌だな、それ。引っ越して来たのが八月の終わりでよかった」
そんな何でもないことを話しながら歩いていく。僕はとりあえず、町の商店街を見せて回ることにした。古本屋や駄菓子屋。アーケードゲームを一台だけ置いている雑貨屋なんかも。どこに行っても、逢坂さんは楽しそうに笑ってくれた。
商店街で案内する場所がなくなると、次は公園に行った。子供たちがよく遊んでいる、この町で一番大きい公園。と言っても、他にあるのが小さな児童公園ばかりだからなんだけど。
公園に設置されているアスレチックで遊ぶ子供たちを見ながら歩く。時々逢坂さんに「あれやってみて」とか言われながら、結局どれにも挑戦せずに公園を出た。近所の幼稚園から子供たちが遊びに来ていたのか、この日は本当に子供でいっぱいだったのだ。今度こ

ういう機会があれば、逢坂さんと一緒に遊んでみるのも悪くないかもしれない。
結局昼までの間にほとんど全部を案内してしまった。昼食はパン屋で買ったパンを歩きながら食べた。あんまりにも何もなくて、不思議な感覚になる。今日の今頃、鈴佳やハヤトは学校の中で必死に勉強しているんだろう。こうしてさぼって外を歩いていると、そんな姿が悲しく思えてくる。あんな場所に閉じこもって、机と黒板を交互に睨む毎日。自分もそれを繰り返している人間の一人のはずなのに、シュールに感じてしまう。
「――ねえ、トモくん」
呼びかけられ、逢坂さんの方を向く。逢坂さんはまだパンを食べ終わっていない。
「あの川に行こうよ」
それだけで、逢坂さんがどこに行きたいのかは充分に分かった。
「分かった。行こう」

僕と逢坂さんの出会った場所に来た。昼間、こんなところに来ることは滅多にない。今日の他と比べても新鮮な気分だった。
「ねえ、川に入ろう？」
逢坂さんは楽しそうにはしゃいでいる。こんなにも幸せそうなら、僕も嬉しくなる。この結果を期待したわけではないけど、それでも。
「いいよ。けど、突き飛ばすとかはやめてほしい」
僕は逢坂さんの遊びに付き合うことにした。ズボンの裾を上げ、靴と靴下を脱ぐ。川の水に足を入れて、逢坂さんが来るのを待った。逢坂さんもすぐに川へ入ってくる。スカートを持ち上げて、僕よりも不安定そうだった。
「あーあ、こんなことならジーパン穿いてきたらよかった」
「大丈夫だって。僕がこけないように支えてあげるから」
「それじゃあトモくんを突き飛ばせないよ」
「って、やめてくれ、それは」

そんなに楽しいわけでもないやり取りが楽しい。これは多分、恋人だからなんだろう。
二人でゆっくりと川の中を進んでいく。川の中心にある、中洲のようになっているコンクリートブロックを目指す。意味があるわけじゃない。けど、そこが目指すのにはちょうどいい場所だった。
「とうちゃーく！」
辿りつくと、すぐに逢坂さんはその上に寝転がった。足だけを水につけて。僕もそれを真似して寝転がる。水の流れと冷たさが心地いい。目を閉じても、瞼越しに感じられる太陽の光が暖かい。うるさいとも言えるぐらい僕の周りにあるもの。なのに、眠くなる。
「――トモくん？」
「なに？」
「寝ちゃったかと思った」
「そんなわけないよ」
僕は瞼を開いて逢坂さんの方に顔を向ける。逢坂さんは不思議な笑顔を浮かべていた。どきり、と心臓が跳ねる。
「――私ね、あと一つだけトモくんに言わなきゃいけないことがあるの」
また。僕はそう思い、そして返事をする。
「分かった。聞かせて」
逢坂さんは安心したように笑った。それが何故か、僕には心配だった。何か意味のありそうな、含みのある表情。これから話されることが、少なくとも嬉しい報告でないことは直感的に感じた。
「私のずっと言ってる、仲のよかった友達のこと。実はね、友達じゃないんだ」
「え？」
「恋人だったの」
その瞬間、思考がまとまらなくなる。友達と聞いて女の人を想像していたけど、恋人ってことは男だ。そして逢坂さんにはもう好きな人がいた。僕はその埋め合せでしかないのかもしれない。

急に崩れだす僕の意識。そして、自我。けれど逢坂さんはそれを制するように次の言葉を言った。
「私が男の人と付き合ったりしたのは、トモくんが初めてだよ」
「……どういうこと？」
「私の昔の恋人は、女の人。幼馴染で、一番仲のよかった友達でもある」
訳が分からなくなってくる。逢坂さんは、男性ではなくて女性が好きなのか。そうすると、僕とのこの関係は好意でもなんでもない、ただの遊び。僕がハヤトとゲームをして遊ぶときのような感覚なのか。
「覚えておいて、トモくん。その子の名前は、高嶺蛍」
「たかね、けい？」
「そう。ほたるって書いて、けいって読むの。綺麗な名前でしょ？」
「……うん」
不思議な感覚だった。僕は、間違いなくその蛍という子に嫉妬している。理由なんて、何一つないはずなのに。むしろ、逢坂さんの過去に幸せがあったと分かったなら、喜ぶべきなのに。今、胸中に広がるのは平凡で当たり前の感情。そして、何の役にも立たない。
「私はもしかしたら、蛍の代わりにトモくんを使ってるだけなのかもしれない。私にはそんなつもりはないよ？　純粋に、トモくんと付き合ってみたいと思った。だから、今こうしてる。けど、私が今まで生きてきて、一番好きになった人は蛍なの。二番は、居ない」
心が押し潰されそうになる。平凡な表現だけど、まさにそれが適切な言い方だ。本当に、心どころか身体の中全てが潰されそうだと感じる。
「ごめんね、トモくん。私は、蛍が好き」
その言葉が最後だった。もう逢坂さんは何も言わない。僕に対するフォローの言葉もない。最悪の気分だ。これじゃあ、僕はただ逢坂さんにいいように使われているだけの人間だ。昨日思った通りなのかもしれない。

――違う。
僕が最初に決めたことを思い出す。逢坂さんに、幸せになってもらう。楽しんでもらう。そう決めたんだ。また考えが変な方向に向かっていた。
分かっていたはずだ。自分には何もできない。何も変わらないんだ。何の力もない、無力な人間。それでもやりたいと思ったのは、逢坂さんを楽しませ、幸せにすること。そこに、僕の意思なんて関係ない。
昨日の春樹さんと会ったときのことを思い出す。春樹さんは、『――お前は、それでも今の選択を続けるか？』と訊いてきた。僕はそれに頷いたんだ。続けよう。逢坂さんを楽しませることだけを。
「――良かった」
僕は、何とかその言葉を口から捻り出した。途端、逢坂さんが驚いて起き上がる。
「どうして？　自分が否定されて悔しくない？　私はトモくんじゃなくて、蛍のことしか頭にないんだよ？　それでも、良かったなんて言える？」
取り乱したようにまくし立てる逢坂さん。けれど、僕はそれに落ち着いて答えることができた。
「言えるよ。だって、逢坂さんの過去が思っていたよりも幸せそうなんだから。むしろ、他に何の言葉も出てこない」
「だって……普通は嫉妬とか、色々あるよね？」
「うん。そんな感情を持つのは普通のことだと思う。けど、持っていたって使わなければいい話だ。僕はそうしただけだよ。ただ嫉妬した。その事実があるだけなんだ。口に出す言葉にも、本心にも関係ない」
逢坂さんは黙り込む。表情は、何かを考えているようなものだった。そのまま待ってみる。やがて、次の問い掛けが帰ってくる。
「トモくんは、蛍のことを覚えていてくれる？　私みたいに、誇りに思ってくれる？」

「もちろん。逢坂さんが一番好きな人なら、疑う必要もないよ。それに僕は、その蛍って子に言わないといけない言葉もあるんだ」
そして、僕も逢坂さんのように身体を起こした。そして、逢坂さんの手を取る。その心の中にいる高嶺蛍という記憶に。死んでしまった少女の存在に言葉が届くように願いながら呟く。
「――ありがとう」

後はもう、それまでと変わりなかった。流れる時間を感じながら、ただ川原に座って話していた。空が暗くなり始めたところで、僕と逢坂さんは帰ろうと同時に言った。
道を歩く。時間が時間だから、下校する学生も沢山見かける。中には僕のクラスの奴も居て、僕たちを見ては物珍しそうに視線を送ってくる。けど、直接話しかけてくる奴は居なかった。何の邪魔も入らず、デートは順調なまま終わった。
「トモくん」
いつもの分かれ道。

「ありがとう。バイバイ」

逢坂さんはそう言い残して帰っていく。僕はその後ろ姿に向けて手を振った。また明日、と。きっとまた平凡で何もない、ただ楽しくてバカらしい日常に戻るものとだけ思って。研究発表の手伝いも、缶詰になって打ち込む授業も、まるで苦になる気がしなかった。

次の日、逢坂さんは転校した。

第五章　それが、さようなら

第五章　それが、さようなら

「逢坂夏海さんが、転校することになりました」
朝のホームルームで担任が言った。信じられなかった。呆然と、ただ意識が飛んだように座ったままだった。
「おい友也！」
ハヤトの大声ではっとする。ハヤトは僕のすぐ目の前に立っていた。机に手を突いて、まるで怒っているようにすら感じられる。
「逢坂さんはどうした」
質問に答えられず、僕は首を横に振る。
「お前、昨日一緒に居たんだろ？」
「そうだよ」
「じゃあ何で――」
「知らないよ！　昨日だって何の話もされなかった。こんなこと、転校するだなんて……」
そこまで言って、周囲に気付く。明らかに、教室全体の注目が集まっていた。
「とにかく、僕は知らなかった。こんなことは」
「だったらどうすんだよ」
「どうするって……」
言われて思い出す。そういえば、ゆっこさんは逢坂さんと関係のある人だ。もしかすると、ゆっこさんに聞けば何か分かるかもしれない。
「ゆっこさんだ！」
「はあ？」

僕はハヤトに答える時間も惜しいと感じて走り出す。ハヤトは僕を追いかけてくる。
「どうしてゆっこさんなんだよ」
「あの人、逢坂さんの知り合いなんだ」
「なるほどね、そりゃ納得だ」
僕とハヤトは二人して走る。授業がもうすぐ始まる時間だ。職員室の前まで辿りつくと、ちょうどゆっこさんが授業に向かおうとしていたところだった。
「ゆっこさん！」
「何だよ、慌しい」
「逢坂さんが転校したんです！」
「そりゃ残念だ。夏海ちゃんのご両親は仕事柄転勤が多いからな」
「そんな建前はどうでも――」
がっ、と額を教科書の角で叩かれる。突然の痛みに冷静さを取り戻すことが頭に浮かんだ。
「……ちょっと手ぇ出せ」
ゆっこさんはそう言って、自分のポケットの中に手を突っ込む。僕が素直に手を出すと、その中に何かを握らされる。
「そのメモにはな、何の意味もない場所が書かれてる。本当だ。マジで何の意味もないからそんなとこ絶対行くなよ。行ったって夏海ちゃんなんか絶対居ないからな」
ゆっこさんは意味ありげに笑いながらそんなことを言う。そのおかげで、手に握らされたものの意味がよく分かった。
「ありがとうございます！」
「待て」
急ごうと走り出したところを呼び止められる。
「お前、本当に夏海ちゃんが転校すると思ってるのか？」
「転校……？」
それを言われて、初めて考える。考えてみれば、転校する意味なんて何一つない。それなのに転校するということは、何か理由があ

るはず。
転校すると、この学校の人はもう逢坂さんがいないことを何も疑わない。そしてどこにも実際には転校しないままで逢坂さんが本当の世界に書き出されたら。誰も逢坂さんがいないことを不審に思わない。
「――はい。本当に、逢坂さんは転校すると思います」
僕はあえて思考と反対のことを口にする。そして、意味ありげに笑ってみせる。ゆっこさんはそれを鼻で笑って答えた。
「早く行け！」
「はい！」
僕はまた走り出した。その後ろをやっぱりハヤトがついてくる。走りながらメモを開き、場所を確認する。どうやら、隣町にある神社に向かえばいいらしい。

学校を出ると、ハヤトは僕とは別の方向に、自転車置き場に向かっていく。相手をする時間もないので、僕はそのまま走って駅を目指す。電車を使えば隣町までならすぐに行けるだろう。
「――友也！」
不意に後ろから呼ばれる。振り返ると、ハヤトが自転車に乗って追いかけてきた。
「このチャリ使え」
それを言われて立ち止まる僕。確かに、自転車の方が明らかに早い。駅までも距離があるし、こっちの方が効率的だ。
「どこから持ってきたんだよ」
「鍵の掛かってないやつを、ちょっとな」
そう言って自転車から降りるハヤト。僕は代わりにその自転車に乗る。
「サンキュ、ハヤト！」
「早く行けよ！」

言われるまでもなく、僕は全力で自転車を扱ぎ始めた。一刻でも早くしないと、逢坂さんがこの世界からいなくなる。

だからどうした、と言われるとそれまでだ。何の反論もできない。ただ分かっているのは、僕がやりたいことは逢坂さんがいないとできない。それだけのことでしかない。

自転車の手伝いもあって、何とか電車の発車する時間よりも早く駅に辿り付いた。これを逃すと、次は三十分後になるところだった。ぎりぎりで電車に乗り込み、隣町の駅へ向かう。降車するべき駅名は、ゆっこさんのメモに書いてある。

駅を降りて、神社へ向かう。メモもあるし、大きな神社だから道路標識や看板にも案内がある。こっちでも、駅で鍵の掛かっていない自転車を拝借した。

見知らぬ町並み。方向感覚もなくなってくる。それでも、次第に看板が示す神社までの距離は短くなっていく。それを信じてひたすらに自転車をこぎ続ける。

そして――やっと見つけた。神社へ上る階段。上の方には知らない大人の人が立っている。多分、見張りだろう。僕はその見張りから逃れる方法を考える。このまま階段を上ると、確実に見つかる。かといって、他に上るための階段はない。

そこで思いつく。階段を使わなくても、周りから上っていけばいいんだ、と。

神社は階段の周りは完全に林になっていて、簡単に姿が見つかることはない。ましてや、回り込めば確実に神社の中に入ることができるだろう。

僕は決意し、自転車を乗り捨てる。そして階段には近づかず、林の中へと足を踏み入れた。蜘蛛の巣が何度も顔に掛かる。また、整備されていない所為で枝が邪魔で歩けない場所も沢山ある。それでも必死に登っていくと、頂上はすぐに見えてきた。同時に、蒼い光

も見える。その光の方向に何かあるのだろう、と思い、歩調を速める。
林を抜けると、階段で見張りをしていた大人はこっちに気付いた。そして、すぐに取り押さえようとこっちに向かってくる。
「――いい、こっちに来させろ」
その男の行動を制止する声。春樹さんの声だった。
「誰？」
続いて、逢坂さんの声。蒼い光が、神社の建物越しに見える。その方向から声が聞こえた。
「逢坂さん！」
僕は声を上げて走り出す。そして、建物の横を抜けた。
そこには、蒼い光を放つ宝石があった。それは逢坂さんの手の中にある。そして、それと同じ光を放つ穴。空間の上に大きく開いた穴の中から、その光が大量に漏れ出していた。
「トモ、くん」
逢坂さんは驚いていた。僕がどうしてここに来たのか。どうやってこの場所を知ったのか。色々と分からないことだらけだろう。
けど――その隣に立っている春樹さんには、何の驚きもなかった。
「友也、どうしてここまで来た」
「理由がないとだめなんですか」
「いや。でも、お前にはあるだろ」
まるで全て分かりきっているような春樹さんの言い方。相変わらず、どこか気に入らない。何も間違ったことなんか言ってないのに、それでも。
「……僕は、逢坂さんと付き合ってるんです。それじゃ理由になりませんか？」
「ならないな。恋人同士なんてのはただの事実だ。お前がここに来る理由の、さらに理由にはなるだろうが、直接の理由じゃない」
そう言って春樹さんは僕のほうに歩み寄ってくる。
「俺が思うに、お前は夏海を幸せにしてやりたいんだろ？」

「……はい」
何の反論も出なかった。頷くことすら気に入らなかったけど、それ以外の行動はとれない。嘘を吐くわけにはいかないんだ。
「もう充分だよ。お前はもう、夏海を幸せにした。これ以上にないくらいにな」
「まだできます！　これからいろんなことがあるんです！　学校では文化祭もあるし、恋人として、まだやってないことも沢山ある！」
「けど、それを正しいかどうか決めるのは夏海だ。違うか？」
また。反論の言葉も思いつかない。完全だった。春樹さんはよく考えていた。逢坂さんのこともそうだし、僕がどうしようとしているのか、何を考えているのかでさえ。全て掴み取られているのだ。この人に。
「もうお前は聞いただろう？　夏海は高嶺蛍が好きなんだ。愛している、と言ってもいい。お前と高嶺蛍の間には差がありすぎる。お前じゃ、何もかも足りてないんだよ。本当に夏海を幸せにするためには」
悔しいけれど、事実だった。それに、僕もそれは昨日認めてしまった。
「けど、僕はその上でまだ逢坂さんを幸せにしたいんです」
「無理だ。分かれよ」
慈悲も何もない春樹さんの言葉。次第に、悔しさが怒りに変わっていく。春樹さんに対してではない。自分自身に対しての怒り。この無力さ。何もかも自由にならないこと。そんな、今まで仕方ないと認められていたものに怒りを覚える。
「お前は聞いていないだろうがな、高嶺蛍が自殺したのには理由があるんだ」
「……奇跡を手に入れる、ってやつですか？」
正直、僕にはそんな真似はできない。むしろ、やりたくもない。それをしてしまえば、逢坂さんは苦しむ。それに、幸せにすることもできない。

「違うんだよ。それは、理由の一つだ。ただ、夏海が一番好きなやつってだけだ」
「え？」
理由が一つでない。それは、僕の高嶺蛍を否定するような思考を歯止めさせるのに充分なものだった。
「高嶺蛍は本当に頭が良かったんだよ。全国模試で物理と数学の教科一位を取ったこともある秀才だ。そんなやつが、ただ後に夏海を苦しめるような自殺をすると思うか？　まず、あいつはこの世界のことも考えた。この世界が一秒でも長く保存されるために必要な条件。それは何だと思う？」
「……逢坂さんが、本当の世界に成功して書き出される」
僕の頭ではそれぐらいしか思い浮かばなかった。
「まあ、それもある。けどな、ただ成功しても無意味なんだよ。分かるか？　科学ってのは日々進歩していくもんだ。もしも、夏海の書き出しが成功した時には、すでに他に沢山の成功例が存在したらどうする？　おそらく、成功例として世界が保存されることはない。あっても、データ採取のための僅かな期間だ。高嶺蛍はそんな事態を想定した」
話が進んでいく。そのほどに、僕は高嶺蛍に圧倒的に敗北していることを思い知る。逢坂さんに愛されている。勉強もできる。そして、この世界の未来を考えることもできた。僕にだって、同じことを考えられるだけの条件と材料はあった。けど、考えられなかった。これが鈴佳の言っていた、天才と凡人の差なのだろうか。
「――高嶺蛍の考えたことは二つだ。一つは、夏海をより確実に現実世界へ書き出す方法。そしてもう一つは、より早い段階で夏海を現実世界に連れて行く方法。そのために、高嶺蛍は夏海を通して現実世界の成功例の情報を聞き出した。現実世界には、今三体の成功例が居る。その三体の共通事項は、絶望を体験しているということだ」
「絶望、ですか」

「この上ない不幸と言ってもいいだろうな。あるものは両親が犯罪者によって殺害され、天涯孤独の身となった。またある者は差別され、社会から弾き出され、孤独な人生を送っていた。そして最後の一人は母親に殺されかけた。こういった不幸が、三人の成功例の共通点だったんだよ」

「でも、それは偶然じゃ……それに、他にも共通点なんていくらでもありますし、成功の要因にしては弱い気が……」

「それが凡人の考えだよ。俺もそうだった。けどな、現実世界の学者たちも高嶺蛍と同じ見解だったんだ。絶望こそが必要な条件だってな。で、その理論はすぐに正確性を色濃いものにするんだ。四人目の成功例によって」

四人目。一人増えるごとに嫌な感覚が胸を走る。成功例が増えるということは、この世界が早く消えるということだ。

「四人目は、自分の運命が受け入れられずに何度も自殺しようとしたやつだった。もちろん、システムがそんなこと許さない。奇跡的に、何度も、何度も生き延びるんだ。死ねないってのも、時には絶望になるんだ」

春樹さんの言葉は辛辣で、直接僕の中を殴られているような感覚になる。もう、僕には何の言葉も返す気力がなかった。全ての話は、最初から最後まで僕の手の掠めるような場所にはなかったのだ。

「それでいよいよ俺が夏海に絶望を与えなければ、と悩んでいたところだ。高嶺蛍が自殺したんだ。屋上から飛び降りて。こうして夏海には絶望が植え付けられた。これで一つ、高嶺蛍の計画は完了したわけだ。そして、もう一つの計画も実行されるかと思った。外の世界へ書き出されるためには、書き出される対象の同意が必要なんだ。高嶺蛍が生きていた頃は、夏海は書き出されることを嫌がっていた。しかし高嶺蛍は死んだ。絶望し、他に友達もいない夏海にはこの世界に未練なんてものはない。だから、すぐに外の世界へ書き出されることに同意してくれると思った」

そこで春樹さんは言葉を一旦区切る。

「けどな、そこで高嶺蛍の夏海への愛情が挟まってくるんだ」
「どういうことですか、それは」
何もかも無駄だと悟った僕は、今は真実の全てを知りたいと思っていた。僕の周りで起きていること。起きたこと。せめて、それだけは把握したかった。
「高嶺蛍の遺言だ。夏海の語ったもう一つの意味と、俺の語った自殺の意味。そして、最後の願いが書かれていた」
「最後の願い――」
「夏海に対する願いだ。内容は――」
「待って、兄さん。私が言う」
逢坂さんは不意に話へ入ってくる。僕は逢坂さんの顔を見た。そこに、表情は何もない。けれど、以前見たときのように空ろではない。むしろ、生き生きとしているようにさえ感じる。
「――蛍は、自分が死んだことで私が不幸になることを悔いていたの。そして、最後に願ったのは、その不幸を癒してくれる幸福に出会うまで、決して外の世界には行かないで欲しいっていうものだった。私はそれを守った。一刻も早く外の世界へ行くため、そして絶望を癒してくれる人を探すため、転校した。そこで出会ったのが、トモくんだったの」
話が、繋がった。僕ははっとしたように春樹さんの顔を見る。
「つまりだ。お前は夏海を守るシステムに操られたわけでも、ましてや俺たち現実世界の人間の意志に操られたわけでもない。夏海を誰よりも愛して、夏海がまた誰よりも愛した高嶺蛍という死者の理論に操られたんだ」
死者の理論、という言葉にショックを受ける。つまり僕は、もう何もすることもできない、僕よりも不利な条件の少女に操られたのだ。同じ仮想世界の人間で、自分は生きている。なのに、もうこの世界に存在しない人間の理論どおりの行動をとった。完全な敗北だった。
「そしてお前に与えられた意味は夏海の不幸を埋め合わせること。

つまり、蛍の死を夏海に乗り越えさせることだったんだよ。覚えはあるか、お前、そんな行動をとったころあるだろ」

言われて思い出す。僕が逢坂さんとデートに行った川で言ったこと。間違いなく僕は高嶺蛍を認めた。そして、夏海さんにとっての高嶺蛍の死を、ただの悲惨な出来事でなくなるような言動をした。

『逢坂さんの過去が思っていたよりも幸せそうなんだから』

それは逢坂さんにとっては救いのような言葉だっただろう。だからこそ、逢坂さんはその言葉を一度疑った。けど僕はその疑いを否定し、本心からの言葉だと証明して見せた。

『ただ嫉妬した。その事実があるだけなんだ。口に出す言葉にも、本心にも関係ない』

そして、そこに重ねられる逢坂さんの縋るような一言。

『トモくんは、蛍のことを覚えていてくれる？　私みたいに、誇りに思ってくれる？』

これにも僕は答えた。逢坂さんのためになるようにと思って紡いだ言葉。

『もちろん。逢坂さんが一番好きな人なら、疑う必要もないよ。それに僕は、その蛍って子に言わないといけない言葉もあるんだ』

さらに、これだ。

『――ありがとう』

きっと、この言葉が決め手だったんだ。逢坂さんにとって最高で唯一の存在、高嶺蛍。その人を見たこともない人物に肯定されることは、とても心強いことじゃないだろうか。逢坂さんがその存在を完全に信じられず、死を受け入れられてないのなら、なおさら。

つまり、逢坂さんは大切な人の死を乗り越えるきっかけを手に入れたんだ。僕の言葉によって。

「……分かったか、友也。お前はもう充分役目を果たしたんだ。もうやめろ。誰かの願いを潰すようなことをしてまで、お前の願いは貫き通せるもんなのか？　ましてや、相手は高嶺蛍だ。夏海の最愛の人だ。そして死者。俺たちにできることは何だ、よく考えてみろ」

春樹さんに言われるほどに、僕は言葉を発する気力も失っていく。できることは何だ。春樹さんの言葉が胸に突き刺さる。そんなもの、一つしかない。ただ、書き出される夏海さんを見送ることしか――

――違う。

「嘘吐くなよ！」

僕は気付いた途端、慌てるように春樹さんに噛み付いた。

「できることなんてどうでもいいって言っただろ！　なんで、こんな時だけ、立派な大人みたいな顔するんだよ！　春樹さんって、もっと酷い人だっただろ！　だから信じたんだよ。できることとか、勝利も敗北もどうだっていい。ただ、やりたい。そう思うことができたから、逢坂さんの幸せを願ったんだよ！」

驚いた様子の春樹さんと逢坂さん。突然吠え始めたんだ。こんなにも、格好悪く。驚かれて当然だ。

「僕は願う。逢坂さんが少しでも楽しいと思えるように。そして、そうするんだ。だから、僕はまだここから全力で逢坂さんを呼ぶ」

僕は隙を見て逢坂さんに近づこうと駆け出す。けど、春樹さんが気付いて素早く止められる。それでも僕は悪あがきを続ける。少しでも近づこうと、近づいたところで意味がなかろうと、ひたすらに踏ん張った。春樹さんすら押し倒してしまおうとした。

「もし、まだこっちで僕と一緒にいることのほうが楽しいと思うなら、それが幸せだって思うならまだ行かないで！　何でもやるよ。ほら、あの公園のアスレチックで遊ぼう！　今度はジーパンを穿いてさ、動ける格好でデートしよう！　川にも入ってさ。冬なら無理だけど、次の夏はきっと暑いんだ！　何度も地獄みたいに暑くなる。そんな日は二人で学校もさぼって、一日中川で話そう！」

「黙れッ！」

春樹さんの絶叫が響き渡る。その迫力に圧され、僕は言葉を失った。

「お前なぁ、どうして嘘だけで終わらせてくれないんだよ。手ぇ上げるぞ糞野郎！　お前にはな、俺だって感謝してるんだ。どうして、暴力なんか使わせる。やめろよ、そんなことはしたくねぇんだ……」
春樹さんの言葉がどんどん弱くなっていく。僕はもう、圧し進もうとするのをやめていた。
「お前に分かるか、大切な家族がどんどん駄目になっていくっていう恐怖が。日ごとに目から力がなくなっていく。口数が減る。人と目を合わさなくなる。学校もサボるし、考え方もどんどん悪い方向に変わっていく。お前が！」
春樹さんは僕の肩を鷲掴みにする。
「……お前があの花火の夜に夏海に希望を見せなけりゃ、今頃夏海は駄目になってたよ。それを止めたのは、お前なんだよ。能力とか、努力とかじゃねえ。偶然だろうが関係ねえ。お前なんだよ！」
春樹さんの迫力と感情の強さに完全に負けてしまった。僕は、ただ唖然とその言葉を聞くしかなかった。
「……夏海。もう行け」
最後の宣告がなされた。逢坂さんは頷く。宝石――おそらくローズクオーツの指輪――と穴から溢れる光がさらに増える。
「逢坂さん！」
僕は衝動的に走り出した。
「やめろ」
春樹さんが僕の胴に膝を入れる。物凄く重い一撃。それだけで僕は倒れてしまう。さらに勢いあまって後ろに押し返されてしまう。
「逢坂さん！」
まだ、僕には走る気力があった。立ち上がって再び駆け出す。
「止めろよ！」
今度は春樹さんの拳が伸びてきた。顔の横からの抉るような一撃。ぐらぐらと世界がゆれ、目がフラッシュでも見たように落ち着かない。動く力は完全に奪われてしまった。
それでも、僕は呼ぶと決めたんだ。何も報われなくても、変わら

なくても。ただ逢坂さんの幸せの可能性に縋って。
手を伸ばす。何か掴めるんじゃないかという気がした。気のせいだとは思わなかった。そのまま声を張り上げて呼びかける。
「逢坂さんッ！」
「そんなに好きなら名前で呼べ！」
春樹さんの言葉と同時に、僕の手は払われた。けれど、そんなことも気にならないほど愕然とする。
そうだ。僕はまだ一度も大切なことを言っていなかった。
「逢坂さん！」
春樹さんに言われた、名前で呼べということは頭から飛んでいた。頭の中に残っていたのは言わなければいけない大事なこと。
「僕は――」
必死になって言葉を紡いだ。けど、それと同時に蒼い光が爆発した。轟音とともに、全てが光に飲み込まれてしまう。

光の中で、音も、視界も、痛みの感覚も消えた。
時間の流れさえ遅くなったように感じる。
そして、逢坂さんの姿だけが見えた。
――ありがとう。
口が、動いた。

一瞬で光は消え去る。何事もなかったかのように、辺りは静けさに包まれていた。青白い光を放つ宝石も、穴もない。
僕の目の前には、逢坂さんが倒れていた。
「これは……」
「精神が書き出された後の身体だ。生き物としては生きている。まあ、植物状態みたいなもんだ」
背後から春樹さんの声。いつの間に位置関係が変わったのか、春樹さんは案外遠くから歩いてこっちにやってくる。僕は痛む身体に

鞭打って、何とか立ち上がる。
「これから俺には最後の仕事がある。夏海の体を乗せた車で、事故を起こさなきゃいけねぇんだ。そして崖から転落。両名とも死亡。記録にはそう残ることになる」
「なんでそんなことを――」
「高嶺蛍だ」
まただ。また高嶺蛍の名前が出てくる。
「遺言にあったわけじゃないがな、以前から夏海と話していたそうだ。夏海が本当の世界に書き出された後は、できるだけこの世界が普通であるようにしてほしい。まあ、ある意味遺言といえば遺言だ。高嶺蛍のその願いを、夏海が覚えていた。だから、自分の体ができる限り不自然なく処理されることを望んだ。謎の植物状態の肉体が残るのも嫌だったんだ。そこで俺の出番。車で居眠り運転、そして転落事故。俺と夏海の両名死亡。――ああ、安心しろ。俺も死ぬわけじゃない。落ちながら、元の世界に戻らせてもらうよ」
春樹さんは言いながら逢坂さんの身体を抱きかかえる。何の苦もなく持ち上げたところを見ると、相当身体を鍛えていることがわかる。
「……どこまでも、高嶺蛍の思いで動くんですね。誰も彼も」
「なに言ってんだよ。動くのは自分の思いに他ならない。ただそれが高嶺蛍の思い通りだっただけだ。違うか？」
春樹さんの言葉。相変わらず、素直に頷きたくない雰囲気を持った人だ。けれど、僕はそれが正しいと思ったので頷く。春樹さんは嬉しそうな笑みを溢す。
「ありがとうな、友也。もう会うこともないだろうが、お前はなかなかに面白いやつになったぞ」
「どういうことですか、それは」
冗談めかして言う春樹さんに、僕も笑って返した。
「始めて会ったときだよ。あんなに情けなさそうなガキが、こんなにも反抗期しやがって。本当に面白いぞ、お前。その調子だ」

「はいはい、分かりました」
あえて呆れたような言い方をしてみせる。そして、お互いに笑いあった。
「じゃあな、友也」
「はい。さようなら、春樹さん」
それが、僕と春樹さんの最後のやり取りだった。春樹さんは逢坂さんの身体を肩に抱えて歩いていく。神社に上ってくる階段の脇には、見張りの大人の人が立っていた。春樹さんが先に行ったのを確認すると、その人も階段を下っていく。
僕はずっと、その姿を見送った。姿が見えなくなっても、じっと立ったままだった。もうこの辺りには居ないだろうな、と思えるほど時間が経って、やっと僕は見送るのを止めた。力尽きたように地面に腰を下ろして、汚れるのも気にせずに寝転がる。春樹さんのパンチが予想以上に効いている。まだ気分が悪い。本当に、最後になんてことをしてくれたんだ、あの人は。置き土産が拳だなんて、ありえない。
今更ながら、僕はあの逢坂春樹という個人のことを気に入っていたんだな、と理解する。言動に気に入らないところが多々あっても、素直に話を聞き入れられたのはそれが理由なのかもしれない。

体調も回復して、僕は自分の町へと戻っていく。自転車を扱いで駅を目指す。神社への道と違って、順序が分からずに何度も道に迷った。見知らぬ町の空気を味わいながら、神社へ行くときの何倍もかけて駅へ戻る。
電車に揺られながら、僕は何も考えなかった。せいぜい空が青いな、とか、今日は昨日より大分涼しいな、とか。そんなものだ。あと、今日も部活をやるのだろうか、とか。
自分の町に着いた。出迎える人は誰も居ない――はずだったのに、駅の改札を抜けると、鈴佳とハヤトが待っていた。

「夏海ちゃんは？」
鈴佳が心配そうに訊いてくる。僕は首を横に振る。
「行ったよ。もう。多分もう会えないと思う」
「なんで止めなかったのよ！」
珍しく、鈴佳が泣きそうな声をしていた。きっと、それだけ逢坂さんと仲良くなったんだろう。僕の知らないところでも話をしていただろうし、もしかすると女子の定番である恋愛相談なんてものもしていたかもしれない。
「あんた、あの子の彼氏でしょ！」
鈴佳の言葉が胸に刺さる。けど、痛くなかった。こんな程度の痛み、痛くない。春樹さんに殴られた時と比べたら、蚊に刺されたようなものだ。まさか、春樹さんの置き土産がこんな形で役に立つだなんて。
「彼氏だから、止められなかったんだ」
僕はできるだけ深刻な雰囲気を出さないように、けれどふざけているようには見えない程度に笑う。鈴佳は言葉を失ったのか、仕方なさそうに項垂れる。
「ばーか」
一回だけ、軽く胸を小突かれる。それで終わりだった。
「ハヤト。チャリ、サンキューな」
「いいって。代わりに飯奢ってくれたら」
「ちょっ、お前こんな時も飯かよ」
「当たり前だ。腹が減ってたら他のことやる元気も出ないぞ。ほら、行こうぜ」
ハヤトに肩を叩かれてふらついてしまう。
「行こうって、どこに？」
「飯だよ、飯。もう昼だぞ？」
「マジで？」
時計を確認しなかったので気付かなかったけど、確かにお腹も空いている。駅の時計を見上げてみれば、十二時を少し過ぎた時間だ

った。
「よし、じゃあどこか店で食べよう」
「全部友也の驕りね」
「鈴佳の分は出しません」
「あんた、部長を何様だと思ってんの？」
「はいはい部長様。偉いからって奢ってもらえるわけじゃありませんよー」
「あー、頭きた。あんた今日の部活またデータ入力決定」
「ふっ、ふざけんなよ！　昨日普通の作業になったばっかじゃん！」
「だから、罰だって言ってるでしょ」
「それに人手足りなくなるだろ！」
「ハヤトくんがいるから間に合ってます」
「らしいぞ、友也。残念だったな」
「うわー、最低だ、この人たち」
「それが嫌なら私にも奢ることね」
「それは嫌」
「えー」
くだらないことを話しながら歩いていくと、ゆっこさんがいた。
「あれ、ゆっこさん。なんでこんな所に？」
「飯時に飯食いに来て悪いか、ガキ」
「悪くないですけど、授業間に合いますか？」
「お前らこそ授業受けたのかよ」
「それは……ハヤト！」
「俺は二時間目まで受けたから勝ち組みな」
「私も二時間目まで」
「僕だけか、丸々さぼったのは」
「……ってかお前ら、一コマでもサボったら駄目だろ」
「そうですよね、ゆっこさん。さすが先生の鑑！」
「ちょっと友也、こんな時だけゆっこさんおだてないでよ！」
「うるさいな、そんなんだと私が昼飯奢ってやる気なくすだろ」

「マジですか？」
「うわー、ゆっこさんが太っ腹とか、明日の天気は嵐か？」
「ちがうわ、槍よ」
「どんな天気だよ。結局食いに行くのか行かないのか」
「俺は行きます」
「私も！」
「あ、僕もです」
「よし、じゃあ私のお気に入りのラーメン屋連れてってやる。ついて来い。車向こうに停めてあるから」
「それってあの店ですか？」
「ああ。お前はこの前連れてったよな」
「はい。美味しかったです」
「ホント？　うわーすっごい楽しみ」

こうして僕は日常に戻った。そして逢坂さんへの思いと、逢坂さん自身、春樹さんに対して、自分の中で『さようなら』をした。これまでの僕の行動は間違っていたのか、正しかったのか。何がプラスになって、何がマイナスになったのか。
そんなことはどうでもいい。
間違いないのは、僕はもっと逢坂さんを幸せにしようとした。
だけどできなかった。
それだけの、なんでもない、当たり前の事実。僕たちが無力で平凡な人であるかぎり。

第六章　歩くための道がある。

第六章　歩くための道がある。

――以上が、私が貴方に話せる全てです」

老人は全てを語り終えた様子で、瞳を閉じて息をつく。その正面に、椅子に座って話を聞いていた少年は呆気に取られた様子であった。

「……それは、作り話ですか？」

少年は尋ねる。老人の話は、あまりにも突拍子のないものだった。自分たちの存在する世界が仮想のものであるという事実。それを肯定しない限り、老人の話はどこまでも作り話となる。

「貴方がそう思うなら、そうなのでしょうね」

老人は呟く。

「ただ、この話というものは現実のものです。その内容の是非は、あまり関係のないものではありませんか？」

「はい……」

「ああ、そんなに悩まなくてもいいのですよ。これは年老いた者の他愛もない無駄話として受け止めてくれて結構です。ただ、知ってほしい。それが私の願いですから。貴方に何か特別な感情を抱いてほしいわけではないのです」

少年は老人の言葉を受け、自分の中で割り切った。ひとまず、この話が現実であろうが幻想であろうが、その話自体の存在は信じよう、と。その上で、少年にはまだ尋ねなければならないことが沢山あった。

「貴方は……逢坂夏海のことが好きだったのですか？」

「ふふ――どうでしょう。あれはそういう感情ではなかったのかも

しれませんね」
笑いながら、懐かしむように呟く老人。それを見て、少年は考える。老人の話が幻想だとしても、その全てが完全に幻想であるわけでもないようだ、と。少なくとも、その幻想の元となる出来事があった。
「結局私は、何の感情もはっきりと言葉にしませんでした。最後まで、そして今でも、彼女の名前を呼ぶことはないです。一つはけじめです。彼女の名前を私が口にする権利は、今はないのです。そしてもう一つは、きっとそれが恋であったからなのでしょう。今になって振り返ると、恥ずかしいことをしていたものです」
老人は無邪気に笑みを溢す。少年は不思議だった。年老いているはずのこの人物が、まるで自分たちと同じように感情の起伏に富んでいることが。
「どうして、ハヤトさんはずっと苗字が語られなかったのですか？」
少年は次の質問をする。
「実を言うと、私はあいつの旧姓を覚えていないのです。あいつは私のように、世間で言う婿入りをしたのですよ。今は異なる姓で生活しています。それに――」
老人は不意に咳き込む。少年はその姿を心配そうに見守っていたが、老人は大丈夫、と言って手で少年の視線を制する。
「――それに、昔から私はあいつの姓に興味がありませんでしたからね。名前だけですよ。使ったのは。姓なんて特に覚えるものでもありませんでしたから。その所為でしょうかね、年を重ねるうちにあいつの旧姓が思い出せなくなったのですよ」
「そう、ですか」
少年は残念そうに呟く。しかし、老人はまた笑った。これで何度目か。老人は何かあるたびに笑うのだった。
「仕方ないのです。人が老いるというのは、そういうことですから。非常に残念で仕方ないことですが、そこにこだわっていては他の楽しみまでなくなってしまいますよ」

ふう、と老人は疲れを吐き出すように息をつく。少年は、質問まで間を空けようと思った。
「――ああ、ゆっこさんは生涯独身でした。後に分かったのですが、彼女は春樹さんと両思いだったようです。見かけによらず乙女でして、まだ独身ですか、とからかっては笑ったものです。そのたびに殴られましたが」
「はあ……」
老人は自ら話を続ける。きっと、話せるということが楽しくて仕方ないのだろう。少年はそう考え、質問の続きを口にする。
「結局、高嶺蛍とは何者なんですか？」
少年の言葉に、老人は首を横に振る。
「分かりません。ただ、あの頃の全てが彼女の思惑のうちであったことは確かです。恐ろしい話ですよ。一体何者なのか。私が知りたいぐらいです」
惚けるような笑みを浮かべる。
「――私の人生の中で、彼女ほど素晴らしい人物の話は聞いたことがありません。歴史上のどんな偉人、現代を生きるどんな賢人でも、彼女ほど美しく素晴らしいものには成りえないでしょう。今では本当に、彼女の存在は私にとって誇りになっています」
老人の表情は、常に笑顔であった。しかし、その笑顔は全て異なるニュアンスを持っていた。少年は不思議に思う。そして、魅力も感じた。これが、年を重ねることで得られたものなのだろうか。勝手な推測をして、やめる。最後の質問をすることに決めた。他にも聞きたいことはあるが、大切なことはあと一つだけだった。
「――貴方は、その話の中で何か得られたものはありましたか？」
老人は瞳を閉じ、何かを考えるように俯いた。そして、しばらくしてから顔を上げる。
「貴方は、道がある時にはどうしますか？」
「道が、ある時」
突然の話題に困惑し、言われたことを繰り返してしまう。

「それがたとえ現実に存在する道でも、これから自分が進むべき、あるいは進むかもしれない道だとしても。同じことは一つありますね？」
老人に逆に問いかけられ、困惑しながらも答えを考える少年。
「道は、進むためのものですね」
「そうです」
答えは、老人の期待していたものだったようだ。
「あの頃、私は確かに道を歩いていました。人は、その人ごとに道があるでしょう。走り抜ける者もいれば、怖気づいて立ち止まる者もいます。私は、昔は後者のような者でした。ですが、あの日々の出来事の中で変わりました。自分の前に伸びる道を、躊躇うことなく歩くことができるようになったのです。それは、自信ともとれる。ですが違う。私はただ、歩くようになっただけなのです。それは、どうしてか？」
老人は少年に問いかけるような言い方をした。しかし、それは実際に少年へ問いかけたものではないようだった。少年もそれが分かっていて何も答えない。
「私は、その道が何のためにあるのか分かったのです。それから私は歩けるようになりました。何しろ、それは歩くための道ですから。そうだと分かっていれば、歩くことの何を躊躇うことがありましょうか」
「はい……分かる、気がします」
少年は頷いた。確かに自信がなくても、それが歩くためのものだと知っていれば歩けるだろう。老人の言葉に納得する。
「私が確かに得られたと言えるものはそれだけです。私は、歩くための道があると知った。その中で他にも様々なことを沢山の人から教わった。これは、とても価値あることだと私は思います」
それで、老人の話は最後だった。少年は全ての訊くべきことを訊き終え、椅子から立ち上がった。
「今回は、お話有難うございます」

少年は小さく頭を下げる。老人はそれに頷いて答えた。それを確かめると、少年はその部屋を出て行った。

「――おーい、蛍！」

夏休み。少年は、親友の秋元蛍と共に宿題をやっているところだった。内容は、町の老人から昔話を聞き、それを物語にすること。読書感想文を嫌がった生徒の意見を国語の教師が取り入れ、なおさら面倒な宿題を課されることになったのだった。

場所は町で一番大きな公園。設置されているアスレチックは古びており、木がささくれ立って危険なので子供たちが遊ぶことはない。また、最近になって別の場所に新しい公園ができた。この公園に遊びに来るのは、よほど物好きな子供だけになる。

「ここが、お前のおじいさんの言ってた公園だろ？」

少年は、自分よりも先に公園に来ていた蛍の隣に立つ。そして、公園を見回した。

「そうだね。あー、古びてるわ。昔遊びに来たときよりもボロボロ」

蛍はそう言って公園のアスレチックに手を伸ばす。木の表面はボロボロで、ささくれ立っている。いつささくれが刺さってしまうともしれない。

「それにしてもさ、お前のおじいさん、面白いな」

「どこが。私が子供の頃から変な話ばっかりしてる頭のいっちゃったじじいよ」

「いや、それにしては見た感じまともじゃん。多分、昔の体験談を物語っぽく作り変えて話してくれてるんだよ」

「それでも。あの人、もう私にはあの話三回もしてるのよ？　いいかげん分かったっつーの」

怒ったような口調の蛍。だが、少年は分かっていた。蛍が、言うほどあの老人を疎ましく思っていないことを。そうでなければ、自分から宿題にこの話を使いたいなどというはずがないのだ。きっと、

蛍もこの昔話が好きなのだ。たとえ、作り話でも。
「――どんな話にしようか。やっぱり、大筋はじいちゃんの話のまま行く？」
「それがいいだろ？　俺たちが考えたって、あれより面白くなるはずないって」
少年も公園のアスレチックに手を触れる。木は陰の部分は冷たく、日の当たる部分は暖かい。命を感じない温度。不思議と、この公園にはそれが似合ってるような気さえする。
「ふっふー、これで最高評価は貰ったも同然ね」
「宿題で点数稼いでも、テストで点取らなきゃ意味ないぞ？」
「何？　私に物理と数学以外できるとでも思ってんの？」
「やめろ、その変な自信」
蛍は全国模試で物理と数学は県内一位を取るほどの実力の持ち主であるが、他の教科はまるで駄目。成績が平均的に中の下である少年よりも低い。
「とにかく、宿題やろっか」
「おう」
二人は公園を歩いて回る。話のイメージを掴むため、物語に出てきた場所を見て回ろうというのだ。だからこそ、宿題の名目で外を出歩いている。
「――なあ、蛍」
「何よ」
「あの話さ、悲しい話だと思うか？」
少年は歩きながら蛍に尋ねる。蛍はふと立ち止まり、視線を横に向ける。そこにはブランコと、花。野草なのか背が低く、ブランコとブランコの間に咲いている。
「――初めてさ、あの話を聞いたのは小学生の頃だった。その時は悲しい話だな、って思って泣きそうになった」
言いながらブランコの方へと歩み寄る蛍。その様子を、少年はじっと見ていた。

「でも、中学生になったときにもう一回聞かされたんだ。その時は、本当にこれは悲しいお話なのかな、って思った。だってさ」
佳は言葉の途中でブランコに座る。そして、軽く扱いでふわふわと揺れだす。
「誰も、悲しい思いはしてないんだよね。した人も、それを乗り越えた。もしかしたら、この話は悲しい出来事を乗り越える、暖かい話なんじゃないか、って」
「そうだな。俺もそう思った」
「でも、三回目でそれも違うって分かった」
蛍の言葉に驚く少年。そして、少年も蛍に習ってブランコへ歩いていく。
「これは、事実なんだって思った」
「事実？」
「そう。凡人が天才に勝てない。どれだけ頑張っても、願いが叶うわけじゃない。けど、誰かが関係ないところで幸せになる。不幸にもなる。時に辛い思いをしたり、楽しくて仕方なかったり。そんな、普通すぎる事実を見つめた話なのかもしれないって」
事実。その言葉が少年の胸に深く入り込んでくる。少年は安定を求めたようにブランコに座る。そして、蛍と同じようにふわふわと揺れる。
「――私があの物語で好きなのは、そういうところなんだ。結局さ、何も変わってないんだ。どこにでもあるような、主人公が何かを悟ったり、手に入れたりする物語じゃない。誰も、最初から自分にできることしかできない。それ以上のことには失敗ばかり。けど、それでいいんだって。そんなもんなんだって。そういうさ、誰でも嫌がるようなことを受け入れられてるところがすごいと思うんだ」
「……でも、やっぱり夢はあるだろ？　それを目指して頑張ることまで否定されないか、あの物語だと」
少年は一つ、納得できない部分を蛍に訪ねる。蛍はそれに、まるで分かっていたようにすんなりと答えを返した。

「否定されないよ。あの物語は、その夢を叶えて得られるものに期待することを否定したんだ。叶う、叶わない、とかで夢を決めることとかもね。夢そのものを否定したわけじゃない。私はそう思ったよ？」
なるほど、と少年は頷く。が、蛍はさらに言葉を続ける。
「まあ、現実問題そうも行かないけど。生きていくには自分の利益を計算しなきゃいけない。それができないやつは夢も叶えられない。結局、どっちも必要なんだよ。あの物語が言いたいのは、利益本意になるなってことなんじゃない、結局は？」
「そう、だよな。なるほど」
少年は納得したように頷く。それを見て、蛍は安心したように微笑む。
「じいちゃんもこのブランコ扱ぎたかったのかなあ」
そして呟いた。
「逢坂さんって人が実在してたなら、きっと一緒にこのブランコを扱ぎたかったはずだよね。あっちの滑り台とかも滑りたかったのかな」
蛍は指で滑り台の方向を指し示す。少年は苦笑して答える。
「そうかもな。シーソーとかでも遊んだのかも」
「きっと彼女の方が勝って、私のほうが重いとか言ってショック受けるんだ」
「それをおじいさんが慰めるんだろ？」
「ううん、たぶんうちのじいちゃんなら調子に乗ってからかうと思う」
「マジかよ」
少年はブランコから降りる。蛍もそれに気付いて追いかけるようにブランコを降りる。
「――そろそろ、次行こうぜ」
「うん、行こう」
少年と蛍は連れ立って歩き始める。次の目的地は、町に唯一流れ

る川だった。

川辺に二人はじっと座っていた。川の流れる音が耳を擽る。ここが、物語の始まりの場所。老人が、どうでもいいことと称した場所。

「……なあ、蛍」

「なに？」

「どうしてさ、物語の始まりのこの場所を、どうでもいいことだって言ったんだろうな、お前のおじいさん」

「うーん……」

蛍は言われてから考え込む。しかし、答えはいくら待っても出てこない。

「あんたはどう思うの？」

「俺かよ」

聞き返されてから初めて考える少年。

「――多分、今更だからだと思う」

その答えは、少年にとっても案外あっさりと導かれた。自信の持てない結論だが、少年はそれを信じて語る。

「いろいろなことがあって、結局何にもならなかった。だから、その始まりになったことってのは意外とどうでもいいものなのかもな。今となっては」

「なるほど、そんな考え方もありね」

蛍は愉快そうに呟く。

「けど、結局全部私たちの勝手な想像なのよね」

「ホント。頼りないもんだよな」

「うん」

二人が物語について語ったのはそれが最後だった。じっと、川の流れと音を感じて座っている。時折なんでもないことをどちらかが口走り、それに生返事で答える。その繰り返しが延々と続く。

やがて、随分な時間が経った。公園では昼過ぎごろだったはずが、

もう日が低くなり始めている。もう半刻ほどで空が赤くなり始めるだろう。
「――帰るか」
「うん」
二人はゆっくりと立ち上がる。少年は立ち去ろうと足を動かす。が、蛍は動かなかった。
「どうした？」
「あれ」
蛍は言って指である方向を指し示す。その方へ少年が視線をやると、コンクリートブロックがある。一つだけ、川の中で頭を出していた。少し川上の方向にある。
「じいちゃんの言ってたの、あれだよ！」
「おい、蛍！」
蛍はスカートが濡れることも気にせず、靴と靴下を脱ぐと、それを手にとって走り出す。川の中に入り、上流へと遡っていく。川の流れが緩いので、足を取られるようなことはなかった。
少年は呆れながらも後を追う。岸辺を辿って追いかけ、ブロックが近くなると裸足になって川を渡る。少年も、自分のズボンが濡れることを気にしなかった。
「へえー、こんな感じなんだ。ここって」
「何がだよ――」
二人はコンクリートブロックの上に上る。そして、辺りを見回した。自分たちだけが世界から隔離されたような、不思議な気分になる。川の流れが、岸との間を断ち切っているように感じた。そして、何もない。川の中心だから当然だが、辺りには草も何もない。コンクリートブロックの足場と、自分たちのみ。それが、世界から隔離された感覚をさらに強めていた。
「面白いじゃん、ここ。じいちゃんがわざわざ話に入れたのも分かる気がする」
「そうかよ。堪能したか？」

「まさか、まだまだ」
「じゃあ、堪能したら帰るぞ。それまでは、待ってるから」
「ありがと」
少年と蛍は静かにその場に佇んだ。やがて少年が腰を下ろし、川に足をつける。それを見た蛍は笑みを溢し、同じ行動をとる。二人が並んでいる姿は、老人の話の再現のようでもあった。だが、二人にそのつもりはない。自然に、当然のようにその格好を取ったのだ。
「なあ、蛍」
少年が不意に口を開く。
「なに？」
蛍は笑って少年の顔を見る。その表情を見て、少年は安堵のような表情を浮かべる。そして、決意した。自分がずっと昔から言おうとしていたこと。
唇が乾くのを感じる。水で潤わせたい。ちょうど川には水が流れている。少年はそう考えた。しかし、それはしない。そんな動作をはさむのを煩わしく思った。そして、何よりも格好がつかない。そう考え、ただ唇を舐めるだけで終わらせる。
「俺さ、お前のこと――
――ああ、なんだ。

終わってしまったんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4849m/

歩くための道がある

2010年10月8日14時21分発行